
カナナ

Gardenia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンナ

【Nコード】

N7496W

【作者名】

Gardenia

【あらすじ】

中学時代の同級生、カンナが突然田舎に帰ってきた。

仕事の依頼で連絡をもらった琢磨^{たくま}は、元クラスメイトの縁で会ったうちにいつしかカンナに惹かれていきます。

再会したカンナ自身がミステリアスなのか、それとも好きな女だから掴みどころがないのか。

琢磨には判断できないままカンナに惹かれていきます。

一方カンナは、離婚して実家に帰ってきたものの元夫からの嫌がら

せが始まります。それに屈することなく力強く生きていこうとする
カンナ。

子供の頃、人生を自分で決められる大人になりたいと思っていたこ
とを思い出し、今度こそはしっかり自分の足で歩いてみようと思
心
します。

もちろん男にも振り回されることのない人生を！

けれど琢磨に再会してから、何故か琢磨のことを考えてしまいます。

模索しながら新しい形の恋を見つけようとする二人。

どういう結果になるのでしょうか！

1 - 1 (前書き)

+++++

登場人物：

小野寺 カンナ（おのでら かな） 47歳

バツ1

琢磨と正吾の同級生。中学一年のときに引越してきた。

高校卒業後神戸に引っ越したが、その後海外に行っていると噂があった。

離婚して実家に戻ってきた。

秋吉 琢磨^{あきよし たくま} 47歳

カンナとは中学の同級生。

既婚

勉強キライで、落ちこぼれたちと遊んでいたら暴走族になっていった。

その暴走族にもあまり身が入らず、親の言うとおり三流大学を卒業し、親の興した土木建築会社を継いでいる。

現在はいくらも従業員20人ほどの会社の社長。

秋吉 満^{あきよし みつる} 49歳

既婚

建築士。一級建築士として親の土建会社は継がずに近所で独立。スタッフ5人の会社の社長。

琢磨と共同で仕事することも多い。

田所 弘明^{たどころ ひろあき} 40歳

独身

カンナの顧問弁護士

代々弁護士一家の御曹司。

本人は争いが嫌いで、主に財産管理の分野で活躍している。

山野やまの 正吾しょうご 47歳

既婚

琢磨やカンナの同級生。

中学のとき、カンナの友達と付き合っていたためカンナともよく遊んでいた。

喫茶店経営者

秋吉あきよし 陽菜はるな 15歳

琢磨の次女 高校一年生

カンナを崇拜している

場所設定：関西圏の人口約6万人ほどの地方都市

大阪、神戸などには車で2時間ほどかかる

+++++

まだ時折肌寒いものの、もうテレビでは桜前線の情報が聞こえている。

現在はすでに47歳になりめつきり体力の衰えを感じる琢磨。

子供の頃はガキ大将で中学時代は不良少年。なんとか大学だけは卒業し、田舎に帰って親の家業を継いでいる。

自分で建てた家もある。妻や子供にも不自由はさせていない。荒くれだが気心の知れた従業員も居る。頭の痛いことがあるとすれば最近別れたはずの女が電話をかけてくるか、不景気を理由に支払いを渋るクライアントが時々居るくらいだ。

今朝の琢磨は機嫌が悪かった。

というのも、嫁が新しい服を買ったということで朝食中ずつとうるさかったのだ。

好きなものを買えと言ってはいるが迷うのが女の楽しみということ、季節ごとに毎回同じような話を聞いている。

朝食が終わる頃ようやく、今度東京に行く長女と一緒に上京して住まいの準備と買い物をするればいいと言うことで一件落着いた。

嫁にした女は小柄でくるくるとした目がかわいい女の子だったと思いき出すと微笑まずにいられないが、

今は3人の子供を産み育て、しっかりと肝っ玉母さんだ。体系も少しぽっちゃりしてきた。

長女はこの春から東京の大学に行く。

長男は大学受験に突入するし、次女は今年入る高校に困るくらいにデキが悪い。

実際に、ツテを探して頼むこみようやく高校に入れたのだ。

逃げるように事務所に来てお茶を飲んでみると、「社長、山野コーヒーの店長さんが見えです」と事務員が内線で知らせてきた。

中学でクラスメイトだった山野正吾は、一度もこの街を出ることなく地元で喫茶店を始めた。自家焙煎という触れ込みのコーヒー豆が美味しいからと事務員が定期的に注文しているようである。

取り立てて仲がよかったこともなかったが、クラスメイトのよしみだと正吾がいつも言うので、従業員達は社長の友達の店としてよく利用しているようだった。

電話で注文すると正吾は手の空いた時間にコーヒー豆を届けにくる。いつもは事務員に渡して琢磨には会わずに帰るのだが、めずらしくこともあるものだ。

「通してくれ」と琢磨が言うと、「どうも、どうも！」と相変わらずの惚けた口調で正吾がドアを開けた。

「いつもご注文ありがとうございます」と言うので、「いやいや、いつも届けてもらって悪いな」と一応社交辞令を言う。

「今日は何か？」と促すと、「えーっと、同じクラスだったカンナつて覚えてるだろう？」と言った。

「結構お前とは喋ってたような気がするけど？」と言う。

カンナといえばあのカンナしかないだろうかと、目を細めながらおぼろげな記憶をたどってみる。

「小野寺カンナだよ」と正吾が言った。

「ああ、小野寺な。20年以上も前のことだぞ、ちょっと待て。顔ははつきり思い出せない」

「そうか？ 結構印象の強い子だったけどなあ」

「お前達はよく一緒に遊んでたんじゃないか？」

「ああ、カンナと麻里子が仲良かったからなあ」と言う。

正吾はその当時同じクラスの麻里子と付き合っていたのだ。

「なんとなく思い出したわ。はつきりとじゃないけど」と正吾が言うと、

「昨日ふらりと店にやってきて、お前のこと聞いてきた」

「ふん」

「何でも仕事の相談をしたいらしい」

「へ？仕事かあ？引越してきたんかな」

「あいつさ、長いことここ離れてたから、お前がカンナのこと覚えてるかどうかわからんと心配してた。一応俺から話してみてくれて言うんだわ」

「直接電話くれればいいのに」

「うん。それでも最初は電話かけ難いんだと」

「そうなんか」

「話聞いてくれるようだったら、2〜3日のうちに電話するってさ」

「わかった」

「あのさ、カンナ、離婚して帰ってきたらしい」

「へえ。まあ今時珍しいことでもないさ」

「ああ、そうだな」

「オバサンになってたか？」

「んん、ま、会えばわかるわ」と正吾はニヤリと笑って帰って行った。

1 - 1 (後書き)

主人公達の年齢が高いのですが、琢磨に大学生になる子供が居ることを想定したため47歳になってしまいました。

結局、小野寺カンナから琢磨の事務所に直接電話が入ったのは3日後だった。

ちょうど銀行から帰ってきて、お茶を飲んでいる時だった。

「社長、小野寺さんという方からお電話です」と事務員が取次いで、「はい、お電話変わりました」と言つと、

「秋吉様でいらっしゃいますか？」

わたくし、小野寺カンナと申しまして、中学の同級生だった者です。数日前に山野正吾さんに連絡をとりまして、この電話番号を教えてくださいました。

覚えていただいていると有難いのですが・・・」とゆっくりと聞き取り安いスピードで低めの声が流れてきた。

綺麗な標準語だ。

琢磨は気後れしながらも、「おおっ！小野寺か。3日前に正吾が言いに来たよ」とわざとくだけた言い方で返した。

カンナは「思い出していただけました？」と丁寧に聞いて来た。

「気取って電話してくるから、百科事典のセールスレディかと思つたよ」と言つて笑つと、電話の向こうでもフフンと笑つたようだった。

確かに正吾が来た時は、最初は顔を思い出すのに時間がかかったが、

一度思い出してみるとはつきりと鮮明な記憶が甦っていた。カンナとは学校で、クラスに居る時だけはよく話していた。出席番号も近かったので、席も近くになることが多い。しかし、教室の外に出ると一度も口をきいたことはなかった。放課後や休日には街で見かけることがあっても、琢磨は絶対に声をかけなかったし、カンナは気づきもしなかった。

彼女には特別に親しい友人が2、3人居るようだったが、それ以外の人は、秀才と呼ばれている奴や反対に不良と呼ばれている奴でも適度な距離を保って気さくに話せる不思議な女の子だった。しかし、大人しめの普通のクラスメイトとはあまり話してなかったように思う。

その他大勢のようなグループは彼女の目には映っていない、そんな感じだったと覚えている。

美人ではなかったが愛嬌があり、笑う時は天真爛漫に笑い、ちょっと天然で、男子の間では結構人気があった。

でも、確か誰とも付き合ってたなかった。

人気があつたのに誘い難かったのは、ひとえにカンナが突出して成績がよかったからだろう。学年でいつも3番以内に入っていた。

もちろんクラスでは1番トップの成績だ。

琢磨は落ちこぼれで、しかも暴走族紛いの不良仲間に入っていたので、声をかけられないクラスメイトの気持ちがよくわかる。

誰が好き好んで自分より頭の良い女に誘いをかけられるというのか。

「で？」と琢磨が聞くと、

「実は、家を建てようと思っていて、業者のこととか相談に乗って

もらえればなと思うの」とカンナは話を切り出した。

「おたくの会社は長年信用と実績があるし、基礎のほうは是非お願いしたいと思ってますが、

設計と建物の施工に関しては、長くこの土地を離れていて知り合いが少ないので、

良いところの情報か、紹介して頂けたらと思っっているんです。

一度お時間を作っていただけないでしょうか？」

「なるほど」

「お話だけになるかもしれませんが、電話よりもお目にかかって説明できないかなと思っています」

少し時間をかけて、琢磨は仕事用の会話に切り替えた。

「わかりました。とりあえずお話を伺いましょう」

「よかった。私としては今日から3日間の間でお時間いただけると助かります」

「急ぐ話なんですか？」

「取り立てて急いではないのですが、私の中ではかなり時間をかけて考えてることなので、

これから実行に移していきたいと思っているんです。

それに来週はちょっと街を離れるかもしれないので・・・」

琢磨はカンナの考えを早く聞いてみたい気になってきた。

「そうですね、ちょうど今日の午後は時間がとれます。

次は、明々後日の午後ですね」と言つと、

「午前中にはお時間ないですか？」と聞かれた。

「今週は、午前中は現場に行くことが多いので・・・」と琢磨が言うつと、

「では、差し支えなかったら本日午後に伺います。急で申し訳ないですね」とカンナが詫びた。

「以前、お父様の会社があったところでよろしいのかしら？」とカンナが聞いたので、

「ああ。でも、今はその向いに四角い2階建ての建物になってるから。」

看板があるからわかるとおもう。事務所は2階になってるからそこに来てくれ」と琢磨は答えた。

「それから、丁寧な言葉はやめてくれ」と言うと、カンナは笑いながら「わかりました」と答えた。

午後2時の約束にして電話を切ると、ちょうど正午になった。

約束の午後2時。その数分前に窓の外で車の停まる音が聞こえた。

窓から覗いてみると、白い国産車のワゴンがとまったところだった。小柄な女性が後部座席から紙袋を2つ取り出し、建物の入り口を探している。

小さく頷くとその女性はゆっくりと入り口に向かって歩き出した。顔ははつきり見えなかったが髪は短いほうだった。毛先が跳ねるように揃っていない。

琢磨は大人しく社長の椅子に座って待つことにした。

1 - 2 (後書き)

次の更新は、10月4日 午前7時を予定しています。

事務所の入り口がざわついたかと思ったら、ドアがノックされた。

「はい、どうぞ」と声をかけると、ドアが静かに開けられて、スレンダーな女が顔を覗かせた。

入っては来ずにドアのところに立ったまま、「秋吉社長さん？」と聞いた。

低めにゆっくりな電話で聞いた声だ。

「小野寺か？」

「はい。事務員さんに友達だからって案内を断ってしまいました」と笑った。

「びつくりしたよ。まあ、入ってくれ」と言って琢磨は立ち上がり、ソファを勧めた。

カンナは、「差し支えなかったらこっちのほうが・・・」と言って、ミーティングテーブルを指差した。

「ああ、どこでもお好きなほうに」と笑って琢磨もミーティングテーブルに近づいた。

カンナが座ってから琢磨も椅子を引いて座る。

「オバサンになったでしょ？」

「いやいや、変わってないのでビックリしたんだ」

「そんなことないわよ。やっぱりお肌は歳相応だわ」と言って、自分の頬に手を当てたカンナはどう見ても40歳を過ぎているようには見えなかった。

「俺もオジサンだよ」と琢磨が言うと、カンナは琢磨をじっと観察してから「良い感じじゃないの」と言った。

何故か琢磨はほっとした。

「もっとオジサン臭い人も居るもの」

「まあ、仕方ないな。オジサンなんだから」

「オジサンとオバサンで仲良くしてね！」

「ああ。何年くらいになるんだ？」

「中学一年と三年のとき同じクラスだったから、、かれこれ、何年かしら？」

「22年か、そのくらいだなあ」

「じゃ、私は12年前くらいかな」と言って済ました顔をしている。
「おいおい、同級生なのにそれはないだろう」と呆れて笑ってしまった。

二人で笑っているところに、事務員がお茶を運んできた。

「先ほど、こちらのお客さんからお菓子をいただきました」と事務員が琢磨に報告した。

「氣い遣わなくていいのに」と琢磨が言うと、

「ちょうど東京から取り寄せたのがあったのよ。お口に合えば良いんだけど？」とカンナは事務員にニツコリ微笑んで声を掛ける。

「どうせ男性は甘いものをあまり食べないだろうから、貴女専用に思ったんだけど・・・」とカンナが言うと、事務員は嬉しそうに「ありがとうございます」と言ってペコリとお辞儀をして部屋を出て行った。

「悪いな」

「いえいえ、今日も電話で気持ちよく取り次いでもらったし、これから度々電話するかもしれないから」

よく見るとカンナには子供の頃の面影が残っていた。

年齢を言わなければ30歳後半くらい、よく見たところで40歳は超えてないと思わせる。

その若さが昔に近いような印象を受けたが、雰囲気は全然違った。
街で遠目に見かけたら、いや、つい先ほど部屋の入り口に立ったと

きでさえ、来ることを知らなければ初対面の女性だと思っただろう。

「ついでにこれを先に渡しておきます」と言っ、カンナは紙袋を差し出した。

「何？これ」

「お酒は飲むんでしょ？」

「ああ、飲むけど・・・」

「珍しい焼酎つてのがあったから持ってきたのよ」

「いいよ、そんなの」

「まあ、そんなこと言わずに。私は焼酎を飲まないから、貰ってよ」

袋の中を見ると、カンナが言うようにほんとうに珍しい焼酎だった。「これ、どうしたの？」と琢磨が聞くと、「友達が手に入るっていうので1本だけ買っておいたものなの」

「すごいな、これ」

「焼酎飲めるのだったら、遠慮なく納めてよ」と言っ。

「でも、貰えないよ、こんなの」

「一口飲んでくれれば良いから。そうしたらこっちの思う壺なので」と言っ、カンナはニヤニヤ笑っている。

「えっ？」

「あのね、こういうのでも貰ってくれないと頼み難いのよ」

「ほお？」

「そのうち、その焼酎だけじゃ割りにあわないって思つかもしれないんだし」

「ややこしいことなのか？」

「ん〜、全然ややこしくはないんだけど、今回の件は私がかかなり我侭言いたいので。」

先に賄賂を渡しておきたいのよ」と言っ、カンナは苦笑した。

「そうなんだ」

「うん。そうなのよ。」

こっちに家を建てるのを迷ってんだけど、時間もあるし、やってみようかなと思って。

でね、なんかもうあまり妥協したくないなあって思ってた」

「ふむ」

「電話でも言ったように、こちらにはあまり知り合いが居ないというのと、

私が建築に関して素人だということ。

なのに思い通りのものを作りたいと思っている。

私と現場の間にプロが入る必要があると思うんだ」

「なるほど。充分にややこしそうだな」

「でしょ？だから、それは話を聞いてくれるだけでも貰っていただきたいの」

カンナは琢磨の顔をじっと見て返事を待った。

「わかったよ」と、ようやく琢磨が承知した。

お茶を一口飲んで、その湯飲みを横に置き、カンナは「じゃ、簡単に説明して良いかしら？」と言いながら鞆のなかから紙を取り出した。

琢磨も椅子に座りなおした。

まず、カンナは図面を一枚琢磨に渡した。

「これは土地の・・・見取り図っていうの？よくわからないけど。そこに住所が書いてあるわ。広さもそこに書いてある

建物と造園も含めて考えているから、それぞれの設計図が出来上がってから基礎にとりかかるので、実際の着工はまだまだ先の話になります」

「うん」と相槌を打ちながら琢磨は図面を見た。

「これって、隣街だよな？」

「そうそう、高速に案外近いところよ」

「インターの手前を回り込んでちよつと行っただころだろ？」

「わかる？」

「ああ、あの近所の道路作ったから」

「高速道路も関わってたんでしょ？」

「ああ」と琢磨が認めると、「やっぱりね」カンナは頷いた。

「まあ、時間のあるときに一度見ておいてよ。ついでがあつたらだけど」

「わかった」

「私がどうしてここに電話したかと言うと、公共工事もたくさん経験があつて

しかも信用できる仕事をするからなの」

「ほお。なぜわかる？」

「中学の同級生だもの」と言つてカンナが笑つた。

「例えば、工事中に起こりうるいろんなことを考えるとね・・・」
とカンナは一息ついた。

「基礎の鉄筋、っていうのかな、鉄のワイヤーを組んでコンクリートを流すでしょ？」

そのときに、ゴミとかも混ぜちゃう人がいるんだってね。

タバコの吸殻とかコーラの空き缶とか・・・いろんなものが落ちちゃうらしいんだけど」

カンナはニヤニヤしながら話している。

「貴方ならそういうところにまでちゃんと気を配ってくれるような

気がする」

「それは当然だろ」と言つて琢磨は、「同級生なんだから。特別サ―ビスで空き缶が落ちないようにすればいいんだろ?」とニヤリと笑つた。

「ありがと。じゃ、これで土木関係の業者は決まつたわね」と言いながら、カンナは椅子に座りなおした。

「さて、肝心の建物なんだけど、設計だけ東京の建築家に作らせてもいいかしら?」

「ああ」

「その場合、いわゆる普通じゃ考えられないような図面が来ても大丈夫?」

「ちゃんとした設計図さえあれば、その通りに作ればいいんだから楽だよ」

「ひとつ私が躊躇しているのは、有名な建築家の先生つて施主の言うことを聞いてくれないのよ・・・ね」

「ああ、そうだな」

「自分が建てたいものを作るから、私の意向は・・・まあ、聞いてもらえないことが多い」

「そんなものじゃないか?」

「そうなのよ。そんなものなのよね」

カンナは言葉を選んでいるようだった。

「私にもプランっていうものがあるんだから、この田舎でも、比較的しっかりした建築の経験者で、ある程度施主の意向にも耳を貸してもらえりような設計してくれる人は居ないかしら?」

「うゝん」

「ついでに造園家とも連携してる人が居ればいいんだけど」

「連携してなくても、ちゃんとやる人は居るよ」

「まあ、それはそうなんだけど。私としては自分で切ったり叩いたりできないから、工事が始まる前に打ち合わせを充分にしておいて、実際に始まったらあとは待ってるだけってのが望ましいんだけど・・」

琢磨は黙ったまま考え込んでいる。

もちろん琢磨には建築家でも設計者でも、何人も知ってはいたが、果たして最後までこの施主を扱いきれのかどうか、相性が良くないと最悪の事態も予想できる。

「できれば、役所とか学校とか、ある程度大きな建物を作った経験がある人がのぞましいわ」

「うっくん」

「お茶のおかわりをいただいていいかしら？」とカンナは首をすこし傾けてニツコリと微笑んだ。

入れ替えてもらったお茶を飲みながら、カンナは思い出したように言った。

「この会社、貴方が継いだのね。お兄さんが居たと思ったけれど」

「ああ、兄貴は土木は嫌だって設計のほうやってる」

「家の設計？」

「ああ、一級建築士だ」

「兄弟で組んでやることも多いの？」

「土木は入札の仕事が多いからな。でもたまに同じものを手がける時もあるよ」

「そうなんだ。お兄さんって学校とか建てたことある？」

「ああ、結構やってる」

「そっか」とカンナも考え込んでいるようだったが、

「お兄さんの会社に打診してもらえないかな？」と言った。

もしかしてコイツは初めから兄貴を紹介してほしかったのかな、と琢磨は一瞬勘ぐった。

「打診じゃなくても、紹介だけしれくれたら後は私から電話するけど？」とカンナが言った。

それにはすぐに答えずに、図面を見て、「これって結構広いな」と言った。

「ま、現地を見に行けばわかるけど、写真もあります」と言って、カンナは一冊になったファイルを取り出した。

数枚の写真を見せながら土地の説明が続く。

「このように一部は宅地になっていて古い家が建ってるから、この場所をメインにできるけど、他には一応同じ宅地で登記されていても畑になっている部分があるの」

角度を変えた写真を見せながら、「全体の傾斜はこちらに流れてて・
・、6 mの道路に面したほぼ平坦な土地だから工事は簡単よ」と人差し指で写真の上をなぞりながら説明していく。

細くてしなやかな指だ。爪は適度な長さで綺麗な色に塗られていた。

「ところで、そのお兄さんはどんな建物を設計したの？」

「俺達が通っていた中学も兄貴のところだったなあ。もちろん基礎は俺んところだったけど」

「へえ」

「あ、市民病院も、消防署もだな」

「そうなんだ。消防署って本部の？」

「ああ、そうだよ」

「ふん。あの消防署って結構カッコ良いなと思ったんだわ」

なるべく気軽さを装って聞きながらもカンナは、あとで中学校と病院を見にいくと思っていた。

「あ、それ見ていいか？」とカンナが持っているファイルを指差した。

「ええ、良いけど？言葉で説明し難いから、好きな建物とかインテリアの写真を集めているだけなんだけどね」と言いながらファイルを琢磨から見易いようにして広げた。

アプローチから始まって、玄関ドア、花壇、家の概観やインテリアの参考写真が丁寧に整理されていた。

「ほら、私っているんなものの固有名詞を知らないから、ビジュアルで説明できるようにと思って」

と恥ずかしそうに頬を赤らめた。

そのファイルは素人の割にはよく出来ていた。

各スタイルが色別になっていて見易い。

さらにファイルの後半は硬質な素材とテキスタイルに別れていた。

日本のものだけに限らず、海外の写真もあった。

「よくまとまっているじゃないか」とざっと見て琢磨が言うと、
「暇だから」とだけ言ってカンナがまた笑った。

琢磨はまた最初の土地の図面に戻り、「それにしても結構広くないか？ここ」と言うと、

「そうでもないよ。まあ都会に比べたら広いかもしれないけど」とカンナが琢磨から戻された自分のファイルをパラパラと捲りながら答えた。

「家族で住むのか？」

「ん〜、どうなるのかな。親は今の家があるし、いずれは親の面倒見るのかなと思うけど、当分は私一人だと思う」

「そうか」とだけ言って、琢磨は携帯電話を取り上げた。

「兄貴？今良いか？」と琢磨は一級建築士の兄に電話した。

琢磨が電話を終えると、カンナは嬉しそうにニヤッと笑った。
机を回り込んで、名刺を一枚出す。

カンナはその名刺を大事そうに受け取って、「じゃ、家に帰ったら電話してみる」と言った。

「ああ。今も聞いていたとおり、ほんとにつなぎだけとったから、あとは自分でやってくれ。まあ、心配してないけどな」

「はい。自力でなんとかしますわ。秋吉君に連絡取るのはかなりあ
とになると思うけど、気長に待ってて」

いつのまにか秋吉社長から秋吉君に変わっている。

20年少々会ってなかったことを感じさせず、同級生の会話になっていた。

「そうだ、お前の電話番号聞いておこうか」

琢磨がそう言うとかンナは素直に頷いて、電話番号を交換した。

「とりあえず、名刺も渡しておくね」とカンナから差し出された名刺には名前だけが印刷されていた。

裏を返すと、小さく住所と電話番号が書いてある。

「とりあえず連絡先が必要かと思って、急いで作ってきた」とカンナは言った。

「んじゃ、俺の名刺も渡しておくわ」と言って琢磨が名刺を出すと、「サンキュー」と小さく言ってカンナはそれも大事そうにバッグに仕舞った。

「そういえば同窓会とか来てないな。他にも4〜5人では集まることあるんだよ。連絡しようか？」と琢磨が言くと、

カンナは少し考えていたが、「一応、まだ当分はそういうのいらないかも……。あまり覚えてない人が多いんだよね」とやんわり断ってきた。

「いや、滅多に無いし、そのうちってことで」と琢磨もあまり勧めずにおいた。

正吾が言っていたようにカンナが離婚して戻ってきたのなら、しばらくは誰にも会いたくはないだろう。

カンナが車を運転して出て行くのを見送りながら、お互いに個人的な近況を尋ねなかったことに気がついた。

カンナは設計士を紹介して欲しいと言って、兄貴の名刺を持って帰ったわけだから目的は果たしたことになる。

そんなものかと琢磨は思ったが、そういえば携帯番号を交換したのを思い出した。

ただ、カンナには用がなければ電話をしてはいけないような気がしていた。

上着を取り上げて車の鍵を確かめた。

「現場に行つて来る」と事務員に言残して、もうすぐ終了するはずの工事現場に向かった。

現場に到着すると、琢磨の右腕として働いている玉置たまきが寄つてきて状況を説明する。

4月から年度替りになるので、今月中に終わらせないといけない工事だ。

納期に遅れるとつぎの公共工事を取るのは難しかった。

ひとつひとつに頷きながら現場を見渡していると、電話の着信があった。

長兄の満みつるからだった。

玉置に手を上げてから少し離れて電話に出た。

「さっき電話で言っていた女性から電話があつたよ。小野寺って言うんだけどその人だろ？」

「ああ、同級生だつたんだ」

「一応、話を聞くことになった。来週、事務所に来ることになったよ」

「そうなんだ。まあ、適当によろしく」

「わかった。ところで、どのくらいの大きさになりそうなんだ？」

「忙しいの？兄貴は」

「これから着工のを1つ抱えてるくらいさ」

「ん〜。土地の図面を見ただけだけど、あ、写真も見ただけ。

楽な形状をしている。ただ、結構広いよ」

「そっか。で、どのくらい？」

「家の大きさはわからんが、土地は、5000？は軽くなる」

「え？」

「坪だと1500ちよいだ」

「ふゝん」

満はしばらく考えこんでいた。

「電話をかけてきた女性が施主か？」

「うん。そのようだ」

「大丈夫かな？」

「それは兄貴が調べろよ」

「いいのか？」

「同級生だったんだから、俺は調べたくないよ。財布の中まで見るのは失礼だろう」

「お前が失礼つてのは・・・笑える」と満はほんとうに笑った。

「ただ、今日小野寺に会ったけど、服装は半端じゃなかった」

「ほお」

「兄貴も会えばわかるよ」

「そうか」

「じゃ、現場なんでもう切るよ。調べてヤバそうだったら知らせてくれよ」

「ああ、わかった」

「じゃあな」と言つて、兄貴からかけてきた電話だったが琢磨のほうから電話を切った。

琢磨は、カンナの華奢な手首にまるで腕の一部のように付いていた腕時計のブランドを知っていた。

最高級車が軽く買える値段のはずだ。

兄貴は念のためにカンナの資金背景を調べるだろう。

それは仕事を引き受ける前に必ずすることだ。

琢磨はただその役を自分がしたくなかった。

現場での確認が終わって帰り道に、携帯にメール受信のお知らせがあった。

事務所に車を停めて、携帯を開けるとカンナからのメールだった。

『今日はありがとうございました。さっそく秋吉設計さんに電話して、来週アポがとれました』とだけのメッセージだった。

カンナらしいと思いながら琢磨は車を降りた。

琢磨の会社は、以前は秋吉組と言っていた。

それを父が時代の流れだと言って秋吉土木建築株式会社に変えたのだが、琢磨は近々社名を変更しようと思っている。

兄のところが秋吉設計建築事務所なので紛らわしい。

それに、引退したといってもまだまだ元気で、とんでもないことを言い出す父親への牽制もあった。

いろんなことを考えていると職人たちが帰ってくる時間になったらしい。

事務所がにわかに騒がしくなった。

玉置を呼んで、工事の終了日を言い渡す。

「来週の火曜日にあげてくれ」と琢磨が言つと、「キツイですよ、火曜日は」

「日曜日もやれるだろう？」

「そりゃやれと言われればやりますけど、皆はどうかな・・・」

「3月末が忙しいというのはわかっていることじゃないか」

「はぁ・・・」と即答しない。

「俺から言えばいいか？」

「そうしてもらえると助かります。若の命令だったら皆やりますよ」

「若は止めろって。せめて社長と言え」と笑いながらロツカールー

ムに移動した。

「皆、聞いてくれ！」琢磨が声を出すと、皆一斉に琢磨のほうを見る。

「これから完成までは酒は禁止だ」

「えゝゝゝ、そんなゝ」「横暴ですよゝ」「酒抜きとは人生まっくらだ」とか口々に騒ぎ始める。

「いつものことじゃないか」と琢磨が笑いながら、「来週火曜日までに今の現場を終わる」

「ひえゝ、マジですか？」「やつぱり・・・」「3月だもんなあ」といゝんな声が上がる。

年度末恒例のことなので、従業員もすでに半分諦めモードだ。

「少々無理してもらわなければならない。そういう時は事故も起き易いので、充分に注意してくれ。詳細は玉置が言うから」

まともな返事をする者は誰もいなかった。

「その代わり、終わった日は食べ放題、飲み放題だ！」

「やったゝ！」「頼みますよゝ！」「抱き放題もつけてくれゝ」と勝手なことを言っている。

「工期はずすと、次の仕事が来ないからな。飯のため家族ために頑張るように！」と言いついて、あとは玉置に任せて琢磨はロッキールームを出た。

翌日からは琢磨も現場に出た。

ほとんどは監督仕事なのだが、手伝えるところは手伝うことにしている。

そして皆が休日出勤している日曜日、琢磨は妻と長女を車に乗せて空港まで送っていった。

東京の大学に入学した長女の住まいや身の回りを整えるため、早めに上京するのだそうだ。

街から電車を乗り継ぐより、車で1時間半ほどの空港まで行ってそこから飛行機を使ったほうが断然早いのだ。

妻は車の中でずっと東京のデパートの話をしていたが、最後に琢磨に長男と次女の世話を頼んだ。

「どうやら2人の子供たちのことを忘れていなかったらしい。

「はいはい」と苦笑しながら返事を返した琢磨だ。

長女と妻のチェックインを終え、売店などを見ている二人の後ろをぶらぶらと着いて歩いているときだった。

スレンダーな良い女が居るなと思ったら、カンナが何か品物を手にとって見ていた。

箱をレジに持っていて会計を終えたカンナが振り返った時、琢磨と目があつた。

だが、二人とも声をかけなかった。

ほんのかすかに頭を下げたカンナはそのままターミナルの出口に歩き出し、琢磨は長女に「もう行くから」と言われて、妻と長女に向き直った。

二人を見送り、ターミナルの出口を出たところで、カンナがバス乗り場で時間表を見ているのが目に入った。

カンナはバスの時刻表を見つめていた。

琢磨がそのまま観察していると、腕時計と時刻表を見比べて、彼女はほおつとため息をついた。

カンナの顔が動き、何かを探しているようだ。

隣のバスの停車位置まで行き、また時刻表を睨んでいる。

ぱつと見には小さく見えないのだが、女性としては普通くらいの身長だろうか。

手も足も細くてしなやかそうな印象だ。ふつくらと膨らんだ髪型が細いうなじをさらに強調しているように思えた。

風に揺れる髪が邪魔になるのか、手でかき上げる様に髪を押さえて頭を動かすと琢磨のほうを見た。

ようやく琢磨に気がついたらしい。

ほんの少しの間を置いて、カンナは抗議するような目になった。

琢磨はゆつくりとカンナに近づいて、「よおっ！」と手を上げた。

「いつから見てたの？」

「ほんの少し前からだよ」

「いつから？」キツイ声で聞いてくる。

「あつちの時刻表を見てたのは知ってたかな・・・」

「酷いわね、こそこそ見てるなんて」

「こそこそなんか見て無いぞ。出てきたらまたま見えたただけだ」

「煙草吸ってたのね」

カンナはクスツと笑った。

別に怒っているわけじゃないことがわかって琢磨もほっとする。

「どこかに行つて来たのか？」

「うん。ちよつとね」

カンナはそれ以上は言わなかった。

「誰かを迎えに来たの？」とカンナが聞いた。

「いや、娘が東京に行くつて言うから送つてきたただけだ」

「ふん」

「帰るのか？一緒に乗つて帰るか？」

カンナは少し考えていたが、「迷惑じゃなかったら乗せてもらおうかな」と言つた。

「じゃ、車はあつちだ」と言つて駐車場のほうを指差した。

車までの間、並んで歩きながら、「さっきのが娘さん？」とカンナが聞いてきた。

「見てたのか？」

「ちらつとね」

「一緒に居たのは奥さん？」

「ああ」

娘が東京の大学に入学するので付き添いだと琢磨は説明した。

助手席を開けてやると、「あら、こつちでも良いのに」と後部座席を指差しながらカンナが笑つて言つた。

「何様だよ」と琢磨は呆れて言い返したが、「あはは、助手席でも良いよ」と言つてカンナがすべるように助手席に座つた。

座る時にカンナの足首が見えたが、見ないフリをして琢磨は運転席に回る。

琢磨が車を発進させて駐車場を出ると、「この車、乗り心地良いわね」とカンナが言つた。

「そうか？」と琢磨は何気ないように返したが、「さすがだわ。ちゃんと調整してるでしょ？」とカンナが言う。

「まあ、普通には」と琢磨は答えたが、足回りは気になるので自分の車は昔なじみの修理工場に持っていてマメに調整してもらっていた。

「音楽かけてもいい？」とカンナが聞くので、「好きなの聞いていいぞ」と言うと、FM局の1つを選んだ。
それからしばらく何も話さずに運転していた。

「そうだ、腹空いてないか？」と琢磨が沈黙を破った。

「え？ああ、お昼ご飯？」

「ああ、途中で軽く食べないか？」

「そうだね」

「途中で食べて、お前を送っていったら現場に直接行くからちょうど良い」と琢磨が言うと、

「何食べる？」とカンナが聞いたので、了承したのだろうと琢磨は思った。

「何でも」

「蕎麦？うどん？ラーメン？洋食？中華？」とカンナが次々に聞く
「どっちかと言うと和食系のほうがいいな」と琢磨が言うと、「うゝゝん」とカンナは考えていたが、

「次のインターで降りてもらってもいい？」と言った。

「良いけど・・・？」と琢磨は言ったものの、次の出口はは山の中だ。

「ちよい、ゆっくりめに走ってて」と言ってカンナは電話を掛け始めた。

どうやら知り合いの店らしい。

現在地を言って、あまり時間がないから到着したらすぐに食べたいと頼んでいる。

親指と人差し指で丸と作って琢磨に知らせ、カンナは礼を言ってか

ら電話を切った。

カンナは「インター降りたらほんの数分だから」と言って、琢磨に道の説明を始めた。

高速を降りて5分ほどだった。

有名な温泉地の端っこに位置する旅館の別館で、昼食だけ一般客をとっているらしい。

近くにはゴルフ場も点在するので結構利用客の多い温泉地だ。

カンナの誘導で建物に一番近い駐車スペースに車を止めると、あたりを見渡して「こんなところにあるなんて知らなかったなあ」と感心したように琢磨が呟いた。

車の音を聞きつけたのか、店の人が近づいてきた。

「ようこそ。よくお出くださいました」と係りの女性が丁寧に礼をした。

「こちらこそ無沙汰しております、女将さん」とカンナが言っている。

「とりあえず中に・・・」と言って二人は女将の案内で小ぶりの部屋に通された。

カンナが先に下座についたので、琢磨は自然に上座に座ることになった。しまった。

「ご紹介しますね。こちらはここの女将さん。以前から親しくさせていただいているの。」

そしてこちらは中学時代の同級生で秋吉さん。空港でばったり会って、帰り道が同じだから送ってもらってるの」とカンナは卒なくふたりを紹介した。

そう言ってる合間にも他の女性が、お絞りとお茶を運んできた。

「本館はほんとに建物は広いんだけど、お庭はこの別館のほうが侘びてて好きなんです」とカンナが琢磨に説明する。

琢磨は「この庭は落ち着きますね。時間をかけないとこの風情はでないでしょう」と女将とカンナに頷いた。

「秋吉さまは、ゴルフもなさるのでしょうか？この近くはゴルフ場も多いですから、お近くにいらしたらいつでもお寄りくださいませ」と女将が言う。

カンナは驚いたように「この女将さんが滅多にこういうことは言わないのに」と笑った。

すでに料理も並べられていて、「今日はお急ぎと言うことですから、今回はゆっくりとお話させてください」と言って料理を勧める。

「今日はお弁当仕立にさせていただきましたと言って礼をして女将は下がっていった。

「さ、温かいうちに食べましょう」と琢磨に箸をとることを勧める。蓋をとると色鮮やかな料理が箱に詰まっていた。

味噌汁の出汁の香りがただよって、琢磨は急に空腹を感じた。

二人は黙々と料理を食べた。

琢磨はご飯と味噌汁をお替りして、部屋の隅に待機していた女性が給仕してくれる間だけカンナは口を開いた。

「ここで正花堂弁当しょうかうべんどうを食べるのは久しぶりだね。普通は一品ずつ出てる懐石なのよ」

「そうなんだ」

「急ぎの時だけお弁当にしてくれるから・・・」と言うと、二人はまた黙って食事を続けた。

食事が終わると、すぐにデザートとお茶が出された。

カンナは「ちょっと失礼します」と言って席を立った。化粧直しにでも行くのだろう。

給仕の係りが「こちらのわらび餅は本蕨ほんわらびを使っており、風味を活かすためにあまり甘くしておりません。どうぞお召し上がり下さい」と琢磨に勧めるので、一口食べてみた。

ほんとうに甘くなく、するすると入ってしまいあっという間に全部食べてしまった。

席に戻ってきたカンナも嬉しそうに「あ、蕨餅だ！」と言って、嬉しそうに一気に食べてしまうと、「さ、行きましょう」と再び立ち上がった。

玄関には女将も見送りに出てきて、「またお越し下さい」と頭を下げる。

カンナは「調理長にお礼をお願いしますね。急で申し訳ないとお伝えください」と声をかけると、「あの人はカンナ様の言うことならなんでも嬉しいんです」と女将は嬉しそうに笑った。

「では、秋吉さま。運転お氣をつけて。是非またお越しくださいませ」と琢磨にも丁寧な礼をした。

車に戻って、何人かに見送られながら高速道路に戻る。

「あ、お会計してない」と琢磨が急に気がついて大きな声を出した。

「いいのよ。今日は送ってもらったから、私のほうで」

「そんなわけには・・・」

「ほんと。あまり高くないし。気にしないで」

琢磨が口を開こうとすると、「じゃ、高速代も半分出させて」とカンナが言った。

「アホか。気にするなよ」

「じゃ、お昼代も気にしないで」と言う。
琢磨は思わず笑って、「じゃ、ご馳走になるよ」と言う。カンナはニヤリと笑った。

「空港で何処行きのバスに乗ろうとしてたんだ？」と琢磨は運転しながら聞いてみた。

「高速バスに乗ろうか、それとも神戸か大阪に寄り道してから帰ろうかと思ってたの」

「そっか。東京に行ってたのか？」

「うん」とカンナは頷いた。

「まだあつちにも荷物が残ってるから・・・」とぼつりと言う。

「東京にか？」

「そうなのよ。まあ、全部実家に送るのもなんだかなあと思ってね」

「それで早く家が欲しいのか？」と琢磨は茶化した。

「そうかもしれないわねえ」とカンナが何か考えながら答えた。

「時々東京に行くこともあるの？」としばらく黙っていたカンナが唐突に聞いてきた。

「ん、東京は滅多にないな」

「じゃ、神戸や大阪は？」

「それは時々ある。県庁に行くこともあるから」

「だよ。テリトリーとしては3県くらいにまたがって仕事してるんじゃないの？」

「ああ、そのとおりだ。役所に行くか、組合の会合とかだな」

「接待とかも？」

「ああ、そういうのも時々あるよ。昔ほどではないけどね」

「法律でいろいろ規制されてるとは聞くけど、ほんとうなのね」
「親父たちの時代とは違うさ」と言って琢磨は笑った。

住んでる街が近くなり、高速を出る準備で車線変更する。
もう少しカンナと話していたかったが、カンナを実家の前で降ろさなければならぬ。

到着すると、「今日はありがとう」とだけ言ってカンナは実に優雅に車を降りた。

琢磨は「ああ!」と言って手を上げただけだ。

そのまま走り去る車が角を曲って見えなくなるまでカンナは見送っていた。

カンナが家に入ると、もうすでに定年退職して家に居る父親がリビングに居た。

「帰ってきたのか。早かったな」と言ってカンナを迎える。どうせ車の音を聞きつけてそわそわしていたに違いない。

「うん。空港で同級生にばったり会って、帰りに乗せてもらったから」

「そうか。誰だ？」

カンナは父親が昔から変わってないので笑いそうになった。

友達と遊びに行くときも、友達が遊びにくるときも、誰なのかいちいち知リたがった。

塾や稽古事の時も時間が許す限り送り迎えしてくれた。

今もカンナにお茶を淹れようとしながらいろいろ質問する気だ。

「秋吉組の次男よ」

「同級だったか？」

「うん。中学のとき同じクラスだった」

「秋吉組は確か、兄貴が居たはずだよな？次男が土木のほうを継いで長男は・・・」

「一級建築士なんだって」

「ああ、役所の近くの秋吉設計か」

カンナの父親は市役所勤めの公務員だった。

定年になるまで真面目に勤め、今は年金生活者である。

若い頃はもつと田舎の出張所に勤めていた。

カンナが中学生になるときに、役場から市役所に移動になって引ッ

越してきたのだ。

元々こちらが地元なので、昔からこの近辺に住んでいる家族のことはよく知っていた。

「あそこは、両親はまだ健在だったよな、確か。」

親父さんが結構元気な人で、それに比べて奥さんは・・・家に居るのが全然出てなくて、大人しい控え目な人だわ」

「パパと同年代なの？」

「うん。あっちのほうがちょっと上のはずだ」

父親は何かを思い出したのかニヤニヤしながら、「役所に来るとすぐわかるんだよ。声が大きいから」と言った。

「もう如何にもそれっぽい人なの？父親って」

「ああ、あれはかなり柄が悪いで」

「私の同級生もやっぱり土木屋さんって雰囲気はあるよ。まあ、品はそんなに悪くないけどね」

「時代が違うからなあ、親の世代とは」

思わぬところで秋吉の情報を得て、カンナは得した気分になった。

「あの親父さん、外にも子供が居たのと違ったかな・・・忘れたけど」

「へえ。モテたのね」

「まあ、あんな人だから愛人の一人や二人居ても不思議じゃないだろ」と父親はひとりごちている。

「今度、秋吉設計にお世話になるかもしれない」とカンナが父親に言うと、

「家、建てるのか？」と驚いた顔で聞いてきた。

「うん。まだ考えてるところだけど、インターのところの土地も気になるし、時間もあるし」

「ここに居ればいいじゃないか」

「まだ決めてないし、秋吉設計が引き受けるかどうかもわかんないしね。」

それにすぐに建てるってわけでもないから、まだ2〜3年はここに居るわよ」とカンナが言うと、

父親はとたんに嬉しそうな顔になって、

「ま、ゆっくりやりなさい」と言った。

「木曜日に秋吉設計に行くことになってるの」

「そうか」

「その前にね、ここにちよつと私の事務スペース作って良い？」

「いいけど、どこに？」

「2階の私の部屋の向かいが物置になってるじゃない？あそこをちよつと片付けてさ・・・」

父親は「好きにしなさい」と言ってくれた。

「それから、パパのファックスマシンを買い換えたいんだけど、いかな？」

「なんでだ？あれでダメなのか？」

「あのね、普通紙に印刷できるのが良いのよ。今のは感熱式じゃない？たくさん書類が届いたらちよつと無理があるから」

「でも、数日前にファックスの用紙が特価だったので買い込んでしまったんだよ」

「そうなんだ。じゃ、私は私でなんとかするかな」

「ロール紙が無くなったら買い換えるか？」

「うん、そうしてくれると助かる」

「じゃ、俺はちよつと物置見てくるか」と言っ立ち上がったので、カンナも「私も荷物置きに行くわ」と父親の後について二階に上がった。

カンナが中学生になるときに父がローンで建てた家だ。もうかなり時代遅れの家だが、育ってきた家でもある。二階の6畳ほどの洋間が昔からカンナの部屋だった。

ベッドの上にバッグを置いて、父親が覗き込んでいる向かいの三畳間を覗いてみる。

「へえ、意外に片付いてるじゃないの」とカンナが感心したように言う、

「お前たちが小さい頃は、母さんのミシン部屋だったんだぞ」と父親が懐かしそうに話した。

「ああ、そうだね。いろいろ作ってくれてた記憶があるわよ」

「今は婆さんの世話で、長く使ってないからな」

カンナの母は、自分の母親の病気の世話で去年から実家に行っている。

長患いの上に、看病していた母の妹も看病疲れで倒れてしまい、二人の病人を抱えて目が離せないらしい。

2、3週間に一度帰宅するらしいが、ほとんど家に居なかった。

「ママに電話しなくちゃね」

「ああ、そうだな。あとで俺が電話するときに話しておくよ」

「そうしてくれると助かる。ママって電話が長くなるから」とカンナが言う、

「明るい性格だから病人には良いかもしれないなあ」と父が笑った。

片付けるのにそれほど時間はかからないと思って、カンナが家具の配置を考えていると家の電話が鳴った。

「きつと母さんだよ」と父が言うので、「私もそう思う。パパ、お

願いね」とカンナが言うと、「任せておけ!」と言っていそいそと電話のほうに向かって行った。

その間にカンナは電話線の配置を確かめた。

固定電話は一階のリビングにメインがあつて、2個の子機を両親の部屋と玄関においてある。

じゃ、二階の廊下の電話は・・・?と見ると、父が今使っている二階の電話には電話線がつながっていた。
しめた!とカンナは内心ほくそ笑んだ。

父は母との電話を終わると、「明日、母さんが帰ってくるらしい」

「あ、ちようど良かったね」

「迎えに行ってくるよ」

「うん。じゃ、私はママにご飯でも作るわ」

「ああ、そうしてやってくれ。婆さん、肺炎を起こして入院したんだって」

「あらま、良くないの?」

「念のためらしいけど、入院すると完全看護だから、母さんも少し骨休めできるさ」

「なるほどね。でも心配だよな」

「そうだな。でもこれが年老いるということだからな」

「お祖母さんはまだ良いよ。伯父さんも叔母さんも居るんだから」

「それに婆さん、最近ちよつと痴呆がでてきたらしいよ」

「えゝゝ!それはまた・・・」

「婆さんが嫁を嫌がつて寄せつけないので、母さんとその妹が行つてるんだよ」

「なるほどね」

「明日は久しぶりに賑やかになるなあ」とそれでも嬉しそうに父は階段をおりて行った。

すっかり物置のことは忘れたようだった。

「パパ、ミシン部屋のこと、ママはなんて言ってた？」
カンナは慌てて父親の後を追って階段を下りた。

母はカンナに部屋を使うことを許してくれたが、結局あと一日くらいは待てるだろうと父が言うので、母の帰りを待ってから机を運ぶことにした。

父と二人で夕食を食べると、父はTVを見ながら転寝している。晩酌のあとは決まってそうだった。

田舎の夜は長い。

カンナはすることが無いので、自室でメールチェックをすることにした。

メールアドレスは仕事用や個人用でいくつか持っていた。

たくさんメールが届くので、カンナ自身でチェックするのは2つだけと決めて、

他のアドレスのものはスタッフに管理を任せている。

仕分けをしたうえで、必要なものだけ知らせてくるようにしていた。ひとつは財産管理用と思って以前から使っているアドレスで、もうひとつは離婚後に取得したアドレスで弁護士と会計士とのホットラインになっていた。

弁護士からと会計士からメールが届いていた。

昨日面談したばかりなのに、もう何かあったのかと眉をひそめた。案の定、どちらのメールも元旦那から連絡があったという報告だった。

弁護士のはうはそれに加えて、元旦那とその新しい妻が東京でカンナの悪口を言いふらしているようだを書いてあった。
仕方の無い人たちである。

おバカなカップルを思い出して、少し気が滅入った。

そもそも子供の出来ないカンナに、恋人に子供が出来たので君とは別れると言われたのだ。

IT長者で派手な暮らしぶりの旦那に女が居るのは知ってはいたが、子供が出来たのでは仕方がないかと離婚話に応じたのは、そろそろ潮時かなと思っていたからだった。

体裁を気にする旦那は修羅場になって週刊誌を喜ばすことを避けて、二人で話し合って離婚の条件を決めた。

夫の不義による離婚なのでカンナにかなり有利な条件だった。

それでも間に誰かを入れて書類で取り交わしたほうが良いと説得して、弁護士に協議書を作ってもらい、それに基づいて財産を分けたのだ。

カンナ側の弁護士はカンナが貪欲になれば夫からもっと取れるんですよとアドバイスしてくれたが、長年一緒に暮らしたのだからとりあえずは夫も今のままの生活が出来るようにと手加減したのだった。

ところが、カンナと離婚後あまり業績の芳しくない元旦那は、こんなはずじゃなかったと息巻いている新妻にそそのかされてか、カンナに取られすぎたと言いがかりをつけてきている。

旦那側の弁護士でさえ「もう終わったことですから」と助言しているにも関わらず、しつこく言いがかりをつけてきていた。

元旦那の性格上ある程度は予想していたので、携帯電話もメールアドレスも新しいものを取得し、田舎の実家に引っ込んでいるのだ。

もうひとつのメールを開けると、その元旦那からメールが届いてい

た。

内容を読んでうんざりしたカンナは携帯電話を取り上げた。
かけた先は弁護士のところだ。

「カンナです。今よろしいですか？」

「ちょうど今事務所の戸締りをしていたところです」

「タイミングよかったのかしら？」

「はい。メール読んでいただけましたか？」

「ええ。それとは別に元旦那からも直接メールが届いたんだけど」

「向こうの弁護士もかなり諫めてはいるらしいのですが・・・」と
言葉を濁した。

「そのメールを明日そちらに転送しておきます」

「では、あとはこちらで引き受けますよ」

「すみません、いつも」

「いえいえ、それが私の仕事なので」

「それで、もうそろそろウザくなってきてるんだけど」とカンナは
静かに言った。

カンナは弁護士、田所とはどこかのパーティで知り合った。何度か同じパーティで顔を合わせるうちに、話す機会も増えた。祖父の代からの弁護士一家で、父親はTVでも活躍している有名な企業弁護士だった。

物静かな田所は、主に顧問としてクライアントの財産を管理する弁護士をしているらしい。

実際の歳より老けてみえる田所と、若く見えるカンナは7歳も違うのに同年代に見られる。

ようやく僕にも個室がもらえたんですと嬉しそうに話していたことを今でもカンナは覚えていた。

それまでは弁護士というと、ややこしいところに乗り込んでいる法律家としか認識していなかったので、

黙って話を聞いてくれそうな気さくな田所を好ましく感じていた。

離婚するにあたって、離婚後の財産の管理もあるので田所の名刺を探し出し電話を掛けたのが始まりだ。

田所は話を聞いていくつかのアドバイスをしてくれて、カンナは比較的簡単に離婚できたのだ。

今はカンナの第一顧問弁護士だ。

田所しか顧問弁護士はいないのだけど、必要にあわせて専門の弁護士を手配するようにもお願いしている。

元旦那からの火の粉を逃れるには他の弁護士を使うかもしれないなと、カンナは思った。

一方その頃琢磨は、目の前に迫った工事期限と二人の子供にやきもきしていた。

春休みで家にいるはずの子供はというと、長男が家に居たので次女が帰ってきたら夕飯を食べに行こうと電話をしておいたのに、一向に連絡が無かった。

現場は煌々と電気をつけて明るい中、徹夜作業になるかもしれないと皆がテンション高く働いていた。

あと2日で終わる予定なので、そろそろ片付けの段取りもしなくてはならない。

ようやく長男に電話が繋がったと思ったら次女が帰ってないので連絡できなかったというのだ。

しかも長男は、明日は現場を手伝いたいと言い出した。

今までにもアルバイトで手伝ったことがあるから良いのだが、何しろ受験生だ。

妻から勉強させるように口やかましく言われているので、琢磨は勉強を優先させたかった。

ところが長男は、「今日は一日中家に居たんだよ。明日と明後日くらい体を動かしてもいいだろうが」と言う。

春休みが終わって学校が始まればまた勉強の日々だからというので仕方なく許可を出した。

明日は事務所に来させて皆と一緒に現場入りさせよう。

手伝うといっても、撤収のための整理整頓くらいしかないが、それでも男の子のパワーは嬉しかった。

次女が気になるので、一度家に帰ることにした。

玉置にそれらのことを伝えると、わかりましたと返事があった。

琢磨の車が家の近くのコンビニの前を通ったとき、次女に良く似た後姿が見えた。

急ブレーキをかけコンビニの前に横付けして店内に入ってみると、次女が漫画を立ち読みしていた。

「こらっ！」と後ろから声を掛けると、次女はびくつとして振り返る。

「なんだ、パパか」

「なんだは無いだろう」

「脅かさないでよ」

驚いたのは琢磨だった。

次女の目の周りが黒くなっている。

「お前・・・化粧したのか？」

「あ・・・うん」と次女は焦ったような声を出した。

「なんか、パンダみたいだぞ」

「えっ？！ママのをちよつと借りただけだ」

「お前なあ・・・まったく。まだ化粧はダメだって言われてなかったか？」

「イマドキ、皆してるよ。来週から高校生だし、常識だよ」

琢磨はちよつと考えて、近くのマガジンラックから一冊美容関係の女性誌を選んでレジに持っていった。

空いた手で次女の手を掴んで引っ張っていった。

お金を払って、雑誌を次女の手押し付ける。

「ママには内緒だぞ。これでちよつとは勉強してる」

「え〜？こんなのダサイよ」

「五月蠅い！どうでもいいから飯行こう」と、次女を車に押し込んで長男を迎えに行った。

長男に玄関先で散々笑われた次女はすっかり拗ねてしまったが、なんとか宥めて顔を洗わせてから３人で焼肉を食べに行った。なんとといっても長男は食べ盛りだ。

それに琢磨は洋食より箸を使う食事のほうが好きだった。

ラーメンか焼肉か訊ねると二人とも「焼肉！！」と答えたので、いつも行く近所の焼肉屋に行った。

食べるだけ食べて、お腹が苦しくなった頃、長男がぼそと次女に言った。

「お前、あのさっきの化粧、似合ってたぞ」

「ほ、ほつといてよ」

「お前は可愛いんだから、ナチュラルマイクのほうが似合うはずだぞ」とも言った。

「・・・放っておいて」と言いながらも真っ赤な顔をして、「お手洗いに行つて来る」と次女は席を立てて行つてしまった。

残された長男と琢磨が顔を見合わせて肩を竦めると、焼肉屋の亭主が、「親子でそっくりのポーズだなあ」と言つて笑いながらテーブルの横を通つて行つた。

「それにしても、お前、よくあんなことが言えるなあ」琢磨が感心して言うつと、

「親父の真似してるだけさ」と言つて長男がしれつとして返した。

妻が東京から戻るのはまだ10日も先だ。
とりあえず明日と明後日はどうやって乗り切ろうか、琢磨は考えていた。

会計を済ませて外で待っていると次女が出てきたので、みんな歩いて帰る。

長男は明日は現場だ。

さて、次女をどうするか。放って置いたら何をするかわからない。家に二人の子供を置いて、住み込みのお手伝いさんに声をかけて琢磨は現場に戻った。

現場に戻ると別段変わったことはなく淡々と作業が続いている。

玉置が近づいてきたので、「今日、明日が山だな」と琢磨は声を掛けた。

「はい」

「様子はとうだ？」

「まだ気配はありませんが」

「ま、恒例のことだしな」

「はい。でも最近特に不景気ですからね。しかもあつちは3回連続で入札はずしていますから油断できませんよ」と玉置が答える。

一度納期に間に合わなければ次からは当分仕事をもらえない。それがわかっていいるから、終了間際の工事現場には次の入札を狙っている同業者からの嫌がらせがある。
ライバルをひとつ蹴落とすのだ。

昔はもつと荒っぽかった。

今は規制もあるのでそれほど派手ではないものの、琢磨をライバル視している会社があつて、何かと仕掛けてくる。

「準備はしておけよ」と言つて、琢磨は携帯電話に手を伸ばした。

「あ、小野寺？夜分にすまん」

琢磨が電話をかけた相手はカンナだった。

「明日は何か予定があるか？」

「ん〜、家を空けられないんだけど」

「じゃ、好都合だ」

「え？」

「えっと・・・どこから話すかな」と迷っていたが、今日次女を見て思いついたことをカンナに話した。

「それ、無理だから。絶対に・・・」

「頼むよ！」

「ベビーシッターなんて無理よ」

「いや、今度高校生になる」

「一番微妙で扱いにくい年頃じゃん」

「他に居ないんだよ」

「私は危険物取り扱いの資格なんて持ってないし・・・」

「カンナ大明神！頼むよ」と押し切られ、

「まったく、しょうがないわね」。但し、両親が良いって言つたらだよ」と言つてカンナは渋々承諾した。

昔から琢磨には憎めないところがあると思つていたが、今さら思い出したところで仕方がない。

父親に話すと、夕方までならいいんじゃないかと言うので、琢磨に「OK」と携帯メッセージを送った。

翌朝、きっかり9時に琢磨はカンナの家チャイムを鳴らした。

琢磨の隣には拗ねたような態度の次女、陽菜はるなが並んでいた。

「はい」と言っただアを開けた人を見た瞬間、陽菜は目を見開いて固まってしまうていた。

妖精のような女性ひとが立っていると思った。

確か父親の知り合いと言っていたが、いったいどんな知り合いなんだと思ってしまう。

「朝からすまん。こっちが次女の陽菜。今日はよろしく！」と父親が言っのをぼんやり聞きながら、陽菜はなんだか良い匂いがすると思っていた。

「おい、陽菜、挨拶しろ！挨拶！こちらは小野寺さんだ。パパの同級生だ」

「ええ……？！パパの？」

どう見たってまだ40歳は超えてないでしょうという女性がパパと同級生なのは信じられない。

陽菜は口をパクパクさせたまま二人の顔を交互に見比べて居た。

「しっかりしろ！金魚みたいに口開けやがって」と琢磨は言いながら、「こんな子だけど今日一日よろしく！いろいろ教えてやって」とカンナに言った。

「おはよう。陽菜ちゃんって言うのね。可愛いお名前ね」とその人

がふんわりと微笑んだ。

「あ、はい。オハヨウゴザイマス」とペコリと頭を下げる。

「今日は陽菜ちゃんのパパはお忙しいから、ここで我慢してね」と言う。

「いえ、とんでもないです。よろしく願います」と陽菜はまた頭を下げた。

すっかり態度の変わった陽菜を面白そうに見ながら、琢磨は「何かあったら電話くれ」と言い残して行ってしまった。

玄関に残されたカンナと陽菜は、しばらくそこに言葉もなく佇んでいた。

「あ、陽菜ちゃん、どうぞ入って」とカンナが言ってスリッパを出してくれた。

「はい」と返事して後をついていくと、リビングに通された。

「朝ご飯は？」

「あ、はい。食べてきました」

「偉いわねえ。朝ご飯食べるなんて」

「私はお茶だけでいいんだけど、朝のお茶の時間を一緒にしてくれるかしら？」

「は、はい」

なぜ妖精さんがこんな家に居るんだろうと陽菜は不思議に思った。普通の古い小さな家だ。

こういう人はもっと違う、広くて新しいマンションのモデルルームのようなところが似合うはずだ。

新しいマンションのモデルルームというのが実際にどんなところかわからなかったが、イメージとして陽菜はそう思った。

カンナは紅茶を用意しながら、何を話して良いかわからなかった。そのうち自然に話せるかもと思って、無言で紅茶を淹れる。

「こっち来る？」と陽菜をダイニングテーブルに誘った。

「はい」と言って素直に移動してきた陽菜を見ると、どこからみても田舎の中学生だ。

丸い顔に黒いストレートのせみロングの髪。

ただ、肌がつやつやしているのとはばれそうな目が可愛さを出していた。

少し手をいれてやれば可愛いお嬢さんになるだろう。

「陽菜ちゃんって呼んでいいかな？」

「はい」

「私は小野寺カンナといいます。聞いたとおりあなたのお父様と同級生だったのよ」

「信じられません」

「あはは、それは私が若く見えるって言うてくれてるのかな？」

「はい。パパはどうみてもオジサンですし・・・」

「ほんとうなのよ。それよりも私のことはカンナって呼んでちょうだいな」

「はい、カンナさん？ですか？」

「うん、それで良いわ」とにっこりカンナが微笑んだ。

陽菜は思わず見とれて、顔が熱くなるのを感じた。

そんな陽菜を小動物みたいで面白いと思いつつ、カンナは話を続けた。

「今日はね、宅配を待ってるの」

「そうだったんですか」

「注文してたものが届くのね。で、陽菜ちゃん、嫌じゃなかったら、運んだり組み立てたりするのを手伝ってくれないかな？」

「はい。良いですよ？」

「そう、助かるわ。午前中に届くはずよ」

陽菜はコクリと頷いた。

「この家は私と両親が住んでいるの。」

今日は父が母を迎えに出かけていて、午後になれば戻ってくるはず。帰ってきたら賑やかになるから覚悟しておいてね」

「はい」

「母はね、祖母が病気なので看病に行っているのよ。」

今日は久しぶりに家に帰ってくるので、たぶんすごくテンションが高くなるはず。

なので覚悟しておいてね。静かだった生活も今日で終わり・・・」

「はあ」

「ああ、テンションって興奮するってことね」

陽菜が頷くと、「陽菜ちゃんのお母様って静かな方なの？」とカンナが聞いた。

「いえ、口うるさいです」

「よかったわ。うちの母親だけが五月蠅いってわけじゃないのね。でも、たぶん陽菜ちゃんのお母様より10倍くらい五月蠅いから、我慢してね」

と真面目な顔をしてカンナが言うので、陽菜も真面目に頷いた。

「あら、可愛い指ね。ちょっと見せて？」とカンナは手を出した。

おずおずと陽菜が手を差し出すと、その手を取ったカンナが、「これ、マジックで塗ったの？」と聞いた。

「いえ・・・」と陽菜が首を横に振ると、「マネキュアなの？」と聞くので、今度はコクリと頷いた。

陽菜は急に自分の爪が恥ずかしくなった。

陽菜が手を引つ込めないようにしっかりと握ったカンナの指は、とてもきれいな飾りがついていた。

揃えられ、きれいな色に塗って模様が描かれている。きらきら光る石も乗っていた。

「マネキュアどこで買ったの？」と聞かれたのだが、答えられないでいると、「コンビニ？」と聞かれたので再び頷いた。

カナナは「ちよつと待っててね」とバタバタとどこかに走って行き、すぐに戻ってきた。

「私ね、子供も居ないし妹も居ないので、あまりこういうことはやったことないんだけど・・・」と言いながら、手に持ってきた箱を開けいくつか小さな小瓶を出した。

「これなんかどうかな？」と言って、淡いピンクのマネキュアを差し出す。

「それともこつちも良いかも」と2、3個勧めてくれた。

「この色に塗ってみていいかしら？大丈夫？」と言うので、「はい」と小さな声で返事をする。

コットンに匂いのする液を染込ませて、陽菜の爪の上をそつと撫でた。

二回目は少し強めに擦っている。

「このくらいじゃないと取れないわね。ほら、きれいに取れた」と言ってカナナは満足そうに笑った。

「じゃ、陽菜ちゃん、自分でやってみる？」とコットンを差し出されたので、陽菜は頷いて受取った。

コットンは好きなだけ使っていていいからと言われて、全部の爪を擦り、黒いマネキュアを全部取った。

「じゃ、こつちに來て」と洗面所に案内されて、手を洗い、またりビングに戻った。

「今度はこれを使うからね」とヤスリで爪を整えてくれる。

カナナから流れてくる甘い匂いにうつとりしながら爪を任せてしまった陽菜は、もうどうなっても良いと夢心地だ。

やがて透明感のある薄いピンクに染まった陽菜は自分の爪を見て、

「きれい・・・」と呟いていた。

「今は春休み中だからいいけど、学校が始まったらこういうのはダ

メだからね」とカンナから念を押されて頷くしかなかったが、とりあえず今はこれで充分だった。

突然、ドアのチャイムが鳴って二人ともびっくりした。

宅急便をすっかり忘れていたのだ。

荷物の伝票に受取り印を押しながら、カンナは取って置き笑顔で、「今、他に人が居なくて……。できたら二階に置いてもらえないかしら?」と配達員に頼むと、二つ返事で全部の荷物を二階に運んでくれた。

カンナに頼まれると誰も断れない。

陽菜はこの人も一緒だなと荷物を運んでいる配達員を見ながら思った。

「よかった。全部揃ってる」カンナは二階の廊下に置かれた箱を確かめてそう言った。

「一体何なんですか?」と陽菜が聞くと、「ふふふ、私の遊び道具よ」とカンナが言つて、「でもこの箱よりも今は陽菜ちゃんのほうだな・・・」と振り向いて頷いた。

陽菜は何のことかわからなかったが、「ダイニングで待っててね。すぐに行くから」というカンナの言葉に促されて階段を下りた。そう時間を置かずにカンナもダイニングに来たが、手になにかを持っている。

「陽菜ちゃんはまだ若いから、ファンデーションは必要ないのよ。でも、日焼け止めは塗ったほうが良いわ。ソバカスができるからね」

ボトルを何本かと鏡をダイニングテーブルの上に置いてから、カナは陽菜をキッチンのシンクに誘った。

「顔を洗うときは何を使ってる？」そう言っ、石鹸の泡立て方、顔の洗い方を陽菜に教え、やってみるという。

陽菜が教えられたとおりに顔を洗うと、次は化粧水をつけ、日焼け止めクリームを塗ってから透明のリップを差し出す。

少しピンク色がついているので、塗るとプルプル輝いて見えて、それだけで陽菜は幸せな気分になった。

「鏡を持っていてね」とカナは言っ、睫毛をくるんとさせるためのビューラーの使い方を教えてくれた。

最後に「目を閉じてて」と言い、眉を少しだけ整えて陽菜への美容講座は終了した。

「目を開けて良いわよ」とカナが言っ、おそろおそろ鏡を見てみると、ほんの少しのこと数段可愛い自分が映っていた。

「うわー！凄いです、カナさん！ありがとうございます」

「それはね、陽菜ちゃんが元々可愛いからよ」そう言っカナも微笑んだ。

「眉は自分でカットしちゃだめよ。切りすぎると取り返しがつかないから」とカナは注意を与えた。

「はい」と陽菜は返事をして、洗顔やビューラーの使い方を忘れないように、家に帰ったら練習しようと思った。

「さて、二階の箱を開ける前に、エネルギーの補給をしましょう。一緒にカレーライス食べない？」とカナが誘っ、一緒にお昼ご

飯を食べることになった。

ダイニングテーブルにランチョンマットを置いて、スプーンとフォークが出されたので、陽菜がそれをマットの上に並べた。

「作っておいたから、温めるだけなの」と言って、カナナは白いお皿にカレーライスを盛って、冷蔵庫から小さなサラダを出した。

「美味しいです」と陽菜が言くと、「ありがとう。一緒に食べると美味しいわね」とカナナが微笑んだ。

食べ終わったあとは、二階に上がって二人で箱を開いた。

大きな箱や小さな箱のなかをひとつひとつ確認して、廊下に並べ、箱は必要なもの以外は全部潰して外に出した。

そうしていると、元気な声で「ただいま」とカナナの母が帰ってきた。

「おかえりなさい」

カンナはそう言いながら階段を下りて行った。

しばらく階下で話し声が聞こえていたが、やがてトントンという足音がして二階に上がってくる。

中年の女性とカンナが戻ってきた。

「この子かい？」

「そう、陽菜ちゃんっていうの」

「陽菜ちゃん、私の母です」と、カンナは陽菜と母を引き合わせた。

「秋吉陽菜です。こんにちわ」と陽菜が挨拶すると、

「んまあ、なんて可愛いお嬢さんかしら」と大げさに頬に手を当てて、「こんにちわ」と挨拶してくれた。

「お母さんに似て、良かったわね」と言ってカラカラ笑っている。

陽菜はどういうリアクションをして良いのかわからなかった。

「でね、ママ。この部屋なんだけど・・・」とカンナが話を変えて、母親の意識が陽菜を逸れたので、陽菜は内心ほっとした。

やがて話がまとまったようで、「好きにしていいいから。一段落したらダイニングへおいで。おやつ買ってきたからね」と言って、カンナの母親は階段を下りて行ってしまった。

入れ替わりにカンナの父親がやってきて、陽菜はまた緊張してしまっ

た。同じように簡単な挨拶を済ませると、今度は家具の移動が始まった。陽菜も少し手伝った。

埃っぽい部屋から古いミシンやいくつかの箱と筆筒を協力しながら別の部屋に運ぶと、カンナは窓を開けておいて、バケツに水を持ってきた。

陽菜にゴム手袋を渡す。

「さて、一緒に拭き掃除してもらおうかな」と言っ、水を絞った雑巾を渡された。

狭い部屋なのであっという間に終わってしまった。

カンナは窓も拭いていた。

それが終わると、カンナの部屋から古い勉強机と一緒に運んだ。

「この机、私が子供の頃使っていたのよ」と話してくれた。

「カンナさん、高校はどこだったんですか？」

「あ、私はK高よ。秋吉君、陽菜ちゃんのお父様は、S工業高だったわね、確か」

話しながらカンナは雑巾を受取って、バケツを持って立ち上がった。

「はい。カンナさん頭良かったんですね」

「そんなことないわよ。陽菜ちゃんはどこに決まったの？」

「・・・R女子高です」

「あら、素敵な高校じゃない。お嬢さんなのね」

「いえ、他に入るところが無かったので・・・」

「じゃ、手を洗って・・・？」とハンドソープを渡されて、手を洗う。カンナも洗面所で隣に並んでソープを泡立てて手を洗った。

ハンドクリームをつけながら、「女の子は手を大事にしてくちゃね」と陽菜に微笑んだ。

「ママ、おやつ食べていい？」と奥の部屋に声をかけるとカンナの母親がダイニングに入ってきた。

「じゃ、皆でケーキの時間にしようか」と言つて、冷蔵庫から大きな箱を取り出した。

カンナは飲み物の準備をしている。

「陽菜ちゃん、好きな選んでいいよ」と小母さんが言つて、箱の中を見せてくれた。

陽菜は散々迷つてフルーツがたくさん乗ったタルトを選んだ。

陽菜の父親もやってきてダイニングテーブルで小さなお茶会が始まった。

「陽菜ちゃんは今度R女子に入学なんだって」とカンナが言つと、「ほお。やっぱりお嬢さんなんだねえ」とカンナの母が感心したように言つた。

「あそこは、家政科があつただろう？」

「はい。私も家政科です」

「あ、陽菜ちゃん。うちのママはお裁縫得意なのよ。宿題とか困つたらここへ持つて来ると良いわよ」

「カンナは裁縫が全然ダメでさ、私が縫った物をヘーキで提出してたんだよ」

「えー？ほんとうですか？」

「誰だつて出来ないことはあるわよ」とカンナはペロリを舌を出して肩を竦めた。

カンナの父親は何も言わずにお茶を飲んでいるだけだった。

「あ、そうだ！」と突然カンナの母が立ち上がつて、バタバタと

二階に上がって言った。

陽菜が驚いていると、「どうやら陽菜ちゃんのこと気に入ったようね」とカンナとその父親が顔を見合わせて頷いている。

「陽菜ちゃん、嫌なことは嫌だつて言わないとだめよ。うちの母は結構押しが強いから」と言っただけでカンナがニヤニヤしていると、カンナの母親が戻ってきた。

手に持っているものをテーブルに広げて、「これはカンナの上履き容れ、これはカンナのお稽古事バッグ・・・」と言いながら次々に陽菜に見せていく。

「ママのバッグは自慢だったわよ、私」と言いながら、カンナは席を立つてお皿などとシンクに運んだ。

確かに素人の小母さんが作ったとは思えないような可愛いバッグだった。

陽菜が手にとってバッグを見てみると、

「そしてこれ！どこかに仕舞ってたと思ってたんだよ。見つけたわ」とカンナの母が手にしたものをカンナに見せた。

「カンナ、ブラシ持ってきて」とカンナの母が言うと、カンナはすぐにヘアーブラシを持ってきた。

陽菜は嫌な予感がした。

「どの色が良いかねえ」と言いながらカンナの母親が陽菜の後ろに立ち、あつという間に陽菜の髪にリボンをつけてしまった。

「女の子は毎日ブラッシングしないとダメだよ」と言って、カンナの母親は陽菜の髪の毛を梳いている。

カンナの父親はいつの間にかリビングのソファーに移動していた。

「陽菜ちゃん、入学式はいつだい？」と陽菜の髪を梳きながらカン

ナ之母が聞いた。

「来週です」

「ふゝん。もうあまり時間がないじゃないか。もう必要なものは揃えた？」

「えつと・・・」

陽菜はよくわからなかった。

「学校から、入学までに揃える物の案内が届いているはずだけど・・・」とカンナの母が言う。

学校から郵便は届いていたが、陽菜はまだ読んでいなかった。

「制服は？もう取りに行った？」

「はい。制服と通学靴は買いました」

「そつか。じゃ、学校からのリストを明日持っておいで」

「え？明日ですか？」

「何か用事でもあるの？」

「いえ・・・」

また明日も来て良いものか、確か今日だけだとパパが言っていたはずだと陽菜は思った。

「陽菜ちゃんさえよければ、あとでお父様に聞いてみましょうか？」とカンナが言ってくれたので、陽菜は嬉しくなって「はいっ」と答えた。

「また来てもいいんですか？」と聞くと、「もちろん！」とカンナ之母もカンナも言ってくれたのでほっとした。

「さて、そろそろ陽菜ちゃんを私に返してちょうだい。」

今から二階を手伝ってもらうから」
そう言うとかンナは陽菜を促してダイニングから離れた。

カンナの簡単なオフィスを整えるために、陽菜は言われたものを箱から取り出し、

カンナが次々に収納していくのを見守った。

一番大きなものはプリンターで、カンナのPCとつないでいるんな設定を確認するのを見ていた。

「さて、ここからはちよつとたいへんよ」と言つて、カンナは長い線を取り出し、廊下の隅にある電話のところで作業を始めた。

「陽菜ちゃん、ちよつと手伝つて」と呼ばれたので近づいていくと、「私がこの線を壁や天井に留めていくから、作業し易いように線を持つてくれる?」と言つて、

電話のところから順番に、大きなホツチキスのようなものでケーブルを留め始めた。

小さな梯子も使つて丁寧に留めてしまうと、カンナはニヤリと笑った。

これで、ファックスの心配はない。

父親のところへ届くファックスなどたかが知れている。

当分の間はカンナがファックス回線を乗っ取ったのには気がつくまい。

一段落したところに陽菜の父親から、今から迎えに行くと連絡が入った。

カンナが明日は陽菜と一緒に買い物に行きたいとメッセージを送ってくれたおかげで、

明日も同じ時間にカンナの家に来ることになった。

もう使わないからと陽菜の爪に塗ったマネキュアを袋に入れて持たせ、父娘を見送ると、

玄関を入ってからカンナはため息をひとつ吐いた。

迎えに来た琢磨が、陽菜を見て少し驚いたようにしてたなと思うと笑いがこみ上げてくる。

賑やかな夕食のあとようやく開放されたカンナは、今日出来上がった自分の簡素なオフィスに入った。

PCを立ち上げて一日ぶりにメールチェックをする。

昔は十分な大きさだと思っていた机も、今では単に古びた小さな机だ。

椅子は・父の手作りだったことを思い出した。

東京の機能美を追求したシンプルモダンなオフィスとは違ってはいるが、それでも十分に用は足りる。

当分はこれで良いとカンナは思った。

メーラがメールを全部ダウンロードする間に、携帯電話を取って琢磨にメッセージを送った。

『陽菜ちゃんの学校からの案内を持たせてください。明日は入学までに必要なものを買い揃えようと思います。使った費用はあとで請求します』

送っておいてメールを次々に読んでいると、琢磨から着信があった。

「秋吉だけど、今いいか？」

「はい。お疲れ様です」

「今日はありがとな。陽菜がすっかり喜んで、小野寺の話ばかりしている」

「気に入ってもらえたようで嬉しいわ」

「明日も頼んでいいのか？」

「ええ、うちの母も陽菜ちゃんのこと気に入ったようで舞い上がってるわよ」

「小母さんが？」

「母も裁縫が得意だから、家政科に進んだ陽菜ちゃんに先輩風吹かせたいみたいよ」

「助かるよ、本当に」

「奥さんが不在中なのに悪いなとは思っけど、どうも陽菜ちゃんの入学式に間に合いそうにないから、気になって」

「長女がちよつと出来がいいから、陽菜のことは二の次だからな」

「明日は工事也大詰めなんですよ？」

「ああ」

「じゃ、時間気にしなくていいから。適当に買い物とか行ってくるわ」

「よろしくお願いします。車はあるのか？」

「ん〜、明日は家の車が使えそうだから大丈夫よ」

「お礼はちゃんとするよ」

「そんなの必要ないわよ。陽菜ちゃんはうちの母のおもちやになったりしてたいへんなんだから」

「そういう訳にはいかないよ」

「う〜ん。じゃ、今度時間ができたらとびつきり美味しいものご馳走してよ」

「ああ、わかった」

「じゃ、また明日ね。そっちは現場なの？」

「ああ、もう一晩徹夜だな」

「お仕事、頑張ってね」

電話を終わったものの、琢磨はまだ電話を離せないでいた。

お仕事頑張っってなんて言われたのは久しぶりのような気がした。

翌朝もちょうど9時にチャイムが鳴り、琢磨が陽菜を連れてやってきた。

「じゃ、よろしく頼むよ」と言つて、カンナに「とりあえずこれで・・」とお金の入った封筒を預けて琢磨は現場に出かけていった。

家の中に入つて昨日と同じようにお茶の準備をする。

4客あるお碗の一つを指して、「これ、父のところにお願いできるかな」とカンナが陽菜に頼んだ。

後ろを振り向くと、リビングでカンナの父が新聞を読んでいた。居る気配が全然なかったなあと陽菜はびっくりしたものの、平常を装つてお茶を持つていった。

「あの、おはようございます。お茶をお持ちしました」
家のお手伝いさんの口調を真似て言つてみた。

「ああ、おはよう」とカンナの父親がにっこり笑つてくれたので、間違つてなかったと陽菜はほつとした。

奥からカンナの母がやってきて「おはよう、陽菜ちゃん」と挨拶をしてくれる。

家だとも言わないことが多い陽菜だが、「おはようございます」と挨拶を返した。

「こっちでお茶をいただきましょう」とカンナの母に促されてダイニングテーブルにつく。

「早速だけど、学校からのリスト持ってきた？」と聞かれたので、手に持っていた封筒をテーブルの上に置いた。

「どれどれ・・」と言つてカンナの母が封筒を開けて読み始めた。

今朝、東京に居る母に電話をすると、母は手紙の置き場所を覚えておらず、確かお手伝いさんに預けた中にあるかもしれないというので探してもらったのだ。

封筒の中には制服の引換券も入っていた。

そういえば制服は買ったもののまだ家で見たことはなかった。

それと言うと、「たぶん、取りに行くんだよ」とカンナの母が言い出して、カンナが引換券に印刷されている電話番号に電話をかけて取りに行くことになった。

「指定の通学鞆はあるかい？」と聞かれたので、それはもう家にあると答えた。

結局、通学鞆だけは買ってあることがわかったので、それ以外のものを揃えるのだが、カンナ親子の連携は素晴らしかった。

カンナの母が何度もリストをチェックしてブツブツ言っている隙に、カンナは陽菜に日焼け止めクリームを塗り、睫をビューラーでクルリと上げ、仕上げに昨日と同じ透明っぽいピンクのリップグロスを塗った。

それが終わると、カンナの母が陽菜の髪を梳き、リボンを結んだ。

「ママ、今日の陽菜ちゃんにはそのリボンは似合わないよ。服装と合わないわ」とカンナがきっぱり言う、残念そうにリボンを解いている。

その代わりにと、小さな苺がついたヘアークリップでサイドの髪を留めていた。

陽菜は家でこんな風にあれこれと構われたことがない。

ママはおしゃべりなのでいろいろ話しかけてはくるけど、陽菜の姉のことが中心で陽菜をあまり熱心に気にかけることはなかった。

姉は成績がよかったので、勉強ができない陽菜のことを馬鹿にする

ことはあっても、洋服を選んだりリップクリームを塗ってくれたこともなかった。

今朝、車の中でパパが「お前は小野寺家のオモチャらしいから、たくさん可愛がってもらえ」と笑いながら言っていたが、オモチャってなかなか良いものだと思う陽菜だった。

渡された手鏡で綺麗になった自分を見ているうちに、カンナの「ママ、陽菜ちゃんの手鏡で綺麗になった自分を見ているうちに、カンナの母がダダ」という勢いで二階に行ったかと思うと、また同じ勢いで下りてきた。

「陽菜ちゃん、お小遣い持ってる？」とカンナが聞くので、ポケットに入れていたお金を掴んでテーブルに出した。

「あらあらあら・・・」とカンナもカンナの母も驚いたようだ。

「お財布は？」と聞かれたので、金額じゃなくてお金をそのままポケットに入れていたのが問題らしいと陽菜は気がついた。

「カンナのを取っておいて良かったよ」と言いながら、カンナの母はまた二階に上がって行った。

しばらくして戻ってくると、母のプリントの小さなポーチとハンカチ、ポケットティッシュをテーブルに並べた。

カンナはきれいな紙に、電話番号をふたつ書いた。

「あとでシヨップिंगセンターに行くからね。迷子になることはないと思うけど、見失ったら公衆電話からここに電話してね」と言つて、テーブルの上に他のものと同じように置いた。

「さて、何を入れたか忘れるといけないので、自分でバッグに入れてご覧？」とカンナの母が言うので、お金を小さなポーチに入れ、ハンカチ、ティッシュ、そして電話番号の紙を順番にポケットに仕舞った。

カンナは「喉が渴いたね。何か飲もうか。それから昨日のケーキがまだあるから食べない？」と陽菜に優しく訊ねた。

「買い物はエネルギーが必要だから、甘いものを食べておくほうがいいのよ」と言って、陽菜に牛乳のカップを渡し、自分は紅茶を淹れていた。

ケーキを選んで食べていると、何かブツブツと呟いていたカンナの母が電話を掛け始めた。

大きな声なので聞こうとせずとも耳に入る。

どうやらR女子高に去年入学した子供が居る知り合いに電話したらしい。

電話を終わると、上履きはこの店とか体操服はこことか小さな字でメモしたものをカンナに見せていた。

ようやくカンナ母娘の話が終わって、買い物にでかけることになった。

それまで黙っていたカンナの父が立ち上がり、外で待ってるからと言って出て行った。

車で送ってくれるらしい。

カンナの母に見送られて出発すると、カンナはさっそく陽菜の髪を留めていたクリップをはずして、

「ごめんね。もう高校生だというのに子ども扱いしてしまって・・・

」と済まなそうに謝った。

「いえ、私とっても嬉しいんですけど・・・」と陽菜は正直な気持ちと言った。

「そう？それならいんだけど」とカンナは言って黙ってしまった。

狭い街なのですぐに制服屋に到着し、制服を引き取ったあとはショッピングセンターで車を降りて買い物をした。

カンナとの買い物は、陽菜には夢のようなひと時だった。

陽菜の母のようにいつまでも悩むことは無く、どんどん買っていく。学校のを買った後で、化粧品店に行き透明感のある薄いピンクのリップクリームと、ビューラーを買い、若い女の子向けのショッ
プでネイルケア一式を陽菜のために購入した。

遅くなったランチの後、最後に本屋に行って指定の教材を購入すると、とびっきりの笑顔で若い店員に微笑んで荷物をタクシー乗り場まで運んでもらって、二人は無事に帰ってきた。

妖精スマイルって凄い威力だわと陽菜は疲れた頭で思っていた。

夕方、琢磨は昨日より早めに陽菜を迎えに来た。
仕事のほうはもう終わったらしい。

三人で玄関と車を何度か往復して買ったものを琢磨の車に積み込むと、

陽菜を助手席に座らせて琢磨はドアを閉めた。

「これ」と言ってカンナが封筒を琢磨に渡した。

「一応買っただけだったから。領収書が入ってるから交換や返品のとき使って」

「何から何まですまん」

「陽菜ちゃんと過ごすの楽しかったわよ」

「そうなのか」

「ええ。可愛いし賢いし。あなた方は幸せね。こんなお嬢さんが居るんだから」

「賢いというのは初めて聞いたな」と琢磨は苦笑している。

「勉強だけじゃないわよ、賢さつて。大人の話をよく聞き、決して余計なことは言わない。」

こんな賢い高校生なかなか居ないわよ」とカンナは陽菜のことを褒めた。

「ほら、陽菜ちゃんも疲れているから行ってちょうだい」

「ああ、ほんとうに世話かけたな」

「明後日はお兄様のところに行くことになってるから、応援よろしくね」

「気が向いたらな！」

「酷いなあ」

軽口を言いながら、陽菜に手を振ると、陽菜は恥ずかしそうに手を振り返した。

さすがにカンナも少し疲れを感じて、自分の部屋で横になった。

少しのつもりがかなり深く眠ってしまったらしい。

気がつけば外は真っ暗になっていた。

一階に下りると、両親がカンナが起きるのを待っていた。

その夜は三人で一緒にお鮎を食べに出かけた。

食事が終わって家に帰ってすぐに、「私、当分バタバタするかもしれない」とカンナは両親に話した。

「東京かい？」と母が聞く。

父が心配気にカンナの顔をみてから、母に「お茶淹れてくれ」と言った。

鮎屋で少しお酒を飲んでいる。きつと話をちゃんと聞くつもりだ。

母はお茶の準備をしながら、「もうすっぱり綺麗に別れて来たんだろう？いまさら・・・」と言い始めた。

「別れるのに綺麗も何も無いだろう」と父が珍しく言い返している。

「で、ややこしいのか？」と父が聞いた。

「弁護士先生もついてるから大丈夫なだけだね。

本人から直接私に文句を言い出したから、ウザいなあと思って」

今度は「あちらが他所に子供を作ってこうなったんじゃないか」と母が言うので、

「それが微妙なところなのよ」とカンナが言うと、ふたりとも「えっ？」と驚いてカンナを見た。

「それに事業もあまり上手くないってないようで、そのうち週刊誌に載るかもしれないわ」

両親はしばらく顔を見合わせていたが、「まあ、いいわよ。いざとなったらお父さんと二人、温泉にでも行ってるから。ね、お父さん？」と母が父を促している。

「そうだな。婆さんの容態が落ち着いていたらだけどな」と父も頷いている。

「カンナ」と母が真面目な顔をして口を開いた。

「世間では離婚が簡単になった風潮だけど、経験者を見ると落ち着くまでやはり時間がかかるよ。

カンナは特にかげがえの無い嫁だったからね。あちらさんだって手放してから未練もでてる。1、2年は辛抱しなさい。いいわね」

「はい」

「騒がしくなるのが事前にわかったら言ってくれ。それから母さん、取材がきても滅多なこと言っんじゃないぞ」

「わかってるわよ。私はおしゃべりだけど、娘の立場を悪くするよ
うなことはしない」

「ごめんね、いつまでたつても落ち着かなくて」

「まあ、そのうち、時間が立てば誰も何にも言わなくなるさ」

お茶はとつくに冷めてしまっていたが、3人共何も言わずに飲んだ
夜だった。

最後まで油断はできなかった工事も無事終わって、琢磨はほっとしていた。

最後の夜に現場を荒らしに来たチンピラ達と小競り合いになったが、ちょうど巡回中のパトカーが通りがかって事なきを得た。

琢磨は喧嘩慣れしていていてなんともないが、息子はどうなんだろうか。

なんとなく跡を継ぎそうな感じではあるが、琢磨の学生時代と比べると大人しいような気がする。

アイツ、喧嘩したことあるのかなと考えているところに着信があった。

「俺だけど、今いいか？」

兄の満からだ。

「うん。大丈夫だよ。何かあったのか？」

「明日さ、お前の友人の小野寺さんに会っただけ・・・」

「いつから友人になったんだ？」

「お前が同級生というだけで俺に仕事を回したりしないだろうが」

「それが用事か？」

「いや。あれから小野寺カンナの調査をちょっとしたんだけど、なかなか上手くいかなくて」

「ん？」

「小野寺カンナでは情報が無いんだよ。しかも、困ったことにこの周辺の銀行に口座がない」

「ああ、なるほど」

「どうしようか」

「小野寺は最近離婚して実家に帰ってきたんだよ」

「ちえっ、早く言えよ」

「実家に帰ったなら戸籍も戻ってるんじゃないか？」

「そうだな」

「ありそうか？」

「金か？」

「ああ」

「たぶんな」

「そうか。とりあえず明日は会ってみるかな」

「兄貴がなんでこんなに時間かかってるんだ？」

「忙しかったんだよ、俺も」

琢磨はカンナが言っていた「応援よろしく！」という言葉思い出していた。

「俺なら受けるな、この仕事」

「そうか」

「上等な匂いがする」

「え？」

「小野寺カンナだよ」

「ほう。良い女なんだな」

琢磨は言葉を選んで言った。

「アイツは正直だ。自分からは言わないが、直接聞いてみればいいじゃないか。嘘は言わんよ」

「わかった。そうするよ。邪魔したな」

「あ、兄貴。小野寺の旧姓がわかったら教えてくれ」
「了解」

琢磨は無性にタバコが吸いたくなった。

事務員に「コーヒー頼むよ」と言って、タバコに火をつけた。

一方、カンナのほうは設計事務所に行く前に、もう一度資料に目を通していた。

第一回目のプレゼンテーションは大事だと思う。

まだ埃っぽいオフィスの入り口を全開にしてPCと格闘し、いくつかの資料を追加してファイルを作る。

次にインターネットで秋吉設計事務所の情報を検索した。

しかし、田舎の会社である。代表的な仕事はいくつか見つかったものの、社長個人の情報はなにも等しい状態だった。

名前と住所、出身大学くらいか。

すぐに諦めて、どうするかと考えをめぐらす。

プレゼンテーションには相手の分析が大事だというのは過去の経験からも知っている。

ラップトップをスリープにし、蓋を閉じて鞆に入れる。

ネットに情報がなければ近所の井戸端会議に頼るしかあるまい。

「ちょっとお茶でもしてくるわ」とリビングに居た父親に声をかけた。

「山野コーヒーか？」

「うん」

「ついでに豆を買ってきてくれ」

「どの味が良いの？」

「正吾君が知ってるよ」

「おっけ。車借りるね」と言って家を出た。

正直、山野正吾の店にはあまり行きたくないが、たまにはいいかと

思うことにした。

取り立てて親しくはなれないけれど、まいいかと思ってしまう雰囲気
気が正吾には昔からあった。

木の枠がついたガラスのドアを押して店に入ると、まだ午前中のせ
いか人が居なかった。

正吾が気がついて、「おっ！」と手を上げる。

その仕草も昔のままだ。あまり成長してないらしい。

「あれ？まだ開店前だった？」

「いや、今開けたところ」

「父に頼まれてコーヒー豆を買いに来たの。久しぶりなんで私も飲
んで帰るわ」

「じゃ、ちょっと掛けて待ってて」とカウンターを勧められた。

とりあえず作ったばかりのホットコーヒーをカンナに出しておいて、
「小父さんのブレンドはちょっと難しいんだ」と言いながら、焙煎
器を調節している。

カンナは暫くその様子を見ていたが、一段落したのを見計らって話
しかけた。

「先日はありがとね」

「ん？」

「秋吉君のところ」

「ああ。行ったのか？」

「うん。それでいくつか紹介してもらったんだ」

「そっか。家建てるのか？」

「んっ、まだわかんないわ」

カンナはコーヒーを一口飲んだ。

「家なんてそんなに簡単に決められないでしょ」

「そりゃそうだ」

「で、今度秋吉設計にも行くことになったんだけどさ」

「へえ、兄貴のところか」

「うん。そういえばお兄さんが居たけど、一級建築士になってるんだってね。」

同じ学校に居たっけ？お兄さんも」

「あれ？知らなかった？俺らの高校の先輩っしょ」

「ふん。全然知らなかった」

「2年上だよ、確か。秀才でさ、女の子にも人気があったよ」

「思い出せない・・・」

「お前は昔から周りを見てなかったからなあ」と正吾が笑う。

「イケメンかあ・・・。怖いなあ」

「いや、普通、女には優しいだろう。男の俺なんかには怖い感じだったけどな」

正吾は思い出すように目を細めていた。

「うん。切れるって感じだな。鋭いつての？そういう目をしてた」

「でも、もう50歳くらいになったんじゃ人間丸くなってるかもね」

「そりゃそうだろ。子供は確か2人かな。奥さん、結構綺麗な人だよ」

「そうなんだ」

「学生るとき知り合ったとか言っつて、確か神戸のいいところのお嬢さん」

「秋吉組も雰囲気変わったね」

「あははは、時代が違うからなあ。親父さんのころとは」

「で、お父さんのほうは引退したんだって？」

「ああ、数年前に琢磨に会社譲って、財産も適当に子供たちに分けて、楽隠居してるよ」

「へえ。出来た人だね」

「今は20歳以上も離れた女と一緒に暮らしてるんじゃない？」

「え？秋吉のお母さんは？」

「居るよ」。居るけどさ、親父さんも落ち着かないんだよね。

しばらく居たと思ったら、若い女を作ってしばらく帰ってこないとか。

まだそんなことやってるよ」

「仕方ないなあ。昔の人は」

二人で笑ったが、肝心なことはこれからだった。

「秋吉組ってさ、やっぱりアレなの？」

「ん？」

「私たちは同級生としてしか知らないけど、土木なんて言ったら怖い人たちもつながりがあるのかなって・・・」

「どうだろうか。確かに親父さんの時代は限りなくそれに近かったけどな。」

琢磨は全然違うとおもっ・・・」

「そっか」

「琢磨のお母さんってのがさ、まるつきり姐さんって感じなのよ」

「えゝ？そうなんだ」

「うん。昔から若い衆みたいなのが付いてて、まあ親父さんもそうだけど」

「そっか。心してかかるわ」

「ああ、頑張れよ」

「全然心強い励ましにはなっていないだけど？」

「俺が頼りになるわけないだろう」と正吾が笑うので、カンナも思わずつられて笑ってしまった、

運よく店に誰も居なくてよかった。

コーヒーを飲み終える頃には常連さんがやってきて、正吾も俄に忙

しくなる。

カンナは慌てて席を立ち、お金を払って外に出るとほっとした。

正吾の店は分煙になっていなかった。

来る人のほとんどは喫煙者だ。

都会では考えられないなあと思いながら髪についた煙草の匂いに顔をしかめた。

家に帰り、正吾のところでは開くことのなかったPCを立ち上げ、メールをチェックする。

全部ダウンロードしたところに、階下から母の「ご飯ですよ」という声が聞こえた。

処理するのは午後になる。

ゆっくりすればいいやとカンナは思った。

昼食中は入院している祖母の話題が出た。

今週末には退院するので、母は週末か来週早々にまた祖母の家に行くらしい。

祖母の痴呆がもっと進んだら、自宅で介護するのは難しくなると言っていた。

今の様子では義理の姉たちが可哀想だとカンナの母が言っている。週明けには一度兄妹会議をするらしい。

「お祖母さんにも希望を聞いてみてね。仲間はずれにすると怒るわよ、お祖母さん」とカンナが言くと、母は「違いないっ」と言った。

「あ、私、週末は東京に行くかも」とカンナは両親に言った。父が「そうか」と言っただけだった。

母に、「東京の帰りにお祖母さんのところにお見舞い行こうかな？」
と言うと、

「それは喜ぶよ」と母は短く答えて、後片付けのために席を立った。

カンナは父親に食後のお茶を淹れながら、「パパ、そろそろ私も車
買おうかな」と話しかける。

「買うのか？」

「うん。田舎だから小回りが利くのがいいなと思って・・・」

「車庫証明は取れるぞ」

「ガレージにおいていいなら、考えてみるね」

「あまり派手なのは目立つ」と父が何気なくアドバイスしてきた。

「東京においてあるのは、ここでは立派に派手だからなあ」と言う
と、

「国産車にしときなさい」と言っ、話はそれで終わった。

ミネラルウォーターのボトルを手に、カンナは二階の自分の城に戻
った。

オフィスの仕切りをはずしてしまったので、息苦しい感じは少なくな
った。

もう一度メーラを開くと、昼食中に更に受信数が増えていたので、
片っ端からメールを開けて読んでいった。

明後日、金曜日に2、3のミーティングを東京で設定してそれぞれ
の関係者にメールを送った。

秘書にCCで送るのも忘れない。

午前中はスタッフとの打ち合わせ、午後は取引先、翌土曜日も絡め
て時間の隙間に弁護士と会計士だ。

金曜日の朝一に出るか、それとも木曜日の夜だなと考える。
木曜の夜に着けば金曜日は朝から仕事ができる。

時間を確認して携帯電話に手を伸ばした。

最初は弁護士で次は取引銀行の頭取だ。

銀行のほうは正確には頭取ではなくて秘書なのだが、お願いしておくことがあった。

どちらも卒なく終わらせて、ほっとする。

時間があるので明日の夜に出發できるように簡単に荷造りすることにした。

約束の1時きっかりにカンナは秋吉設計建築事務所に到着した。

案内を乞うまでもなく、入り口に立ったカンナをスタッフが気がついてミーティングルームに案内してくれた。

鉄骨木造三階建ての中庭を配した作りになっており、市街地の狭い土地を上手く使っていた。

少し待つと背の高いダンディな紳士が部屋に入ってきて、「はじめまして、秋吉満です。今日はお越し頂いてありがとうございます」とカンナに挨拶をした。

細身ではあるが日に焼けて健康そうな人だった。

「小野寺さんはうちの琢磨と同級生とは思えない。お若い」と言う。カンナも名前を名乗りニツコリと微笑んで「秋吉君よりはかなり背が高いですね」と笑って返した。

「あははは、背のことはあいつは気にしてますよ」

「でも、やはりお顔はよく似ておいです」

「それは喜んで良いのか、悲しんでいいのかわかりませんね」と言うので、

「私としては似ていらっしやるのでお話しやすいですけど？」とカンナはそう言つて、満から目を逸らさなかった。

琢磨の兄、満は突然に笑い出した。

笑いが収まると「大変失礼しました」と言つて名刺を取り出し、「家をお建てになる計画と伺っております」と態度を改めた。

どうやらテストは合格したらしいことにカンナはほっとした。

土地は手配済みであること、庭も含めて総合的に設計することと建築中の監督も引き受けてくれる建築士を探していることを話し、力

ンナの考えていることをかいつまんで話した。

「土地はどのあたりですか？」

「これが土地の住所と図面です。写真はここに・・・」とカンナは持ってきた資料を見せた。

満が手にとって見ている間にカンナは、「学校や役所を外観だけですが拝見しました」と話を続けた。

「私には素人なりにも今から建てようとする家に希望があります。好みもあると同時にわからないこともたくさんあります。

それでも自分が納得したものを作っていただきたいと思っています。私に辛抱強く付き合って、私の考えを形にしてください方をお願いしたいと思っています」

「ほお、私が断ればどうされますか？」

「そうですね。別の建築家の人をお願いするだけです」とカンナは淡々と言った。

しばらく満は土地の写真を手に持ったまま黙っていたが、「もう少し具体的にご希望を伺って良いですか？」とカンナを促した。

カンナは自分で作ったファイルを取り出し、それとは別に箇条書きにしたリストを満から見安いようにしてテーブルに置いた。

あまり早口にならないように気をつけながら自分自身で考えた建築概念を話していく。

その説明は1時間続いた。時折満も質問をしたり、補足説明をしてくれる。

ようやくカンナの話が一段落したところで、満は新しいお茶を頼んでくれた。

喉が渴いていた。

「なるほど。小野寺さんのご希望は今までのところは理解できたと思います。」

少し時間をいただけませんか？私なりに形が見えてくるまで時間をいただけるとありがたい」

「ええ、それはもちろんです。今お話したことで足りなければいつでもご連絡ください」

「このファイルは小野寺さんが？」

「はい、自分で作りました」

「よく出ています。感心しました」

「ありがとうございます」

カンナは連絡先を書いた名刺を満に渡し、「外出がちなものですから、メールをいただければ助かります」と伝えた。

「それで、形というのはどの程度のことでしょうか？」とカンナは素直に聞いた。

「建築のコンセプトです。設計図はまだ描きませんが、見取り図と外観イメージはラフでよければ何パターンか作れるとおもいます」と満が言ったので、

「工期スケジュールも簡単につくっていただけたら嬉しいです。同時にお金の手配も考えなければならなので、支払いスケジュールも示していただければ助かります」

満はそれを聞くと、決心したようにカンナに言った。

「小野寺さん、失礼ですがどの程度の広さの家をお考えですか？」

「秋吉さんには建築家として、どの程度守秘義務がお有りと思って

おいですか？

もし、私の考えを他に漏らさないとお約束いただけたら具体的なフロアプランについて希望を述べたいのですが」

「もちろん、施主さんのお考えは100%この建物から出ないことをお約束します」

「それは良かった。もうご存知のとおり、専門用語は知りませんので、私なりにお話していいですか？」

「ええ、小野寺さんのご説明は非常にわかりやすい。ビジュアル的ですし」と満が言ってくれたので、カンナは一呼吸してから詳しく説明を始めた。

「これは絶対に希望するもののリストです」カンナは別の新しいリストを見せた。

満もかなり突っ込んだ質問をする。

その後一時間のやりとりで、なんとかカンナは自分のプランを全部説明したつもりだ。

「建築面積がどのくらいになるのかは私には今のところ見えません。秋吉さんに考えていただいてから決めてよろしいでしょうか？」

「それが私の仕事なのでお任せいただければいいのですが、もうひとつ大事なことを伺いたい」

「はい何でしょうか？」

「資金はどういう手段でお考えですか？」

「支払いスケジュールが決まったら、それに合わせてキャッシュでと考えています」

「個人としてはかなり大きな建築になるのはわかっていらっしやいますか？」

「はい」

「材料費についてもかなりの金額になります。基礎、造園、建物は別の業者になります。それぞれ契約に基づいてスケジュールどおり

が望ましいですね」

「信用調査をしていただいて構いません」

「ありがとうございます。でも、小野寺さんはこの街の銀行と取引がありますか？」

「そう、そこなんです。近くの銀行や信用金庫などには口座がないのですよ。」

私は都市銀行にしか口座を持っていないので、そこからお支払いしますけど、

ご心配でしょうからここにお問い合わせ下さい」

と、カンナは取引銀行の頭取と顧問弁護士の名刺をコピーしたものを差し出した。

「その銀行だけでは信用が足りない場合は、弁護士に何でも問い合わせして下さい。」

必要なものは準備するように言っておりますから」

カンナがそう言うと、「お気遣いありがとうございます。いずれ時期がきましたら問い合わせさせていただきます」と満は返答した。

たくさん話したので喉が渴いたカンナは、満にお茶のお替りを頼んだ。

「私も喉が渴きました」と満は笑って言って、内線でお茶を頼んでから「ところで小野寺さんは、料理はなさるのですか？」

「はい？料理ですか？」

「はい。ご自分で料理を作られる方なのかどうか判断できませんでしたので」

「そうですね、ここ何年かはあまりそういう機会がなかったのですが、お料理自体は好きなので、この家が出来たらするつもりです」

「そうですね。普通女性はキッチンの話から入るのですが、小野寺さんはそうではなかったものですか」と満は笑った。

「ああ、今日は全体のコンセプトについてお話だけだと思いましたので。」

キッチンのカウンターの素材とか、包丁置き場についてとか、キャビネットの取っ手についてはとか・・、そういうのはまだ先の話だろうと・・・」

「やはり、そうでしたか」

「そういうのはインテリアだと思ってあります。建築とはまた別に考えております」とカンナが言くと、

「その通りです。わかってらっしゃる」

「それと写真がたくさんありますが、海外のはご自分で？」

「はい。行った時に撮ったものです」

「海外に暮らしたことはあるのですか？」

「少しだけですけれどね。フランスとカナダにはしばらく居ました。」

あとは旅行のみです」

「そうでしたか。色彩感覚が素晴らしいです」

カンナは思わず噴出しそうになりながら、「褒めて頂いても何もでませんよ」と言った。

「お世辞じゃないですよ」と満は言ったが、「もう今日は説明に脳を全部使い果たしてしまったので少々疲れました」と二人で笑っているところに、スタッフがお茶を持ってきた。

お茶で喉を潤しながら、海外で印象に残った建物の話をする。

満も2年ほどヨーロッパを中心にいろんな国を放浪していたことがあると、昔を懐かしんで楽しそうに話した。

最後にラフイメージができるだいたいの期日を確認して、設計事務所を後にしたカンナは家に帰ってようやく深いため息を吐いた。

満がなかなか好人物だったことに安堵した。
時々、カンナが女であることを見下す輩も居る。
ちゃんと礼を尽くして接してくれたのは有難かった。

空港までの高速バスの時間にはまだ間があるので、少し横になろうとしたが、
先に琢磨に連絡を入れたほうが良いと気がついて携帯に手を伸ばした。

『今日は秋吉設計さんに行って来ました。優しくお話を聞いてくれて、とりあえず考えてくれるとのこと。秋吉君のおかげです。ありがとうございます』

そういうメールを送った。

携帯を横に置いて目を瞑ろうとしたときだった。

着信があった。バイブレーション設定もしているので、ぷるぷる震えている。

カンナは嫌々携帯を開いた。
秋吉琢磨からの電話だった。

「今いいか？」と琢磨からの電話だった。

「ん？今メール送ったけど？」

「うん。だから電話した」

「ありがとね。お兄様に親切にしてもらった」

「兄貴のほうは仕事だからいいんだよ」

「そ。で、何か用？」

「うわっ、機嫌悪そうだな」

「いえ、そんなことないけど。横になったところだったから」

「疲れたのか？」

「うん、少々ね」

「そっか。で、今夜飯一緒にどうか？」

「えゝ？普通、疲れたって人にご飯誘う？」カンナは笑い出してしまった。

「でも、今日は夜の便で東京へ行くのかと思ってるから・・・」

「え？これから行くのか？」

「うん、その予定」

「6時の高速バスか？」

「あはは、よくわかったね」

「夜の飛行機だったらそのくらいだろ」

「うん」

「帰りはいつ頃？」

「うゝん。決めてないけど、来週の半ばかな」

琢磨が黙ってしまったので、「それじゃあ」と言って電話を切ろうとする、

「送っていくよ」と琢磨が言った。

「え？空港までつてこと？」

「ああ」

「1時間半はかかるよ？」

「知ってる」

「帰りは一人で運転？」

「ああ、そうだな」

「私はイヤだな。一人で帰すのは」

「そうか？」

「時間の無駄じゃない？」

「そうともいえない」

「なんで？」

「ちようど走らせたい車があるからな」

「ふゝん」

今度はカンナが黙った。

「じゃ、5時半に迎えに行くわ」

「ちょっと、それは困る」

今度は即答だった。

家にはまずいかと琢磨はとっさに、「じゃ、バスターミナルでどうだ？」と言った。

「本気なの？」

「ああ。それと荷物は多いのか？」

「ううん、ハンドバッグとコンピューターバッグだけ」

「わかった。じゃ、5時45分にターミナルで」

「いや、そんなことしてもらったら・・・」

「着く前に電話するから携帯気をつけておけよ」
と言って琢磨は一方的に電話を切れた。

すっかり目が覚めてしまったカンナである。
仕方なく起き上がって、部屋を少し片付ける。

PCを立ち上げると、今日秋吉設計で話した資料をまとめ保存しておく。

念のためにサーバーストレージにもアップしておいた。これでいつでも取り出せる。

メールを確認すると、またいくつか届いていたのでその処理をする。田所弁護士からはもう一人弁護士を増やすことを提案してきていた。しばらくは落ち着けそうも無い。

すっかり別れたはずなのにこれ以上何が欲しいのだと憤りも感じるが、

怒ったところで怒りというものは何も良いものを産み出すわけないことをカンナは知っていた。

今のところ元旦那への今後の対応は決めかねているが、明日弁護士たちから提案があるのはわかっていた。

決めなくてはならない。

何度も決断というものを下してきたが、こんなに気の重いものは久しぶりだった。

PCの電源を落としてバッグに入れる。

柔らかな色のカジュアルなスーツに着替えて、バッグを持ってカンナは一階に下りた。

「お？もうそろそろか？」とリビングでTVを観ていた父がカンナを見て立ち上がるうとした。

「うっん。もう少し時間あるからお茶を飲もうと思って」

「そうか。父さんにも淹れてくれ」

紅茶を淹れて持っていくと、「6時のバスだったよな？」と言うので頷くと、「じゃ、5時半に出るか？」と言う。送るつもりのようにだ。

「切符も買わないとだし、お土産もちよこつと見たいから15分ほど早く出てもらってもいい？」

「ああ、いいぞ」と言つて父はお茶を一口啜った。

「車のことだけど・・・」

「欲しい車、決まつたか？」

「それがまだ見てないのよ」

「どんなのが良いんだ？」

「ほどほどに小さくて、小回りが利いて、エコのいいかなって思つてる」

「ほお、エコか」

「ハイブリッドっていうの？」

「最近宣伝してるなあ」

「パパ、時間のあるときに見ておいてよ」

「ああ、わかった」

「帰ってきたら私も見に行くから」

「ああ。じゃ、そろそろ行くか？」

そう言つて立ち上がると父は母を呼びに行つた。

「何かあつたら連絡ちょうだい」

「うん。お祖母さんのところへ寄れそうだったら連絡するわ」

「ああ、そうして」

母はガレージのところまで一緒に来て、「あまり無理しちゃだめだよ」と言つて見送つてくれた。

バスターミナルで父の運転する車を降りた後、近くのショップを通

り抜けて、本屋まで歩いて行つた。

移動中に読む本を1冊だけ購入し、時計を見ると5時40分。そろそろだなと思っていると、琢磨から電話がかかってきた。

「どこに居る？」

「本屋で本買ったところ」

「じゃ、そのまま本屋を出て右手にコンビニがあるはずだから、そこで待ってて」と言う。

小さな街のよいところは、本屋も少なくコンビニも少ないということだろうか。

店名を言わなくても本屋と言っただけでどこの本屋なのかすぐにわかる。

探さなくても本屋を出て右を向けばコンビニはすぐに見つかった。

低いエンジン音と共に小さな車がカンナの前に止まった。

運転席に居る琢磨が助手席を指差すので、勝手に助手席を開けて乗り込むと、

「びつくりしたよ。どこの女社長かと思った」と琢磨が開口一番に言つたので、

カンナは笑い出しそうになった。

「それよりも早く行きましょう？あまり目立ちたくないわ」と言つて琢磨を急がせる。

琢磨は車を発進させると、「目立ってるのは小野寺のほうだよ」と笑いながら言つた。

「それにしても地味な車ね」とカンナが言つと、琢磨は嬉しそうに「どこが地味なのか言ってみてくれ」と言い返した。

「小さくて、色はネズミ色だし。まあちょっとは光ってるけど。そんな風にハンドル切ったらまるでほんとうのネズミみたいな動きするじゃないの」

「おかしいなあ、普通は素敵な車ねって言われるんだけど」

「確かに、運転しているオジサンを見ると、車を褒めたくなる気持ちわかるけどさ」

琢磨とカンナは同時に噴出した。

「笑わせるとは危ないなあ。運転中だぞ」笑いながら琢磨が言った。

カンナは笑いが収まると、「この車、私も欲しかったのよね」

「マジで？」

「うん。しかもこの色、シルバーメタリック！」

カンナはタコメーターを覗き込んだ。

柔らかな甘い匂いが琢磨の鼻腔をくすぐった。

「最近現場に行つてて、あまりこれに乗ってなかったから、一度エンジン回したいと思つてたんだよ」

「一段落したの？」

「ああ、昨日で全部終わつて、今日が安息日」

「他にも現場持つてるんでしょ？」

「うん。別の部隊が取り掛かっているがあるので来週からそっちに移行するしね」

「子供たちは？」

「お手伝いが居るから」

「そつなんだ。じゃ、今日だけのんびりなのね」

「陽菜が熱に浮かされたようにカンナさんがね、カンナさんが・・つて言ってるよ」と苦笑する。

琢磨の口から「カンナ」という名前が出たので、カンナはどきつとした。

「あ、そのことだけど。陽菜ちゃんにあまり家では私のこと言わないようにとお願いできる？」

「ほお、理由は？」

「奥さんが帰ってきたらあまり気分が良くないと思うから。居ない間に陽菜ちゃんの入學準備しちゃったわけだからさ」

「ああ？そんなものか？居なかったのはあいつなんだけだな」

「そんなものだから女って」

「そうか・・・」

「私が言ってたって陽菜ちゃんに伝えてもらえれば助かる」

「わかったよ。悪かったな。氣い遣わせて」

「いえいえ、思いがけず楽しかったから私は良いんだけど」

「そっか。まあ、今日は送るからそれでカンベンして？」

「うん。ありがとね。助かるわ」

琢磨の運転する車は高速に入っていた。

「それにしてもドイツ車好きだね？」

「そうだなあ。やっぱりドイツ車になっちゃおうわ」

「アクセル踏んだときの感触が良いよね」

「運転したことあるのか？」

「少しくらいは私だって運転するもの」

以前に空港から街まで乗せてもらったのはベンツだったし、今日の車はBMの2シーターだ。

「よかったわ。バカデカイだけのアメ車なんかで来たらどうしようかと思ってた」

そう言っただけでカンナはくすくす笑った。

それからしばらく車の話が続けたが、しばらくすると会話が途切れた。

無言でもちつとも苦にならないので、それから空港近くの出口になるまで二人ともスピーカーから流れる音楽を聴いていた。

高速道路を降りて空港の手前にファミリーレストラン等の外食チェーン店が立ち並ぶ通りがある。

カンナはそこで軽くなにか食べたいと言った。

琢磨が何でもいいぞと言うと、最近安くて美味いと評判になってきたうどん屋の看板を指して、うどんが良いと言う。

駐車場に車をつけ、琢磨が助手席のドアを開けるとカンナが手を差し出した。

「この車、座席が低いから降りるのが難しいわ」と言うので、琢磨はカンナの手を取って引っぱりあげた。

小さな声で「サンキュー」と言ったカンナはうどん店のほうを見ながら「前から一度食べてみたかったんだよね」と嬉しそうな顔を琢磨に向けた。

「いくらでも食べて良いぞ！好きなだけ食ってくれ」

「じゃ、お言葉に甘えようかな？」

「お前はもう少し太ったほうがいいぞ。軽すぎだろ」と琢磨が言うのと、それには答えずに、

「入ろうよ！セルフのうどん屋って初めてなのよ。ドキドキするわ」とカンナが言った。

カンナはそれほど空腹を感じていなかったが、ずっと運転している琢磨を休憩なしに返すわけには行かない。

適当に理由をつけてうどん屋に入ることにした。

食べてみると意外に美味しかったので全部食べると、琢磨も満足そうだった。

出発カウンターのある建物の前で車を止めると、琢磨はハンドルに手を持たせかけてカンナをじっと見た。

「俺たち・・・」

「ん？」

「俺たち同級生ってだけじゃなくて、友達と思っていいよな？」

カンナは少し考えていた。琢磨は失敗したかなと内心ドキドキしていたが、

「うん、いいよ。秋吉君がそう思うなら、友達ってことで」とカンナが答えた。

ほっとしながら、「じゃ、カンナって呼ぶよ。小野寺は呼び難い」

「じゃ、琢磨って呼ぶとするかな」そう言ってカンナは笑った。

「いきなり呼び捨てかい！」そう言って、琢磨はほっとしながら笑った。

うどん屋の駐車場と同じように、カンナを座席から引っ張り上げると「ほんとうにありがとね。帰りの運転気をつけてね」と言ってカンナはターミナルビルに入っていった。

琢磨を見送りもせず、一度も振り向きもせずにだ。

「お前も気をつけて行けよ」と琢磨が言った言葉には、何も言わずに頷いただけだ。

あっさりした奴だったよな昔も、そう思いながら琢磨はシートベルトを締めた。

煙草を手にしたものの、車内に漂う柔らかな匂いも悪くないかと火をつけるのはやめた。

そして、来た道を半分の時間で帰ろうと決めて、ニヤリとした。

それから10日経っても、カンナは実家に帰ってなかった。

東京での打ち合わせの後、友達と一度食事に行っただけで、関西の祖母のお見舞いに行きそのまま旅行に出ていた。

東京では元旦那の会社からの営業妨害に、傘下会社の社長たちが集まって対応を練っていた。

営業妨害といえばまだ聞こえは良い。露骨な嫌がらせということだ。具体的なことはすでに取りまとめられていたので、それに一件づつ目を通してから緊急会議を行った。

カンナは被害の詳細報告を忘れずに届けるようにということと、顧客に辛抱強くそして真摯に振舞うようにと告げることが精一杯だった。

た。

社員の不安を取り除き、顧客対応を徹底させなければならない。

そのためにはTOPの姿勢が重要だった。

数日のうちに対応策の効果が始まること、今後約一ヶ月で收拾することをほのめかして、一応解散とした。

社長のなかでも特に重要な数人とはその会議の後、さらに秘密の会合をした。

カンナが定宿にしているホテルのスイートで、盗聴、盗撮などのセキュリティチェックをした部屋での会合が始まった。

今回はマスコミを使うこと。その結果としてカンナもマスコミへの露出は避けられないこと。

スキヤンダルになるので、沈静化するまではカンナには直接連絡を取らないこと。

その間、田所弁護士とカンナの秘書たちが連絡係りになることなどを伝え、

スキヤンダルの影響で、もしかしたら元旦那のところに査察が入るかもしれないと告げた。

これには皆が驚いて顔を見合わせていた。

その場合、風評の影響が考えられ、株価にも一時的に反映されるかもしれないが、

あくまでも一時的なものであることを説明して、株主への対応も伝授した。

「それでしたのですね。会長に就任された後、会計を全部見直していたのは」と一人が言った。

「はい。そうなんです。今私たちの会社は全部クリーンですから安心してください。

相手が査察に入られても私たちは安全です。ですが・・・」とカンナは続けた。

「元は一緒の資金源と見られて、検査が入るかもしれません。」

事情徴収されることになるかもしれませんが。でも動揺しなくてもいいですからね」

「はい」

「その場合は田所弁護士にすぐに連絡してください。会計士の方も準備はできてますから。」

そして今ここに出席してない社長たちが不安を感じたときは支えてあげてください」

「わかりました」と全員が頷いた。

「ほんとうに申し訳ないです。私が筆頭株主ということで皆さんを巻き込んでしまつて」とカンナは立ち上がって深く頭を下げた。

「よしてください」と全員が言つたので、「その代わり、次の戦略をここに用意しています」とリストを提示した。

「これは皆さんに差し上げるわけにはいけないので、一緒に見てください」とプロジェクトに大寫しにする。

「相手の保有する会社一覧です」

皆が顔を上げたので、カンナは説明を始めた。

「次の戦略を開始するときはまたここに戻ってきます。」

それまでは少し大人しく田舎にでも籠つておりますので、不在中はみなさんでよろしく願います」そうカンナが言うと、「お戻りをお待ちしています」と全員が言ってくれた。

IT企業なのでそのTOPたちも若い。

カンナが心配しなくても秀でた頭脳と体力があるのでなんとか乗り切るだろう。

その後、カンナが関西の祖母を訪ねた日に、元旦那のスクヤンダル記事が週刊誌に掲載された。

まず皮切りが、ＥＴ長者の若い新妻に関する結婚前の交際疑惑だ。

「Ａ子さんは、当時妻の居た現在の夫と不倫関係にあった同時期に他の男性とも付き合っていたらしい」という内容の控えめな記事だ。生まれたばかりの子は誰の子だ？というニュアンスのある記事になっていた。

カンナは祖母の看病をしている母にそつと「ごめんね。始まったから」と耳打ちした。

「うん。わかった。こつちのことは気にしないでいいよ」

「家に当分帰れないかもしれない」

「旅行でもして楽しんでおいで」と母は物分りの良いところを見せた。

次にカンナは神戸の兄のところにも立ち寄った。

兄は県庁の職員だ。妹のスクヤンダルは頭が痛いに違いない。

お昼休みに近くのレストランで食事をしながらいつまんで状況を説明すると、

「別れるってたいへんだな」とため息を吐かれた。

「父さんから聞いてるよ。心配するな。人の噂もなんとやらだ」

「ごめんね、ほんとに」

「いやいや、うちはそれごろじゃないからな。２人の育ち盛りの子供に振り回されてる」

「元気でいいじゃない。お義姉さんはどうしてるの？」

「元気だよ。元気で困る。またちよつと太ったと毎日言ってる」

「実家がケーキ屋さんだもんね。仕方ないよ」と言つて兄と一緒に笑った。

「お義姉さんのところにケーキを買いに寄ってもいいかな？」と聞く
と、

「喜ぶよ、それは」と兄は笑って言ってくれた。

「じゃ、ちよっこつと寄ります」

「ああ。それからこつちのことは気にするな。大丈夫だからな」

「はい。ほんとごめんね」と言っつて兄と別れた後、義姉の実家に立ち寄った。

そこでも事情を話して謝ると、「いいよ。もう全然気にしないで！
いっそこそこにも取材とか来てくれないかな。そうすれば行列
店になるから、それもいいなあ」とのんびりした口調で言っている。
「今でもすごく忙しいのに・・・」とカンナは思わず苦笑した。

義姉の実家は関西で有名な洋菓子店だ。

老舗の上に義姉の弟が継いでからさらに人気が出ている。

義姉は実家を手伝っていた。

車を待たせているからと、お茶を断って義姉のところを出た。

その後はまっすぐ空港へ行き、飛行機の空席に座って北海道の別荘
に到着したのだ。

関西でも北海道でもうかつにタクシーには乗れない。

関西では関西支社の社用車を一日借りて、北海道ではレンタカーだ。

北海道はまだ寒かった。

管理人が暖炉に火を入れてくれたので、到着したのは夜にも係
わらず部屋は暖かく、その夜は疲れもあつてぐっすりと眠れた。

次の日には、その日発売の週刊誌が一斉に取り上げていた。

まだ不倫中の時代にA子と元旦那との2ショット、当時付き合っていて本命と予想されていたプロゴルファーやタレントなどの2ショットが効果的に並べられていた。

A子の同時の友達が語る「どっちの子かわかんない」発言なども盛り込まれている。

もちろんスポーツ新聞にも面白ろ可笑しく記事になっている。お昼にはワイドショーでも取り上げた。

カンナの写真も少しずつ出始めた。

A子の旦那の元妻という扱いである。

昔の写真で不鮮明で目隠しも入っているが、どうみてもカンナだとわかる写真だ。

報告として送られてくる週刊誌とスポーツ新聞にざっと目を通す以外には他にすることもない。
散歩をしたり、車を運転してスーパーに行ったり、DVDを観て過ごしていた。

カンナが別荘に来て5日目だったか、散歩をしていると隣の別荘のオーナーを見かけた。

「あ、カンナ！来てたの？」と気軽に声を掛けてくれたのは、華僑の人だ。

今、中国人の間で日本に別荘を持つのが流行っている。

2〜3ヶ月に1度くらいの割合で数日滞在して楽しむのが彼ら流らしい。

カンナに声を掛けたのは、その火付け役ともなった人で、貿易商ら

しかった。

日本語が話せるのが嬉しいのか、顔を見るとこうやって話しかけてくれる。

「あら、楊さんはいついらしたの？」

「僕はね、昨日来ました」

「また専用ジェットで？」

「時は金なり！です。あつと言う間に着きますからね」

「楊さんらしい・・・」とカンナが笑うと、

「ちようどよかったです。カンナ、ちよつと話があります」

「はい、なんででしょうか？」

「散歩の途中でしょ？僕も一緒に少し歩きますよ」と言つてカンナを促して歩き出した。

「僕の友達が別荘を欲しがっているんです」

「そうなんですか。この辺も楊さんのお友達が増えましたね」

「僕が良い場所を勧めますからね。で、カンナの家を売るつもりはありませんか？」

「ここの別荘のこと？」

「はい。カンナのところ、眺めが良いでしょ？」

「楊さんのところほどではないとは思うけど・・・」

「いけません。こういう時は、この別荘地で一番眺めが良いと言いなさい」と言つてカラカラと笑った。

「ん」。良い値段で買ってくれる人なの？」

「はい。彼は金持ちですからね」

「楊さん、高く売ってくれるなら考えてみようかな？」

「ほんとですか？」

「面倒だから、家具も一緒に売りたいな」

「あとで、彼を連れて見に行つてもいいですか？」

「はい。でももしも売買となったら弁護士に話します。それが条件です」

「ああ、よかった。カンナが来ていて助かったよ」

午後にも訪ねるよと言って、楊は嬉々として自分の別荘に帰って行った。

カンナが別荘に帰ってテレビをつけると、元旦那が記者たちにマイクを突きつけられている場面が大写しになった。

どうやら子供のDNA鑑定をすることにしたらしい。その情報はカンナも事前に掴んでいたが、リークした人が居たのだろう。

それだけではない。カンナは子供が元旦那の子である可能性が低いのを知っていた。

午後になって、隣の別荘の持ち主、楊が友達を伴ってカンナを訪れた。

中国元の高騰で羽振りがいいのかそれともビジネスが好調なのか、血色の良いその人は盛んに楊に話しかけてニコニコしている。

隅々まで見るようなことはせず、ざっと見て気に入ったらしい。

ほんの少しだけ中国語が解るのをカンナは楊には言っていなかった。

黙って二人の会話を聞いていると、特にリビングからの景色が気に入ったようだ。

楊の友達はすぐ買ったがつているようだった。

「楊さん、お友達はワインがお好きですか？」カンナは日本語で聞いてみた。

「はい、私の友達は皆ワインが好きだよ」と言うので、ワインセラーに案内した。

ここにはあまり来ることがないのでワインはあまり数は入っていないが、

カンナの思ったとおり、近代的な流行のワインセラーに目を輝かせている。

気がつくとも楊がカンナをじっと見ていた。

「気に入ってくれたのでしょうか？」とカンナが問うと、楊は「間違いなくね」と答えた。

「幾らだったら売りますか？」

「それは、楊さんのほうから言ってください。その価格を聞いてから売るかどうか決めます」

楊はふっと笑った。

「決断は早いほうですか？」

「はい」とカンナは返事をして微笑んだ。

「では、後で連絡します」と楊が言うので、携帯の番号を書いて渡した。

楊のほうは名刺を取り出し、さっと手書きで番号を書いて、

「これが私の携帯です。弁護士さんにはこの番号に連絡してもらってください」と印刷している番号を指で示す。

次は手書きの番号を指さして、「カンナとお隣さんじゃなくなると寂しいです。」

この番号を持っていてください。カンナはいつでも電話してください」

「はい。ありがとうございます」

「お隣さんじゃなくなっても、24時間オープンですからね」と念をおして帰っていった。

カンナは早速、東京の田所に電話をかけた。

「東京は大変な騒ぎになっていますよ」と田所は開口一番そう報告した。

「DNAだけではなく、本人も検査するらしいです」

「やはりね」

それ以上は二人ともその話題には触れなかった。

携帯電話では話せないことがある。

「ところで、お昼頃メールをお送りした件なんだけど、先ほど先方が見に来ました。」

良い感触です。今日中にもオファーが入りそうです」

「そうですか。メールは読みました。一度そちらに伺ったほうがよろしいのでは？」

「そうですね。来て頂けたら助かります」

「遅い時間になりますけど、宜しいでしょうか？」

「はい、助かります」

「では、私はこれから発ちましょう。中国語のできる弁護士は明日合流できます」

「それはよかった。あの方たちはいつもほんの2、3日しか滞在されないのです、明日がリミットでしょうね」

「仮にでも合意さえしておけば、あとは中国に帰ってからで問題ないですよ」

田所は移動しながら電話をしているようだ。

「では、千歳でレンタカーを借りたら電話します」と、言って慌しく電話を切った。

しばらくすると楊から電話があった。

思ったとおり、お友達は買いたいと言っている。

提示された価格はカンナが思っていたよりかなり良い値段だった。売りますという言葉をカンナは飲み込んだ。即答は避けるべきだ。

「少し考えさせてくださいね」とカンナは言った。

「良いお返事を待ってますよ。何時ごろ連絡いただけますか？」

「弁護士と話すのが8時ごろになると思いますので、その後で・・・」

「じゃ、連絡待ってます」

カンナは電話を終えると、客室に向かった。

田所の到着は8時ごろになるだろう。
急な出張なので他の仕事を抱えてくるに違いない。
飯の契約書も作るはずなので、並みのホテルより事務機能の備わったここに滞在したほうが快適なはずだ。
窓を開け空気を入れ替えながら、シーツを換える。
タオル類も用意してカンナは自分で部屋を整えた。

リビングに戻ると、キッチンに管理人夫婦が食材を運んで来ていた。
「お世話かけるわね」と言いながらカンナもキッチンに足を運ぶ。
「今日はいろいろ新鮮なものを調達してきました」と嬉しそうにカンナに見せる。

「卵や牛乳も牧場からわけてもらったので、味が濃厚ですよ」と言いながらも手を休めずに冷蔵庫に入れていく。

「今日のスペシャルはアスパラガスです」といって凄く新鮮な野菜を自慢げに言った。

「それは楽しみね。明日は人が来るからタイミングよかった」とカンナが言うと、

「大勢いらっしゃるのですか？」と質問してきた。

「ううん。2、3人だけよ」

「じゃ、これで足りますね」とほっとしているようだ。

肉も魚も買ってきたようだ。久しぶりに料理でもするかなとカンナは頭のなかで献立を考え始めた。

そのとき、手の中の携帯電話が震えて着信を知らせた。

画面を見ると琢磨の名前が表示されている。

「じゃ、適当に帰ってね。それから明日はお掃除をお願いできるかしら？」と管理人夫婦に言うと、「わかりました。それ以外でも必

要なときは電話ください」と話している間に電話が切れた。

キッチンを管理人夫婦に任せて、カンナはゆっくりと自室まで歩いた。

ソファに座って、琢磨に電話をかける。

数回のコールで琢磨は電話に出た。

「タイミング悪かったか？」カンナが口を開く前に琢磨はそう言った。

「電話に出られなくてごめんなさい。今、大丈夫なところに移動したから」

「悪かったな」

「いえ、ほんとに大丈夫よ」

琢磨は少し言葉を切って、「ワイドショー観てるよ」と言った。

「テレビだけ？」カンナは笑いながら聞くと、「いや、週刊誌も見た」

「スポーツ新聞は？」

「ああ、あの写真は結構大きかったから、カンナとすぐにわかったよ」

「驚いた？」

「びっくりして言葉もでない」

カンナが笑うと、「たいへんだろうな」と声を落として琢磨が聞く「ん、覚悟はしてたからそうでもないけど、恥ずかしくてさ」と自嘲するカンナに、

「東京にいるのか？」と更に琢磨の質問だ。

「いいえ。東京から離れたの」

「隠れてるわけ？」

「そうでもないけど、人の居ないところにね・・・」

「そうか。寒いところか？」

「ううん、暖かいところよ」

「南の島でビキニでも着て日光浴してるのか？」

「あははは、よくわかったね」

なぜか正直には言えなかった。

「ほんとうに大丈夫なのか？」と探るように琢磨が聞く。

「ええ。ほんとうに大丈夫。私は主役じゃないから。」

でも、これから暫くの間は私の名前も出てくるかも」

「そっか。こっちにはいつごろ帰ってくる？」

「ん、設計のことであたの兄上から連絡があつたら一度帰るつもりだけど？」

「そっか。じゃ、その時は来る前に連絡くれるか？」

「はい。それから・・・あなたのお兄様に何か言われたら、

家に関しては問題ないって言うておいてくれる？」

「ああ、わかった。実は兄貴に呼ばてるので今から行つて来る」

「そっなんだ」

「カンナのことテレビに出てるのでびっくりしてたぞ」

「スキヤンダルだからなあ。今度会うときどんな顔して会えばいいのか・・・」

「普通で良いのと違うか？」

「あははは、そのまんまかしようがないけどね」

「そうそう、陽菜ちゃんはどうしてる？」

「高校へ通ってる」

「それはおめでとう」

「あいつ、いろんな写真が出てお前だとわかって、泣いてた」

「え？泣いたの？」

「うん、妖精さん可哀想って・・・」

「何、それ？」

「いや、家ではカンナの名前を出さないことにしたんだよ。

あいつはそう言うことはちゃんとわかってるんだけど、

俺と話すときはカンナのこと妖精さんって言っただ」

「なんだかね・・・。妖精って、もっと子供みたいに若い子でないとイメージじゃないような・・・」

「まあ、何でもいいじゃないか。あいつは熱烈なファン1号として頑張ってるからさ」

カンナが黙りこんでしまったので、「そうそう、神戸にさ、新しい店がまた出来たんだよ」と琢磨は話を変えた。

「へえ、どんなお店？」

「ステーキなんだけど、結構美味いんだ」

「もう行ったの？」

「ああ、基礎をうちでやったビルだったから、気になって行ってみた」

「そっか」

「今度連れて行ってやるよ」

「あ、ありがとう」

「肉食いたくなったら帰って来いよ」と言っただけで、琢磨は笑っている。

「うん、そうするわ。いつか連れてって」

いつかと言う言い方は、琢磨は気に入らなかった。

「いつか、かあ。それって一生行かないって聞こえるなあ」

「あはは、そういうわけじゃないんだけど。ほとぼりが冷めないとね」

「そんなものか？」

「うん。そんなものよ。今行くと餌食にされるから、スキャンダルのね」

「じゃ、そろそろ切るわ」琢磨が黙ってしまったので、カンナがそう言つと、

「あ、俺も行かないと、兄貴は時間厳守だからな」

「そう、よろしくお伝えしてね。電話くれてありがとう」

「ああ、またな」

「うん、またね」と長い電話を終わった。

琢磨は用もないのに心配して電話をくれたのだろう。

そういう友達甲斐のある人だとカンナは思った。

琢磨兄弟がどんな話をするのか、想像できるので苦笑するしかない。

とりあえずは現実逃避で夕食でも作ってみようと、カンナはキッチンに下りていった。

管理人夫婦はまだキッチンに居た。
ちやうど帰ろうとしているところだ、

「明日は朝10時頃に来ていただいけませんか？」とカンナが頼むと、
「わかりました」と二つ返事で承諾してくれる。
気の良い人たちだ。

「簡単に部屋の掃除とお昼ご飯をお願いしたいのです」
「お客様ですね。頑張ります。何人分でしょうか？」
「今のところ、3人かな」

「わかりました。もちろんです。今回はいつもより長く滞在していただけるので、私たちも嬉しいですよ」

「ここは空気が良くてのんびりできて、来てよかった」
カンナがそう言うと、二人とも何も言わずに嬉しそうにしていた。

管理人が帰った後、夕食の準備だけは済ませておいて、カンナはPCを立ち上げた。

この別荘の家具や備品リストを呼び出すと、一つ一つ確認していった。

少し考えてから、そろそろ空港に到着するはずの田所にメッセージを送る。

『別荘の隣の所有者、楊氏の情報が必要になりました』
手の空いた時に彼の部下に情報を集める指示を出してくれるだろう。

キーボードから指を離して、手を組み膝に置く。
ゆったりと椅子に凭れて少しの間目を閉じた。
よく考えなくてはならない。

しばらくの間、楊とその友人に話すべきことを考えていたところに、携帯の着信音が鳴った。

画面を見ると田所からだ。

「はい」とカナナが電話に出ると、「今、レンタカーを借りました」とやはり田所からだった。

「道はわかります？」

「調べてきました」

「では、運転お気をつけて。お待ちしております」

「はい。後ほど」

と事務的な会話で電話を終えた。

カナナは頭を切り替えようと、バスタブにお湯を溜めゆっくりとお風呂に入った。

髪を乾かして、手早く化粧をする。

カジュアルなワインピースに着替え、リビングに続く書斎に入ると、屋外のセキュリティカメラを点検した。

門灯は点いている。外は何も不審なところはなさそうだ。

室内のライトを調節し、クラシック音楽をかける。

ワインクーラーから赤ワインを1本取り出して開封すると、食事の準備に入った。

ダイニングテーブルにお皿を並べていると、携帯電話が鳴った。

田所がゲート前に到着したらしい。

この別荘地は、入り口にゲートがあって一般の人は入れない。各別荘には開門用のインターコムがついていて、ボタンを押すとゲ

ートが開くようになっていた。

カンナもそのボタンを操作して田所のために門を開けた。

家のセキュリティカメラを見てみると、車がカンナの家門に到着する。

カンナはもう一度操作をして家の門を開けた。

外に出迎えることはしない。

ほどなくして田所が玄関のチャイムを鳴らした。

カンナは電子ロックを開錠してから玄関に向かった。

きつちりとスーツを着込んだ田所が玄関の扉を開けて入ってくる。

後ろ手に扉を閉めて、「鍵は？」と田所が聞いた。

「オートロックよ」とカンナは言うから、「遠いところよおこそ」と田所を歓迎した。

「お元気そうですね。顔色も良い」

「おかげさまで」

そう言う二人はようやく笑顔になった。

「今日は急に悪かったわね。こんな遠くまで」

「慣れるよ、急はことは。それにお昼頃メールで、十中八九は来ることになると思ったから」

「お食事は？」

「まだ。どこにも寄らずに来たから」

「じゃ、食事しながら話しましょう」

と言って、ダイニングに案内した。

カンナはクライアントでもあるが、同時に二人は友人でもあった。

誰も居ないときはタメ口にもなる。

田所に洗面所を教え、カンナはすぐに食べられるように夕食をテーブルに運ぶ。

暖かなご飯とお味噌汁をテーブルに運び終えたときに田所が戻ってきた。

「もしかして・・・」とカンナの背後から声が聞こえた。

「え？」

「あなたが作つたの？」

カンナ頷くと、田所はめずらしく驚いた表情を隠そうとしなかった。

「初めての手料理だ」

「私だつて、お米くらい炊けるわよ」

「仕事の話は後だ！猛烈に腹が減ってる」

カンナは可笑しくなってしまった。

田所とは打ち解けた話もするけれど、腹が減ったという言葉遣いは始めて聞いた。

「お代わりもあるからたとと召し上がれ！」

そう言つて席につかせると、田所はほんとうに凄い勢いで食べ始めた。

カンナには魚の名前がわからなかったが、白身で脂が多そうだったので醤油と梅干で煮たもの、牛肉のたたき、帆立貝のフライ、焼きアスパラガス、春野菜の白和えなどである。

煮魚は一切れでは足りそうになかったので、もう一切れ勧めると、嬉しそうに「いただきます」と言つて、それもペロリと食べてしまった。

「3日くらい食べてない高校生みたいじゃない？」とカンナが笑いながら言うと、

「実際、今日は昼抜きだったんだよ」

心当りのあるカンナは申し訳なく思った。

「ごめんなさい。私のせいでしょう？」

「ここに到着するまでは、特急料金3倍ふっかけようと思ってたけど、

このご飯食べたらず請求できなくなった」と田所は笑った。

「あなたの手料理が食べられるだなんて・・・」田所は目を細めてカンナを見つめた。

「この騒動も悪くないな」と呟く。

「久しぶりに作ったからまだ勘がもどってないけどね」

カンナは居心地が悪くなって、お茶を淹れようと立ち上がった。

熱いお茶をテーブルに置き、「そろそろ、楊さんがやきもきしてるはずよ」とカンナは田所を促した。
どんなことがあっても、仕事を優先する。それは二人で決めたことだった。

先方の提示した金額を言うと、田所は「へえ」と驚いていた。

「で、売るんだね？」

「ええ、だから来てもらったんだけど」

「単に最終確認だよ」と田所が笑った。

家具も一緒に売ること。不動産の価格とは別にそれを提示すること。そして最後に、この家に張り巡らせたセキュリティをどうするのか。

先方が買わないなら全部取り外すことにし、買うなら購入後のサ―ビス契約の話をしなければいけなかった。

そして、カンナは「楊さんと言う人の情報を確認してから決めるけど、場合によっては楊さんにセキュリティ会社の話をしようと思う」と田所に告げた。

田所は一呼吸置いてから、「わかりました。次のステップですね」

「ええ、クライアントになるかどうかは不明だけど、種を蒔いておいてもいいかなと思ってる。でもそれは明日、情報が集まった後、アドリブで決めます」

「じゃ、それはあなたにお任せしましょう」

「とりあえず、この家のことは明日話すと思うけど、こっちがいい？お隣に行くほうが好い？」

「それは楊さんに決めさせてください。できれば楊さんの別荘に行くほうが好ましいですが」

「わかりました」

「明日の朝は、私と明日到着する者で物件の話をします。午前11時過ぎにアポをとってください」

「了解！」

そう言つて、カンナは携帯を手にした。

口到人差し指を当てて、田所に静かにするように示して、陽に電話を掛けた。

楊はご機嫌だった。隣の別荘では友達が集まって酒盛りをしているらしい。

明日のお昼前は都合がよいと言ったが、もしかしたら二日酔いで起きてないかもしれないから、時間をずらせてもらうかもしれないと言っていた。

カナナは楊の連絡先を控えるようにと楊にもらった名刺を見せると、「凄いな、あなたにプライベートな電話番号を教えるだなんて」と言った。

「楊さんのこと知ってるの？」

「貿易王だというのは聞いています。もし隣の楊氏その人でしたらね」

「そうなんだ」

「メインは製造業です。それを海外輸出することから始まって、相互に輸出入、そして運搬業にも手を広げました」

「そうなんだ」

「それに伴って最近では為替にもかなり進出しています」

「輸出入だったら自然に為替相場にも聡くなるわね」

カナナは食器をシンクに運び始めた。

田所は少し笑って、「そこがあなたの凄いところだ」と言った。

「え？」

「少しの情報で連想してしまう」

田所も立ち上がって、湯飲みをシンクに持ってきた。

「でも、人の想いには鈍いところがある」

水を出していたので、カナナにはよく聞き取れなかった。

「何て言ったの？」

「いや、聞こえなくていいよ」と田所は笑ってごまかした。

「ワインを開けておいたわ。今日はここに泊まるでしょ？」

「うん。そう思ってたホテルは取ってない」

「まず、一口飲んだら荷物を部屋に持っていきましょう。」

「時間ほど前に開けたから飲み頃だと思うわよ？」

カンナがワインボトルを手にとると、それを見た田所が「そんな良いワイン、いいのかい？」と言った。

「どうせいつかは飲むんだもの。今日でしょ？」と言うと、

「その通りだ」と言って、カンナからボトルを取り上げた。

カンナがグラスを出すと田所がワインを注ぎ、「お毒見を！」と言った。カンナを笑わせた。

グラスを光にかざして色を見、次に香りを確かめてから口に含む。

そんな田所の所作が育ちの良さを醸し出していた。

書斎を好きに使ってと案内してから、田所を客室に連れてきた。

客用にと用意しているスエットの上下を出して、浴室の使い方を説明すると、

「15分で行くよ」と田所は言って上着を脱ぎ始めた。

「じゃ、下に居るわ」と言ってカンナはキッチンに戻り、簡単にシンクを片付けた。

ワインクーラーに少し氷を入れ、赤ワインを冷やしておく。

リビングの暖炉には火が入っているのだ。

飲み始めるのがもう少し後になるなら、温かいより少し冷たくしたほうが好みだった。

生野菜のスティックとチーズをトレイに乗せてワインの側に置いた。

後、

書斎に行ってセキュリティーカメラをチェックする。
何事もないようだ。

リビング戻り、音楽をどのCDにしようか選んでいると、ほんとうに15分で田所は下りて来た。

シャワーを浴びた田所の髪はまだ乾いていなかった。
すぐに乾くといって、ワインをグラスに注ぎ、カンナに渡してくれる。

整えてない髪を手で梳く仕草は、普段より田所を若く見せていた。

「GPSはオフにした？」

「ああ、事務所を出るときに止めたよ」

「流石ね！」

「気休めかもしれないが、まあつけてるよりはマシかなと思って・
」

「完璧には無理よ」

「あなたの会社の仕事もするようになって、それでも知識は増えたからね」

「何事も完全というのは無いとわかればいいのよ」

「そのとおりだ」

二人は黙ってワインをもう一口飲んだ。

「東京のことが気になるかい？」

「ある意味ではね。タイミングを間違えないようにしないとイケないから」

「うん。個人的な感情はどう？」

「不思議とあまり気にならないわ」

「元旦那やそれをネコババした女が憎いのかと思ってた」

「あら、憎んでるって思わせたことはあったかな？」

「いや、無かったから気になるんだよ」

「心の隅でせいせいしてたことは知ってるくせに」

そついうと田所は少し笑った。

「今回は火の粉を払うだけよ。

大人しく私のことなんか忘れてくれれば、日本全国に知られなくて済んだのに・・・」

「ヨーロッパも面白く話題にとりあげてるよ」

「そつなの？」

「だって、君たち夫婦はヨーロッパも長かったじゃないか」

「確かに・・・」

ヨーロッパへの進出も華々しかったからなあとカンナは当時のことを思い出していた。

週末はずっとパーティーで、他の日は同じような企業の奥様方と華やかなランチの日々。

ヨット遊びもお酒も覚えた。

「・・・カンナ」

田所が呼んでいた。

「こつち、戻つて来い」

笑つと童顔に見える顔がグラスの向こうで微笑んでいた。

「今夜は名前呼ぶよ？ここは安全だろ？」

カンナはこくりと頷いた。

セキュリティチェックはしてある。

外からも見えないようにガラスには特殊な細工を施してあった。

田所はもう一杯、ワインをグラスに注いだ。

「そうそう、先日、お見合いしたらしいね」とカンナが言った。
「どうして知ってるの？」と田所は慌てている。
「ふふふ、事務所にお邪魔したときにちらっとね」
「あちゃ・・・情報漏えいだな・・・」

「で？どうだったの？」

「可愛いお嬢さんだったよ」

「ほお、いいじゃない」

「可愛い過ぎるよ。まだ20歳だって」

「うわ~~~~、それって、20歳の年の差じゃん」

「困ったよ、話題なんかないしさ」

「犯罪かも・・・」

「いや、笑い事じゃないって」

真面目に焦っている田所を見るのは楽しかった。

「でも、そろそろ焦ったほうがよいお年頃だよ？」

「ん〜、ピンと来る女性が居ないんだよね」田所はため息をついている。

「まあそのうちきつとぴったりの人が現れるよ」とカンナが慰めると、

「優しいお言葉、アリガトウ」と田所は言って笑っている。

「いいなあ、いつでも自然体で」とカンナは心底そう思ってた。

「あなたは肩張りすぎだよ？」

「そう？」

「うん、僕からはそう見える」

「ふんっ、年下のクセに生意気ね」

「そんなの関係ないよ？」

「だってさ、私なんかほんと気持ちをしっかり持っていないと何もできななんだよ？」

「あなたは自分がわかってないよ」

「そう？わかってるから人に頼ってるんじゃない？」

「いや、違う。自分の魅力がわかってない」

「ううう〜」

「ほら、もっと飲んで」

田所はワインをそれぞれのグラスに注ぐと、もうボトルは空っぽになった。

「ウイスキーはある？」と聞くので、

「どんな銘柄でもよければ少しあつたはず」

「じゃ、これ飲み干したらウイスキーにするか？」

「そだね」

田所は凄くお酒が強い。

泥酔したのを見たことがなかった。ザルなのかもしれない。

カンナはというと、まあ普通には飲めるが赤くなる体質なので外ではあまり飲まない。

今夜は久しぶりのアルコールだった。

田所は学生時代に飲んだ安物のウイスキーの話をいくつかカンナに聞かせて笑わせた。

くだらないバカ話が今のカンナには心地よかった。

ワインも全部飲み干したので、カンナは田所と一緒にウイスキーを探して氷とグラスを用意した。

ウイスキーのボトルをカンナに持たせ、田所はアイスペールとグラスを持って、

「そろそろ新しい情報が届いているはずだ。メールチェックするから、一緒に読もう」と言って、客室に足を向けた。

客室は広めに作っており、仕事ができるようにデスクと、それとは別にソファークッションも置いてある。

田所がデスクにノートブックPCを取り出して立ち上げている間に、カナナはソファークッションに座ってプラスに氷を入れた。

「水割り？ ロック？」

「そうだな。今夜はロックにするかな」

じゃ、私もどちらにもウイスキーを注いで一つを田所に手渡した。

何通かメールが届いていたが、その中で楊氏に関する中間報告とタートルがあったので、田所の肩越しに一緒に読んだ。

「明日、本人に会うまでには追加情報が届くはずだから、これは保留だな」と言って、次のメールを開く。

「ミネラルウォーター取ってくれる？」と田所が言うので、部屋にある小さな冷蔵庫からボトルに入ったものを持っていくと、「ありがとう」と言って受取った。

田所はどんなことにもありがとうを忘れない。

別れた夫はあまりありがとうとは言ってくれなかったなと思いつく。

最初からに感謝の気持ちの薄い人だった。

思えば、一番最初はカナナが遊び心で始めたことだったのだ。

まだ今ほどインターネットが普及していなくて、手探りの状態だった。

たまたま英語が少し読めたので、まだ日本にはないプログラムやサイトを次々に調べて情報を得、小さなコミュニティサイトを立ち上げた。

その時に元旦那と知り合った。

その後しばらくして、カンナのけなしの貯金を資本にして小さな会社を興し、今に至るってところなんだよ、とカンナはアルコールでぼんやりした頭で思い出に浸っていたようだ。

「眠い？」そう田所が聞いた。

「ん？ちよつと昔のことを思い出してた」

「そつか。大丈夫か？」

「うん。それよりも大事なメールはあった？」

「いや、取り立てて緊急会議をするほどのものは何も・・・」

「じゃ、平和な一日の終りね」

「そうだな」

田所はノートブックPCを閉じようとしていた。

「音楽変えようか？」

返事を聞かずにカンナはCDを入れ替えた。

こんな夜はバラードだろう。

低く掠れた男性ボーカルが部屋の空気を振るわせた。

田所がウイスキーを一口飲んだ。

ごくりと上下する喉をカンナが見ていると、それに気づいた田所が口を開いた。

「こつちに」と田所に呼ばれてカンナが近づくと、デスクに置いてあったノートブックを端にずらせて、カンナの手を取った。

もう一方の手を腰に添えるとあつという間にカンナをデスクに座らせてしまった。

「飲んで」とカンナにウイスキーを勧めるので、カンナは手に持っていたグラスから一口飲んだ。

田所は椅子の背にかけてあつたネクタイを手に取り、「僕がなにを考えているかわかる？」と聞いた。

カンナは首を横に振った。

「ほんとうに？」もう一度田所が聞くので、今度も首を振ると、「どっち？」と聞いた。

「わかる」とカンナが言うと、田所は嬉しそうに、「いいかな？」と聞いた。

カンナはゆつくりと田所の目を見て頷いた。

ネクタイでカンナの目を覆って後ろで結ぶ。

「電気は消さないよ」と言う田所の声がかんなの耳をかすめた。

カンナは嫌々と言うようにふるふると首を横に振る。

「だめだ」と田所が言った。

「今夜は何も考えないで」と言いながら、ワンピースのフロントボタンをゆつくりはずしていく。

途中まではずしておいて、今度はカンナの足首を持って踵をデスクに持ち上げた。

「この体制、動かないようにね。今夜は全部見るから・・・」

どんな状態になっているのか考えると恥ずかしさが湧き上がってくる。

「見えないのに、何をそんなに赤くなってるの？」田所はいじわるくそうカンナに囁いた。

「お酒を飲めばいい。少しは恥ずかしさも薄らぐだろうから」そう言つて、カンナの顎を持ち上げ口移しでウイスキーがカンナの口に注がれた。

数ヶ月前、カンナの離婚が成立した日の夜、お祝いだと言つて田所と食事に行った。

その後で、今夜はつらいだろうからそれを乗り越えるにはセックスが一番！

気にすることは無い。僕を利用すればいいんだと、田所はカンナを抱いた。

確かに田所とのセックスはしてよかったと思う。

田所の肌は手触りがよく、触れ合うのが嫌ではなかった。

しかもなかなかのテクニシャンでカンナを楽しませてくれた。

カンナは自分が魅力の無い女だとは思わずに済んだし、その後何日かは肌の張りが良いなと感じたくらいだ。

しかし、後にも先にも個人的に二人で食事をしたり一夜を過ごすのはその時以来だ。

離婚前の相談や打ち合わせも、その後も、たいていは田所の事務所だったり、カンナの会社で絶えずスタッフが居た。

二人きりになる状況はあえて作っていない。

デートするわけでもないから恋人の関係とはいえないだろう。今流行のセフレという関係に近いのかもしれない。

そうは思ったものの、単にセックスだけが二人の間に存在しているというわけではないので、
実に奇妙な関係だった。

「余裕だね。何考えてる？」

前回のことを思い出してたとはとうてい言えなかった。

「前回のことは覚えているかい？それとももう忘れた？」

田所は冷たい指でカンナの首をなぞった。

首から徐々に指は下りて、みぞおちを過ぎ、おへそを過ぎ、わき腹を通って背中をゆっくりと上がってくる。

「前回なんて序の口だよ。今夜はそれ以上の夜にするから・・・」
そついうとカンナの口を塞いで舌を差し込んできた。

学生時代ヨット部だったと言う田所は、スーツ姿で見るよりも実際は筋肉がついていた。

特に腕と背中はずやつやとしてさわり心地がよく、40歳になった今でさえこの状態なら、現役の20歳前後のときはいかばかりかと思ってしまう。

ベッドの上で戯れている間、カンナと田所は名前で呼び合い、お互いを同等として扱う事ができた。

どちらがクライアントでもなく、年齢も関係なかった。それがカンナにとっては新鮮で嬉しいものだった。

しかし同時に、今この時だけの関係にしておかなければならないのは二人ともよくわかっている。

短い時間の間に自分を解放するのは容易ではなかったが、二人はまるで競争するかのように高め、ぶつかり合い、求め合った。

やがて終わりが来ると、寄り添って少し眠った。

カンナが1度目覚めたのはまだ暗い時間で、軋む体をようやくベッドから引き離して自分の部屋に戻ると、シーツがやけに冷たく感じた。

体を横にして丸め目を閉じると、あっと言う間に深い眠りに入ってしまった。

次に目を覚ますと背中に熱い塊があり、身じろぎをするとその塊の

たくましい腕がカンナを引き寄せた。

自分の部屋に戻って一人でベッドにもぐりこんだはずなのに・・・と、カンナは思ったが、また眠ったらしい。

次に目が覚めると外はすっかり明るくなっていた。

背中で田所が身じろぎをした。

「酷い人だなあ、一人で眠ろうとするなんて・・・」

カンナの肩に顎を乗せている田所が呟いた。

「だって、後で掃除の人が来るからこのベッドに眠った形跡がないと思うと思う？」

カンナがそう言うのと、

「確かにそれはマズイ」と田所も頷いた。

カンナは身体の向きを変えて田所の顔を見た。

髪は少し乱れてボサボサになっている。

いつもはキレイに整えているので、洗いざらして眠った形跡のある有様は田所の印象を若く変えている。

手を伸ばして田所の髪に指を入れると柔らかな癖毛を何度かなでた。

田所はカンナを見つめながら指を掴み、その指先にキスをした。

「おはよう」

「おはよう」

「今朝のあなたは輝いている」

田所がまぶしそうにカンナを見た。

「ありがとう。あなたのおかげかも・・・？」

「なんで疑問系？」

そう言って二人でくすくす笑った。

笑いが収まると、「腹が減った」と田所が言った。

「夕べ、運動しすぎたなあ」と言う。

「じゃ、シャワー浴びたらダイニングに集合しましょう」カンナはそう言っただけでベッドから出ようとする、田所がカンナの肩をつかんでいきなりキスをした。

思いがけず深いキスになったが、カンナがうつとりし始めると田所はカンナを掴んでいた手を離し、「これ以上は危険だな」と言って笑った。

「これ以上は朝ごはんの時間がなくなってしまう」と言ってカンナにベッドを降りるように促してから、バスローブの前が肌蹴たままで客室に歩いて行ってしまった。

カンナは苦笑しながらバスルームに移動し、たつぷりのお湯に浸かって念入りに身体を温めた。

カンナが朝食の準備をしていると、田所がキッチンに入ってきた。髪を整えてはいるがいつもの眼鏡は掛けていない。

シャツのボタンは全部留まってないが、ほぼ仕事用のスタイルになっていた。

「コーヒーあるかな？」と言うので、カンナは水の入ったグラスを手渡して、

「まずお水を一杯飲んでね。コーヒーはすぐに出来るわ」と言った。飲み干した水のグラスを受け取って、コーヒーマグを代わりに差し出す。

田所はマグを受け取って窓辺に近づいた。

コーヒーをゆっくり飲みながらリビングからの景色を楽しんでいたが、やがてダイニングに戻ってきて、カンナが準備しているお皿を受け取って並べ始めた。

ヨーグルトのかかったフルーツボール、小さなサラダ、ゆで卵、グラスに入った牛乳。

着席して一口コーヒーを啜ると、目の前に湯気が出て熱々のフレンチトーストが田所の前にトンと置かれた。

カンナが着席するのを待って、田所はナイフとフォークを手にとった。

一口食べて少し目を細める。

「あなたがこんなに料理ができるとは知らなかった」

カンナは何も言わずに「ふふふ」と笑って静かに朝食を続けた。

あつという間に厚切りのフレンチトーストを食べてしまってもう少し食べたいという田所に、カンナはもう一度フレンチトーストを焼きながら田所の様子を見てみると、

サラダやフルーツボールも凄い勢いで食べていた。

カンナは冷蔵庫からハムを出して厚めに切り、フライパンをもう一個取り出してハムを焼いた。

カンナがダイニングテーブルに戻り、田所の前にフレンチトーストとハムの皿を差し出すと彼は嬉々としてそれを受け取り自分の前に置いた。

そして今度はカンナの食べるスピードに合わせてゆっくりと食べた。

「久しぶりに朝ごはんが美味しいと思った」

田所は満足そうにコーヒーを飲んでいる。

「いつもはコーヒーだけ？」

「そうでもないよ。コーヒーとトーストとかドーナツが多いかな。でも美味しいと思って食べるわけじゃ 아니라」

「私も久しぶりにしつかり食べたわ」

「一人じゃつまらんよ、食事は」

「甘いものが大丈夫とは知らなかったわ」

「そう？結構好きだよ。特に朝は甘いデニッシュとかコーヒーとか・
・・」

「お米は食べないの？」

「それがさ、学生時代はスポーツしてたから、朝食はしつかり食べてた。」

今は一人暮らしだからなあ。料理しないし」

「ああ、そっか。実家だとお手伝いさんが朝から豪華定食作ってくれてそうね」

「今でも、ちゃんと定食食べたいときは実家に帰ってる」
そう言つて田所は笑つた。

裕福な田所の実家では人手がたくさんあるはずなのに、今は職場に近いマンションで一人暮らしをしている。

家に仕事を持ち帰ることもあるので、業者を雇うわけにはいかず、部屋の掃除は時々実家のスタッフに頼んでいる。

カンナはそういう話を田所から初めて聞いて酷く新鮮な気がした。

食器はあとで来る管理人が洗うからとカンナが言つと、田所はカンナを座らせて置いて自分で食器をシンクまで運んでくれた。

コーヒーのお代わりをカンナのカップにも注ぐと、ゆったりと椅子

に座りなおしてカンナを正面から見た。

「あまり二人つきりで話す時間が少ないから、今ちよつと聞いていいかい？」

「なあに？」

「ここがこんなに居心地の良い別荘だとは思わなかった」

「私もよ」

とカンナはそう言つて笑つた。

「ここだけじゃなく他の場所もそうなんだけど、ブームになるから達哉たつやが買つて駄々捏ねたから買ったものなの」

小さな資本で始めた会社が、時期もよかつたこともあつて上場できたのだ。

その時手にしたお金で二人はいろんなものを買つていた。

IT企業という言葉が一般に浸透するのと正比例するように存在が認められることとなつた会社は、

投資家の気持ちを攪る材料がたくさんあり、思うよりもはるかに高価格で初値がついた。

信じられないような単位のお金を創業者であるカンナと達哉夫妻は手にしたのだ。

上場した会社はすでにカンナは一株主になつてしまつたが、関連会社がいくつかある。

別事業の会社もあつた。

離婚後もカンナが筆頭株主になりこれから上場を予定しているものもあつた。

田所はカンナの所有する会社や不動産の全てのリストを持っている。
「秋吉設計建築事務所から問い合わせがあつたよ」

「お手数かけました」

「田舎に何か建てるの？」

「ええ。そのつもり……」

「別荘を建てる気？」

「ん……」

「僕はあなたの顧問弁護士だけど、友人としても聞いていいかい？」

「もちろんよ。あなたは数少ない友人の一人だわ」

「光栄なことだな」と田所はカンナ見て言った。

田所が無言で促すので、「住む家を作ろうと思って」とカンナは言った。

「東京から引越すってこと？」

「うん。そうなると思う」

田所はじつとカンナを見た後、椅子の背もたれに背中を預けて額に手を当てて考え込んでしまった。

しばらくしてようやく田所が口を開いた。

「もしかして、今あるものを処分しようとしている？」

「まあ、そういうことね。とりあえず達哉と関わっていたものは少しずつ売るつもりよ」

「すぐにじゃないだろう？」

「もちろん売り急いではないし、時期を見て良い条件になったらチャンスは逃さずにつてこと」

「何時になるの？」

「今すぐに建築がスタートしても1年じゃ無理。まあ2年はみておかないと。」

その前に設計に時間も必要だから2〜3年はかかるんじゃないかな」
「2〜3年かあ」

「お願いだからオフレコしてくれる？」

「ああ、それはもちろんだけど……。で、どの程度の売却になりそう？」

「東京の家以外の不動産、そして株……。かな。海外はパリのフラットは残してあとは全部になるかな」

「もしかして……」

田所は解ってしまった。

「引退するつもりなの」

カンナがさらっと言っただけ。

「やっぱりそうなんだね」

田所はそう言っただけで黙ってしまった。

「まだ2、3年あるから、その間に片がつくように僕も努力させてもらうよ」

と田所は静かに言った。

「ありがとう。頼りにしてますね」カンナは田所から目を離さずに言った。

田所は客室の荷物を書斎に持って下りてPCで仕事を始めた。

カンナは自室と客室の乱れ具合を確かめに行き、あとで管理人が来ても恥ずかしくない程度に片付けると、着替えてリビングでお茶を淹れていた。

そこに田所がカンナを呼びに来た。

楊の情報がメールで届いたから読むようにと書斎に促す。

カンナはお茶のカップを持って、書斎に移動した。

ほどなく中国語のわかる弁護士も到着し軽く打ち合わせをすると、田所は楊のところに電話を掛けてから出掛けていった。後に残ったカンナは軽くストレッチをしながら、頭の中で楊にどうやって話をするか考えていた。これから始まるのだ。今朝のこの静寂は嵐の前の静けさだとカンナは思った。

2 - 1 8 (後書き)

* 達哉^{たつや}というのはカンナ^{かんな}の別れた夫です。

ちょうど正午になる頃、田所たちが帰ってきた。

カンナは二人を書斎に案内した。

午後に買い手と楊が仮契約と家具の確認にやってくるようになったらしい。

たった1日で売買が決まったので、カンナは内心驚いていた。こういうこともあるのだ。

契約書は日本語で作る。今回はサービスとして中国語で翻訳したものも作成すると提案すると、買い手はすごく喜んでいたと田所は語った。

仮契約でもあるし、予め標準のテンプレートがあるので30分ほどで作成できるというので、

中国語のできる弁護士に書斎のデスクを使わせて、カンナはキッチンに居る管理人に昼食は30分後だと伝えに行った。

カンナが書斎に戻ると、田所が楊の別荘での報告をカンナにした。

午後2時に買い手と楊が来るので、もう一度家と家具を見せる手順を打ち合わせていると、

仮契約書も出来たようでプリンターが動き出した。

2部の仮契約書を仕上げてから、3人はダイニングに移動して昼食を摂った。

北海道尽くしの昼食を二人の弁護士はやたら感心して平らげて、食後のお茶をリビングで飲むことになった。

楊たちが来るまでもうあまり時間がない。

カンナは管理人夫婦をリビングに呼んで、この別荘を売ることになつたと告げた。

管理人夫婦は驚いて、次には不安そうにしたが、次のオーナーに紹介することや

気に入らなければいつでも次の職場の世話をすることを約束すると、ほつとしたような顔になった。

「今から新しいオーナーが来るから、弁護士さんに同席してもらつて面接したらどうかしら？」

とカンナが言うと、田所が頷いた。

「それは助かります。でも中国語はわからないので大丈夫でしょうか？」と管理人夫婦は再び不安そうになった。

「採用されたら、予め仕事の内容を箇条書きにでもしておくとか、工夫できることはあると思うわよ。」

いざと言う時はお隣のオーナーが日本語ができるので手伝ってくれると思うし。

あとで頼んでみましょう」

「はい。よろしく願います」

「それからどうしても出来ないと思ったら、いつでも連絡くださいね。」

会社の保養所もありますので、そちらの管理に転勤とかも考えますから」とカンナは付け足した。

「はい」と言つたものの管理人夫婦にはもう少し考える時間が必要だろう。

あとで呼ぶからと、キッチンの片付けに戻ってもらつた。

午後2時少し前に、買い手と楊が訪ねてきた。

二人とも機嫌が良く、ニコニコしている。

リビングで家具のリストを見ながら田所が説明している間に、カンナはインターネットで口座に手付金が振り込まれたのを確認した。その後で家具や備品を確認し、仮契約書に署名して一段落すると、カンナは予定通りこの別荘のセキュリティシステムの説明に入った。

セキュリティシステムこそがカンナの自社製品であり、オリジナルの器材に加えて独自の監視サービスが他社と比べても類を見ないほど洗練されていて質が高かった。

リビングから書斎に移動し、モニターを作動させてこの別荘の周りを映して説明する。

次に見取り図を立ち上げて書斎の位置に丸く赤いランプが2つ点いているのを新オーナーと楊に確認させた。

二人は携帯電話を持っている。GPSが作動しているので赤いランプが点くのだ。

新しいオーナーと楊は他にもいろんな機能があるのというカンナの説明を聞き入っていたが、価格もかなりするのですぐには返事できないと言った。

「はい、わかりました。ただし、取り外しに数日必要なので、本契約の書類が出来たときにはお返事を頂きたい」とカンナは言った。

「このまま継続して使われるなら、取り付け工事は不要になりますし、器材は中古になりますから価格もぐっと抑えられます」と言うのを忘れなかった。

「管理人が使い方を知っていますので・・・」と言って、管理人夫婦の紹介をする。

中国語のできる弁護士に付き添ってもらって、ダイニングで新オーナーに管理人夫婦の面接をしてもらうことになった。

その間にカンナは楊と話をしてみようと思った。

「カンナ、貴女が一人でここに滞在できる理由がわかりましたよ」と楊が口を開いた。

カンナは何も言わずに少し微笑んでおくことにした。

「窓ガラスは外からは中が見えない素材、家中に張り巡らされた監視システム。

遮音に加えて、盗聴不可。誰もこっそり近づくこともできない」楊は大げさにため息をついた。

「世の中には、そのため息ですら誰かに録音され換金される時代ですよ」とカンナは楊に言った。

楊はしばらくカンナを見つめていたが、やがて「そういうことですか」と声を落として言った。

「クライアントは？」

「個人は少ないほうで、企業や政府関係がメインです」

「中国には進出していますか？」

「進出していたら楊さんが知っているはずでしょ？」

「中国はマーケットとして魅力ないですか？」と楊が聞くので、カンナは正直に答えた。

「中国ははつきり言って大きすぎます」

「ほう」

「このセキュリティシステムが何故安全かわかりますか？」

「わかるように説明してくれますか？」

「ええ。今設置している国で成功しているのは、サーバーが安全だからです。」

システムを維持するというのはそういうことです。

今、日本やヨーロッパで成功しているからといって、中国に私のような日本人が進出して安全が保障されるでしょうか？」

「うむ。中国は・・・中国人は日本人でもヨーロッパ人でもありませんからな」

「私は、中国のマーケットを制覇するのは中国人が良いのでは思っています」

「うむ」楊は考え始めていた。

「私にはとうてい中国に乗り込む勇氣も自信もないですよ」
カンナはようやく笑った。

「今、私は今の会社をもう少し堅牢なものにしようと思っています。その後で楊さんにご相談することがあるかもしれません。

中国マーケットのことで・・・」

そう一気に言うと、楊が改めてカンナの顔をまじまじと見つめた。

「はやくゴタゴタが解決すると良いですね」と楊が言った。

「ご存知でしたか」とカンナが苦笑する。

「毎日日本のテレビを観てますから。達哉が毎日出てますね」

「お恥ずかしい話です」

「何もカンナが恥ずかしがることはない。達哉の問題でしょう。

あなたはもう関係ない話ですよ」と楊は言ってくれた。

「はやく落ち着いてくれると良いのですが・・・」とカンナが言う
と、

「私は貴女から相談される日を楽しみに待ってますよ」と楊が呟いてカンナに頷いた。

ダイニングで管理人夫婦を面接していた新オーナーが楊を呼んだ。どうやらしばらくの間管理人夫婦を雇用してみるらしい。

楊がダイニングに行ってしまうと、カンナはリビングの窓に近づいて庭を見る振りをした。

そろそろこの別荘から移動しなくてはならない。

私物の発送など明日からのことをカンナは考えていた。

やがて新オーナーと楊は引き上げて行き、その後軽く打ち合わせをして田所たち二人の弁護士もそれぞれ運転してきたレンタカーで出発した。

2日後に東京で会う予定だ。

長い一日だった。カンナは疲れを感じた。

熱い風呂に入って、その日は久しぶりに熟睡したようだ。気がついたら朝になっていた。

軽くストレッチで身体をほぐしてから、動き易い服装で身の回りのものを片付ける。

手荷物だけ作ってしまったえば、あとは管理人に頼んで荷造りしてもらうことになっている。

朝食のフルーツとお茶を済ませるともうお昼前だった。

カンナはワインを一本選んで、隣の楊家まで歩いて行った。

楊たちは今日のお昼頃出発すると聞いている。

「まだ仮契約なのですが、しばらくはお会いできないので・・・」と、

お礼と称してワインを差し出したカンナに、楊は少し驚きながらも

歓迎してくれた。

「カンナに良い話があります。セキュリティをそのまま使いたいらしいですよ、彼は」

と、カンナの別荘を買うことになっている人のほうを見ながら楊は言った。

「取り外すには惜しいのでそれはよかったです。きつとお役に立ちますよ」とカンナは笑って言った。

「カンナ、僕の電話番号なくさないでね」と楊は声を抑えてカンナに言う。

「時期が来たら連絡させていただきますね」とカンナも応えた。

お互いに「元気で」と挨拶をしてカンナは楊の別荘を辞した。

午後は管理人と打ち合わせをして、明日はここを出る。

次の展開が待っている東京か、あるいは東京に近いところに居たほうが良いかもしれないとカンナは思っていた。

翌日、ハンドバッグとコンピューターバックだけをレンタカーに積んで、カンナも別荘を後にした。

空港でレンタカーを返し、飛行機の空席情報をチェックする。

カウンターで直接チケットを購入して、ようやくカンナは携帯電話を手にとった。

東京の秘書に便名と到着時間を知らせ、迎えの車を手配するようにメッセージを送る。

しばらくまた騒がしくなるかと思うと気が重いが、自分の足で乗り越えるしかないと思いなおして、背筋を伸ばして飛行機に乗り込む。

だ。

東京に到着したカンナを待っていたのは、元夫の更なるスキャンダルだった。

DNA鑑定で、生まれた子が達哉の子供でないわかり、達也が離婚を切り出すと新妻は行方をくらましたと世間を騒がせていた。

他に大きなニュースもないせいか、達哉たちの話題が毎日のようにテレビを賑わせていた。

もちろんカンナのところにもいろいろなメディアから取材の申し込みがあつたが、他人様の家庭のことには何も言うことなどないを取り合っていないなかつた。

DNA鑑定のことしか情報が出てなかったが、メディアには出していない達哉が受けた不妊検査の結果をカンナは入手していた。やっぱり達哉は無精子症だった。

以前、カンナが不妊治療をうけた時、カンナのほう是不規則な生活のために生理周期が乱れることがあつても子宮には異常は見られなかった。

医師は夫である達哉も検査を受けるようにと言つたが、達哉が頑として拒んだのだ。

カンナは心の隅にそのことがずっと引つかかっていた。

達哉とカンナの離婚に際して、達哉の両親からは子供ができなかったカンナに非があり、

他所の女に子供を作つた達哉は悪くないと言われたことが思い出された。

カンナを離縁して妊娠した女を嫁に迎えるのは当然のことだと言ふことだった。

あの両親は今頃どんな気持ちなのだろうか考えたが、どうせ自分達の言ったことは忘れているのだろうと思うとカンナはため息が出る。

騒がしい東京を離れたかったが、今は離れる時期ではなく巻き返しの時期だ。

達哉の会社からの営業妨害はほとんど無くなっていた。

スタッフが慌しく動く中、カンナは静かにその時を見ていなくてはならない。

油断のできない時期だった。

毎日のように会議を繰り返しながらも、スポーツ新聞や週刊誌、ワイドショーは欠かさずチェックをしていた。

少しずつ達哉の元社員や友人知人のコメントが掲載されるようになっていった。

夫婦間のネタに尽きてきたので、次は達哉個人への中傷や疑惑でスキャンダルを膨らませるらしい。

最近インターネットでの流布も早いので、いたるところにコメントが入り始めているとカンナは報告を受けていた。

そういう時期に、琢磨の兄からプランがいくつか出来たので一度見てももらいたいとメールが届いた。

あと数日で達哉のほうに何か動きがありそうだと。

エックス
Xデイには同じ東京に居たくなかった。

ちょうど東京を離れる良い口実になる。

「2、3日、実家に帰って良いかしら？」カンナが秘書にそう聞く

と、

「電話とメールさえできる所でしたらよろしいですよ」と言つので、満にアポをとってから出掛けることにした。

着替えも化粧品も実家に置いてある。

ハンドバックとラップトップだけを持って、翌日には東京を離れた。

琢磨の兄、満とのミーティングを前日に控えた夜、田所から電話がかかってきた。

「どうですか？ご実家は。のんびりされてます？」

「おかげさまで。東京のほうをお任せして申し訳ないわね」

「いいいえ、仕事ですから」

そんな他愛の無い挨拶のために電話を寄越すような田所ではない。カンナがいつ東京に戻るつもりなのか聞きたかったようだ。

「明後日以降でしたら、いつでも必要なときに戻ります」とカンナは答えた。

「そうですか。もしかしたら2、3日で戻っていただくかもしれません。」

こちらのほうはたぶん明日になりそうですから」
最後にそう言つて田所は電話を切った。

それでカンナにはわかってしまった。

明日は朝からもう一度別れた元夫をテレビで見ることになるだろう。

元夫、達哉は羽振りの良さに任せていくつかの会社を興していた。カンナには言わないで資本を投じたものもある。

しかし、安直に作ってそう簡単に軌道に乗る会社などありはしない。健全な経営構造の会社もあったが、非常に不透明な会社もあった。これだけスキャンダルで有名になった達哉を、税務署がほっておくはずはない。

査察が入れば、カンナのところにも問い合わせが来るだろう。

この時のためにカンナは準備をしていた。

火の粉を振り払うだけでなく、事態を収める計画はすでに完成され、あとは実行だけなのだ。

カンナはすでに達哉の会社を吸収する計画を立てていた。

カンナは立案だけで個人の資本を使うわけではない。

会社が動くので実際は関連会社の社長と弁護士の仕事になる。

使えない会社は切り捨て、価値のある会社と人材を取り込んで更に大きな会社にしようとしていた。

今更達哉の会社に係るのはどうかと思ったが、他の誰かがやるなら自分がしてしまおうと思ったのだ。

IT企業の再生である。

最初、腹心の部下達に計画を話したときは皆が驚いた顔をしたものの、さすがに計算の速い人ばかりである。

一瞬あとは空気が熱くなり、皆の気分が高揚するのがわかった。

思考の途中で琢磨から着信があったが、それを確認するだけで電話には出なかった。

着信はやがて留守電に変わった。

琢磨のメッセージは明日の朝聞こつ。

その夜は誰にも自分の時間を邪魔されたくはなかった。

翌朝、午前中に予定した打ち合わせにカンナが家を出ようとした時、テレビニュースで達哉の本社に査察部ご一行様が入っていくシーンが映った。

父がそのニュースを啞然と観ていた。

カンナは出そうになる深いため息を飲み込んで、「また東京に戻るから」と父に声をかけた。

「お前も関係してるのか？」

「いいえ、あれは達哉の会社だもの。うちは関係ないわよ」

父は何も言わない。

「でも、会社を分けたのはほんの数ヶ月前だから問い合わせは来ると思う」

「信用していいんだな？」

カンナが頷くのを見て、父はテレビ画面に顔を向けた。

そんな父の背中にカンナは「パパ、車借りるわね」と声をかけて家を出た。

運転中にも田所と秘書から相次いで電話が入る。

これから始まる1、2年のプロジェクトだと思えば良い。

カンナは報告を聞きながら車を駐車場に停めた。

設計事務所では琢磨の兄、満が3つのプランを作って出迎えてくれた。

満のスタッフも同席してプランの説明を聞く。

インスピレーションというものがある。

カンナは3つのプランのうち1つを直感的に選び、それについてカンナは遠慮せずに質問をぶつけた。

満も満更ではなさそうだったので、きっとそのプランが一番自信があつたに違いない。

カンナの質問に澁みなく答え、プレゼンテーションをしていく。

メリハリのある展開はなかなか手馴れているようだが、それ以上に満の熱意というものを感じた。

それにカンナが選んだプランは琢磨もきつと気に入るだろうと思つた。

コンクリート打ち放しと無機質な素材をメインに構築していくそのプランは、琢磨の出番が多そうだ。

アクセントに自然素材を使うので、斬新な中にも温かみを感じる住み心地になるに違いない。

朝出掛けに気の重いニュースだった今日のスタートを考えると、カンナの気分が上向いてきた。

打ち合わせがそろそろ終わりに近づいた頃、スタッフが満に伝言を持ってきた。

「小野寺さん、終わったら琢磨が電話欲しいって言ってきました」と満がカンナに伝えた。

そっぴえば琢磨の留守電を聞いたのにそのままになっていたことを思い出す。

「はい。あとで連絡しておきます」とカンナが答えると、満は頷いて打ち合わせを続けた。

設計図に入る前に契約をしなくてはならない。

いくつかの条件を話し合ったあと、カンナの弁護士が契約書を作る
ことになった。

特に条件を出したものがいくつかあるが、満が決断しなくてはなら
なかったのがカンナのプライバシーの問題である。

カンナの家を建築するに当たって、事務所内で記録のための写真保
存は良いがそれを公表することは出来ないというものだ。

通常の家ではない。満は久しぶりにやる気が出ていて、良い作品を
残す気持ちで挑戦しようとしているのだが、建築雑誌等に掲載でき
ないのは辛い。

カンナのほうは都会の有名建築家に頼みたくなかった理由のひとつ
が建築後の作品発表だった。

素晴らしいものが出来たらそれを業界に発表したい気持ちはわかる
だが、どうしてもプライバシーは譲れないところだ。

カンナの決意もわかったのだろう。

満は短時間でそのことは諦めた。

それくらい魅力的なプロジェクトのように思えた。

満からもカンナに提案があった。

琢磨に、施工だけではなく琢磨の作業部分が終わった後も施工管理
をさせてはどうかと言うものだ。

よく考えてみるとなるほどと思う。

ほとんどの部分は土木業者の仕事になるかもしれない。

さらにカンナは建築場所には近寄るつもりはなかった。

「施工管理料が通常と同じであれば、そちらで分けていただいて構
いませんよ」とカンナが言うと、満は「そう来ましたか」と笑った。

「では主に外側は琢磨に、全体と特に内側は私が管理しましょう」
と言った。

「どうですか？正午も過ぎてしまいました。

近所で軽く昼食をいかがですか？

その後で、琢磨が参加できるといえば、午後から3人で話を詰めま
せんか？」と満が提案する。

「はい。わかりました。お時間は大丈夫なんですか？」とカンナが
聞くと、

「他の物件はスタッフがやっていますので、私は小野寺さんのだけ
に専念してます」と言うことだった。

「では、ちょっと洗面所をお借りできますか？秋吉君にも電話で聞
いてみます」とカンナは断って離席した。

素早く身だしなみを整えて、携帯電話を取り出すとひと呼吸してか
ら琢磨に電話をかけた。

琢磨に電話をかけると、数回で琢磨は電話をとった。

「カンナです」そう言つと、一瞬の間があつて、

「何故電話してこなかった？」そう琢磨が聞いた。

「機嫌悪そうね」

琢磨はそれに答えない。

「怒つてるの？」

「ああ」

ようやく琢磨の声がした。

「来る前に電話してこいつて言つただろうが」

カンナはため息がでそうになるのを飲み込んで、

「いろいろと取り込んでいたのよ」と言った。

気を取り直して、「今、秋吉設計さんに居るの。これから食事をして、午後の打ち合わせになるんだけど、その打ち合わせに同席してもらえませんか？」と一気に言う。

「プランが決まったのか？」

「ええ、第一候補が決まりました。もう少し詰めておきたいと思つて」

「わかった」

「食事が終わる頃、秋吉設計さんから連絡してもらいましょうか」

「うん、そうしてくれ」

「まだ怒ってます？」

「ん？少し収まってきたが・・・」

「はやく機嫌直してくださいね」

そうカンナが言つと琢磨は再び怒りがこみ上げてきたようだ。

そんな琢磨をカンナは笑いながら電話を切った。

琢磨のほうはもう繋がっていない電話を呆れたように見ながら、「アイツ、電話切りやがった」と呟やいていた。

打ち合わせの部屋に戻ると満はすでに出掛ける用意ができていた。「秋吉君は午後の打ち合わせに合流できるということでした。こちらの昼食が終わる頃連絡が欲しいそうです」と満に伝える。「わかりました」と満は言って、カンナと同席していた満のスタッフを促して部屋を出た。

「歩いていきましょう。すぐ近くに美味しい蕎麦屋があるんですよ」設計事務所の扉を開けながら、満はそう言ってカンナの同意を待った。

「お蕎麦、好きですわ」簡単にそう答えながら、満が押さえている扉を先に出て二人を待つ。

三人で民芸風の蕎麦屋まで歩いて行った。

昼食後、琢磨も合流して満の事務所で打ち合わせを再開した。まず、決めたデザインを琢磨に見せることから始まる。事務所にやってきた琢磨はカンナを見てもことさら表情を変えなかった。

電話でのことは何も言わずに形だけの挨拶をして着席した。

満はそんな弟を見ても何も言わなかった。

カンナが選んだデザインを琢磨に見せると、琢磨は熱心にプランを見ている。

ざっと一通り目を通してから、「ボツになったのも見せてもらえるか？」と満に言つて、それも見始めた。

カンナは琢磨が見終わったデザイン画を手にして、予定の土地を思い出して建物が出来た時の完成図を頭のなかで想像していた。

やがて琢磨が見ていたプラン集をミーティングテーブルに置いたので、それをスタッフが片付けて採用案のものだけをテーブルに広げた。

「何故これが採用になったんだ？」琢磨は口を開いた。

「小野寺がこれでOKしたのか？」とカンナに聞く。

「ええ、これが一番よく出来てるし、私も頭のなかでイメージが広がって興味がでたから」

「これが気に入らないのか？」と満が琢磨に聞くと、

「いや、良い建築だとは思うが、小野寺の住む家なんだろう？」と戸惑っている。

「いったい私の似合う家って・・・どんなイメージがあると言つたよ」とカンナが言つと、

今度は満が琢磨に「これを読んでみる」とカンナが作った設計希望リストを差し出した。

琢磨が最初のページから丁寧に読み始めると、満はスタッフに「そのボツになったほうを俺のデスクに置いてくれ。それから呼ぶまでは来ないように」と言つて、スタッフを追い出すと琢磨のほうを注意深く見つめた。

カンナも琢磨の表情を見ている。

琢磨の目の動きや眉間に寄る皺の具合をじっと見ていた。

やがて何枚かのリストから目を離し、ふっつとため息をついた琢磨は顔を上げた。

満が「そうなんだ。小野寺さんはそれがご希望だ」と琢磨に言った。「こんなのって、まるで要塞みたいじゃないか」と琢磨が答える。

「俺は城だと思っていたが、確かに要塞のほうがぴったりくる」と言って満は笑った。

「残念ながら、秘密基地とはいえないわ。秘密じゃないんだもの」カンナがそう言つと、満と琢磨の兄弟は呆れたように顔を見合わせた。

さらに「私に必要なものなら住んでるうちに相応しく見えてくるでしょう」と言つと、

琢磨は「確かに、そうに違いない」と言つてそれ以上は反対しなかった。

琢磨が静かになったので、満はようやくプラン全体のコンセプトを琢磨に説明し始めた。

たくさん質問が飛び交い、設計図や施工のスケジュールがだいたいい見えてきた。

契約書を作るには完全なスケジュールが必要なので、満と琢磨が連絡をとりあいながらスケジュールを作ることになった。

一段落したところで、3人が揃うのも滅多にない機会なので、一緒に現場を見に行こうということになった。

満はデザイン画と設計図を持ち、スタッフを従えて事務所の車に乗り込む。

カンナと琢磨もそれぞれの車を発進させた。

市街地を抜けてしまえば車は簡単に現場に到着する。

設計事務所を出てから30分ほどで3台の車が幹線道路から6m幅の私道に入り、一軒の古い農家の前で止まった。

3方を田んぼに囲まれて、一方だけが盛り上がった雑木地に面しており、そんな中でざっと1500坪ほどの宅地は取り立てて広いようには見えない。

家が小さいからかもしれない。

それに庭の一部は柑橘類の木が植えられて畑になっていた。

満のスタッフはさっそくカメラを取り出している。

そのカメラをじっとカンナが見ているのに気がついた満は、

「おい。こういう場合は人物を入れずに撮るんだぞ」とわざわざ言っ
てカンナを安心させた。

「わかりました」と返事をしたスタッフは、3人から離れて熱心に現場の写真を撮り始めた。

満はボンネットに図案を広げ、何やら書き込んでいる。

琢磨はそれを横目で見ながら、土地を全体に見ていた。

カンナは所在なさげにしていたが、バッグから小さなコンパスを取り出して方向を確認していた。

しばらくして、満がカンナに「ちょっと良いですか?」と言ってプランの変更を説明し始めた。

やはり実際に現場に来るとアイデアが湧くらしい。

カンナにわかり易いように、濃い鉛筆で図面の隅にイメージ図を書いていく。

カンナはわかった合図にひとつひとつ頷いた。

一段落すると先ほどまで家の反対側まで見に行っていた琢磨が戻ってきてカンナに聞いた。

「おい、カンナ。お前が一番気になるのはどんなところだ？」

満の前でカンナと呼ばれたことにちよつと動揺しながらも、「住まうという点で一番気になるのは、動線・・・かなあ」

カンナは言葉を続けた。満も聴いている。

「その幹線道路から車で入ってきて、ここまでのアプローチ。車を停めてから家に入って、キッチンに行ったり、リビングに移動したり。」

動き易い間取りでないと疲れることになるわね」

「なるほど」琢磨は頷いた。

「それから、頑丈さかな。私が飛び跳ねたら崩れちゃうような土台は言語道断！よ」

「あたりまえだろ。基礎は家がやるからな。崩れるわけないよ」

「安心してお任せしますよ、もちろん」

「そして・・・」

「まだあるのか？」

「あたりまえじゃない。デザインとディテールが重要な。」

デザイン性の低い家だと、毎日目を覚ますのが嫌になるかも。

そして天井や窓枠などを見て、こんなところちゃんとやってないと毎日思うのも嫌だわ」

「おまえな・・・」

「あのね、土木工事の部分は大きさや頑丈さは大丈夫だと思うの。でも大きさや丈夫さを主に考えている人に、繊細な部分をどこまでやってもらえるか。」

私にはわからないわ。それが秋吉さんとあなたの仕事だと思う、今

回は」

カンナは琢磨の言葉を遮って、一気に言った。

「確かにな。俺達は外で土やコンクリートに汚れる仕事をしてるよ。あまり小さいことは気にしないし、気にならない」

「でしょ？でも今回は外と内を同時にすませちゃうような工事になるはず。」

「そうでしょ？秋吉さん」

カンナは満に話を振った。

「ああ、琢磨のところの仕事如何でこの建築は決まる」

カンナの言わんとしていることがわかったのか、満はニヤリとしながら琢磨にそう言った。

「ちえっ、わかったよ、二人とも。やれるところを見せてやるからな！」

琢磨が観念したように言うのと、カンナと満はそれでよろしいという風に頷いてみせた。

「明日から秋吉さんたちにはまず工程表を考えてもらうわけだけど、とりあえず理想のものを作るという日程でお願いします。」

これだけあればよいものが作れるという日数を出してもらったら、私のほうはそれで良いですから。

ただし、一度決まれば変更はだめですよ」

「天候に左右されるぞ？」

「それもちゃんと契約書に盛り込んでおきます」

常識の範囲内で、天災などでのダメージや遅れも予め決めておけるはずだ。

「私は必要な予算を用意します。工事日程のほうは自分達で決めるんだからその通りにしてくださいな」

秋吉兄弟は黙って頷いた。

満と琢磨は技術的なことで話すことがあるだろう。

言うことだけ言って、カンナは二人を現場に残して車に乗った。

実家の手前の信号待ちで、カンナの携帯にメッセージが届いた。

そつと携帯を開けてみると琢磨から「今夜、飯食いに行こう」と誘いのメールだった。

実家のガレージに車を停めると、カンナは携帯電話を手に取った。疲れてはいるけれど、今夜の誘いは断れないだろう。

『何を食べさせてくれるの？』

それだけのメッセージを琢磨に返信した。

家に入ると、母が「ようやく帰ってきたわね」とカンナに声をかけた。

「ただいま」カンナがそう言うと、リビングに居た父が「遅かったな」と不機嫌そうに言った。

「ママ、今日はお夕食いらないから」とカンナが言うと、父の頬がピクリと動いた。

「パパ、車、長時間かりててごめんね」と言うと、「それはいい」と一言だけ言う。

「ちょっと疲れたわ」

「で、どうするんだ？」

「家、建てることになった」

そうカンナが言うと、父の顔がさらに険しくなった。

「ここに居ればいいのに・・・」と母が口を挟む。

「うん。でも、難しいのよ。私の周り、いろいろあるから」

そう言うのと両親は黙ってしまった。

「でもね、まだ契約もこれからだし、2年くらいかかるのよ。それまではこと東京を行ったり来たりだと思う」

「達哉さん、またテレビに出てたよ」

「そうでしょ？きつと私も呼び出されるわ」

「とつくに縁が切れてるのに・・・」

母はなかなか納得しない。

父は何も言わないけれど、おそらく母と同じだろう。

「スキャンダルって結構しつこいのよ。

ねえ、知ってる？私がここに帰るたびに、その直前にうちのスタッフが盗聴器などのチェックをしてるのを」

思い切ってカンナが言うと、父も母もはっと顔を上げてカンナを見た。

「そんなものがここに仕掛けられているのか？」と父が聞いた。

「ううん、ここには何もなかったけれど、東京では取り除いてもすぐにまた仕掛けられてるの。」

だから念のために何もなくても簡単にチェックしてるだけ」

カンナは嘘をついた。

二度ほど小さくて高性能な盗聴器が見つかったことを言わずにおいた。

「誰がそんなことを・・・」

「週刊誌とか新聞関係だと思う」

「どんな場所にとりけるんだ？」

「取り付けたりはしないの。リビングに近い庭の塀の内側に小さなマイクを投げ入れるとか、携帯電話の盗聴をするとか。

木の枝にひっかけるようにしてカメラを隠すとか。

しかも近くに居なくても遠くで集めたものを編集できるようになってるから」

両親にわかり易いように言葉を選んだ。

「だからね、そういうことができない家を建てようと考えてるのよ」

両親は同時にため息をついた。

そこにちょうどカンナの携帯にメッセージが届いた。

「じゃ、私ちよつとシャワーを浴びるわ」

そう言つて立ち上がりながら携帯を開く。

『6時半に迎えに行く』という琢磨からのメッセージだった。

「車使うのか？」父がカンナに聞いた。

「うん。秋吉君が迎えにくるから、大丈夫」

「秋吉？」

「うん、同級生の秋吉君。ほら、陽菜ちゃんのパパよ」

「ああ、あの・・・」

「一応、建築プランが決まりそうなので気を使ってるんじゃない？」

「秋吉組でやるのか？」

「お兄さんのほうが設計図描いて、弟のほうが作るってことになったの」

言うだけ言つて、カンナは素早く二階に上がった。

そのままベッドに横になりたいくらいだったが、あまり時間もない。

『はい。よろしく』とだけのメッセージを送り、着替えを手にしてまた一階に下りた。

シャワーを浴び、髪を乾かすとうやくほつと一息ついた。

手早く化粧を済ませておいて、PCを立ち上げる。

メールチェックをして必要なものに返信を出し終えたところで、そろそろ琢磨が迎えにくる時間になった。

鏡を見て化粧直しをしているところに琢磨からの着信だ。

電話をとると、「あと5分で着くぞ」といきなり琢磨の声がした。

「どこへ行くの？」

「内緒」

「服装はどうするのよ？」

「普通でよい」

「まったく……。じゃ、外に出てますわ」

そう言つてバッグを掴み、部屋を出た。

リビングに居る両親に「行つて来ます」と声をかけてから玄関を出ると、ちょうど琢磨の車が到着した。

ドアを開けて出ようとする琢磨を手で制しておいて、カンナは自分で助手席側にまわつた。

勝手にドアを開けて座る。

「よお！ご機嫌よくなさそうだな」と琢磨が言うので、カンナは「早く車出してね」とだけ言つた。

「はい、はい」と言つて車をスタートさせた琢磨は機嫌がよさそう
だ。

「で、一体どこに連れていかれるの？」

「ん、実はまだ決めてない」

「何、それ！」

「まだ明るいから少しドライブしようと思つて」

「確かにこのねずみ車だと走りたくはなるわね」

「だろう？この車も久しぶりだしな。適当に走ってから考えるわ」

「うん、いいよ」

そうカンナが返事すると、「ようやく機嫌がよくなってきたか」と琢磨が呟いた。

しばらくして、「そうだ！もう一度あの土地に行つてみない？」とカンナが言つた。

「家を建てるどころか？」と琢磨が答える。

「ええ。夕方のあの場所をあまり知らないから、見ておきたい」

「わかった」

そう頷いて、琢磨はハンドルを切った。

家の私道に入る時、カンナは今通ってきた幹線道路を振り返って、

「あの道、あなたのところが工事したんでしょう？」と琢磨に聞いた。

「ああ、そうだ」

「比較的簡単なんですよ？」

「ああ。障害物が少ないから」

琢磨は古家の前で車を停めると助手席に回り、カンナの手を引つ張って引き上げた。

カンナは車から少し離れたところまで歩いていき、腕を組んで周りを見渡した。

琢磨はそんなカンナを少し離れたところから見ていた。

「私が思い描くのは完成図だわ。同じ場所に立ち同じものを見てもあたなが思ふのとは違うんでしょうね」

しばらくしてカンナが振り返らずに口を開いた。

「そうだな。たぶん違うと思う。掘り返した土をどこに置こうかとか、持ち込む機械の大きさをどれにしようかとは考えているよ」

そう琢磨が答えた。

あたりはまだ十分な明るさがあつたが、直接陽が当たってるわけではない。

斜め後ろからカンナを見ているので、カンナの耳や顎のラインの陰影がくつきりと見て取れた。

よく手入れされた肌だと琢磨は思った。

「昼間来た時、裏手も見てたけど、何か気になることはあった？」
とカンナは琢磨に聞いて来た。

「いいや。ちよつと見てただけだ。どうせうちが壊す家だからな」
琢磨はそう答えてから、「煙草吸ってもいいか？」とカンナに聞くと、「どうぞ」とカンナは答えた。

「ここは前からお前が持ってたのか？」今度は琢磨がカンナに聞く。
「いいえ。元は親戚の家だったの。」

老夫婦が息子のところに行きたいってことで買ってほしいって言うてきたのよ」

「何も売らなくても・・・」

「ひとつには息子さんの事業が上手くいってなくて、助けたいというのもあつたんじゃないかな」

「ふん」

「もうひとつは、畑がこのまま朽ちて行くのが耐えられなかったんじゃない？」

「そんなものか」

「その幹線道路に面したこの家を囲む田んぼもそうなのよ」

「それはたいへんだな」

「近所の農家の人が田んぼを借りたいっていうから貸したわ」

「おまえが大家なら何かあつても大丈夫だな」と琢磨は笑った。

「工事には多少のアクシデントは仕方が無いと思うけど、

作物をダメにしたらあんたが賠償するのよ」

カンナは琢磨を見つめてそう言った。

「ちえっ！わかつてるよ」

「保険には入るんでしょうね」

「当たり前じゃないか」

「まあ、私になるべく出て行かなくても良いようにしてよね」

「こつちにはあまり居ないのか？」

「ん〜、東京と行ったり来たりかな。とりあえず忙しくなるし」

「旦那のことか？」

「元旦那よ。間違えないで」

琢磨は「怖えええ」と言いながらも目は笑っていた。

「まったく、いい加減なことやってくれるから私も早々に東京に戻って対応しなきゃ」

「いつ行くの？」

「明後日かなあ。あるいは明日の夜か。まだ決めてないわ」

「そうか。決まったら連絡くれるか？」

「あら、送ってくれるの？」

「時間があればな」

「まあ、電話だけはしてみるわ」

「ああ、そうしてくれ」

あたりが薄暗くなってきたので二人は古い家を離れた。

「腹減ってないか？」と琢磨が聞くと、

「空いてるわよ」とカンナが不機嫌そうに言った。

そんなカンナを見て琢磨は笑いながら、「そうか」と言っつて車を走らせた。

琢磨が車を停めたのは、一軒の民家だった。

洋風のデザインは女性が好みそうな柔らかな外観で、アプローチには花の鉢が玄関まで並んでいる。

その鉢の隙間にフットライトが等間隔で並んでいた。

扉の前までくると自動ですっとドアが開いた。

「いらっしやいませ」という声がすかさず聞こえる。

「驚くなよ」と琢磨がニヤリとしてカンナに言った。

店の奥から同年代の女性が出てきた。

琢磨は常連さんなのだろう。

「いらっしやいませ」と嬉しそうに琢磨に微笑んだ女性に「奥、空いてるか？」とすかさず聞いた。

「繁盛店にいきなりきて、個室が空いてるわけないでしょうが」とバンッと琢磨の肩を叩きながら言ったので、カンナはびっくりしてしまった。

「おまえ、なんだよ。いきなり」琢磨はわざと痛そうに肩に手をやっている。

顔は笑っているのだから、いいことではないのだろうか、いきなりタメ口の歓迎に驚くばかりだ。

「いつまでの玄関先では何だから、こちらにどうぞ！」そう言って、二人についてくるように促して、廊下を先に歩いて案内する。

美味しそうなデミグラスソースの匂いが漂っていて、カンナには進むにつれその匂いが強くなった気がした。

小さな部屋に通される。

一応4人用の椅子はあったが、4人入ると手狭になると思う広さだ。

「ここがキッチンに一番近くて特等席なんだ」と琢磨がカンナに説明した。

2 - 2 2 (後書き)

いつも読んでいただいております。

今週は旅に出ますので、23話からしばらく更新をお休みさせていただきます。

*盗聴や盗撮の方法については正しい知識からではありません。

カンナが両親に警戒心を芽生えさせるための発言としてご理解下さい。

G a r d e n i a

小部屋に入るとすぐに、琢磨が二人を紹介した。

「こちらこの女将さん。カンナは覚えてるかな。節子だよ。クラスは違ったけど同じ学年の加藤節子^{かとうせつこ}」

カンナはじつとその女性を見た。

女将と紹介された女性も「カンナ」という名前に反応してじつと見ている。

同じタイミングで、

「カンナちゃん?」「節っちゃん?」と呼び合って、次には「きゅん、久しぶり」と黄色い声を上げて手を取り合った。

「料理人の奥さんになったとは聞いていたけど・・・」カンナはまだ驚きを隠せずに言った。

「うん。独立するっていう時に結婚したのよ」

「レストランをしているというもの聞いてはいたんだけどね。今まで来れなくてごめんね」

「いいのよ、そんなこと。それに洋食でこってりしてるからうちの両親もあまり来ないから」

そう言って節子は笑っている。

「カンナちゃんは実家に帰ったんだって?」

「うん。まあ、出戻りってわけよ」

「オジサンたち喜んでるでしょ」

「複雑な心境ってところじゃないかな?」

今度は琢磨がびっくりしている。

「お前達がそんなに仲良いとは知らなかったなあ」

「何言ってるの。同じクラブだったんだもの」
「しかも私達、親戚だよ？」

琢磨はカンナと節子の顔をかわるがわる見てから、
「そうだったんだ。驚きだな。でもとりあえず腹減ったから注文を先に聞いてくれ」と
投げやりに言つて椅子にドカリと座り込んだ。

「まったくこのお坊ちゃまは、お腹が空くと機嫌が悪いんだから」
節子はそう言いながら、テーブルにお皿やカトラリーを整えていく。
「ビールとか飲む？」と二人に聞いた。

「今日は運転手居ないから、水でいいや」と琢磨が言つと、
「車置いていつていいよ」と節子が返した。

「ん〜、でも今日はいいや」と琢磨が言つので、カンナも「お水
くださいな」と言つた。

「俺はいつもので！」と琢磨が言つので、「いつものって？」とカンナが聞くと、

「ハンバーグだよ。秋吉君はそれしか食べないから」と節子が笑いながら教えてくれた。

「じゃ、私も同じものを」と言つと、「とりあえずオーダーを通してくるね」と言つて小部屋を出て行つた。

ようやくカンナは琢磨の向いの席に座つた。
琢磨が口を開く。

「親戚だとは知らなかったなあ」

「遠い親戚よ。母同士が従兄妹だったはず」

「ここらあたりでは、それは近い親戚だな」琢磨がそう言つて、二人は顔を見合わせて苦笑した。

やがて少量の前菜が運ばれてきた。

つづいてスープとサラダがそれぞれ二人の前に置かれる。

それを食べ終わった頃に、コック服を着た背の高い男性がカンナと琢磨に挨拶に来た。

「うちの人です」と節子がカンナに紹介すると、「今からハンバーグ焼きますのでお待ちくださいね」と言ってキッチンに戻って行く。ランチタイムは予め焼くだけに用意しておいたものを焼くのだが、夜は注文を聞いてからひき肉を捏ねているらしい。

今夜は張り切っていて、特上サーロインをひき肉にするところからシェフが自らやっているという節子が説明した。

琢磨が「今までそんな待遇を受けたことがないな」と拗ねたように言うところ、

「カンナを連れて来てくれたらまた作ると思うよ?」と節子は笑っている。

カンナの耳に近づけるようにして、「秋吉君ったら女性を口説くときは決まってここに食べに来るんだけどさ・・・」と言うところ、

「お前、何言ってるんだ?」と琢磨が慌てて節子の言葉を遮った。

「へえ、そうなんだ。ふふふん」とカンナも面白そうに琢磨を見ると、

琢磨は顔を赤らめてと言ってふいと横を向いてしまった。

節子とカンナは顔を見合わせて笑っている。

「じゃ、そろそろハンバーグがあがるころだから見てくるね」と節子が笑いながら小部屋を出て行くと、会話が止まってカンナのくすくす笑う声だけが響いた。

「おまえ、そんなに笑うと皺増えるぞ」と琢磨が面白くなさそうに呟いた。

ほどなく運ばれてきたハンバーグがとても美味しくて、二人は会話もせずにもくもくと食べた。

あつと言つ間に食べ終わつた琢磨は、向いに座るカンナを見ていた。

一口大に切つたハンバーグにナイフでソースを絡めて口に運ぶ。

ぱくつと素早く口に入れると目を細めて美味しそうに咀嚼している。ハンバーグは端から順序良く切られていて、付け合せの野菜も肉と同じように順番に食べている。

カンナの皿の上の肉と野菜はいつでも綺麗な切り口で、一定のリズムで少しずつ小さくなっていった。

「食べるの遅い？」とカンナが突然琢磨に聞いた。

カンナはハンバーグだけだが、琢磨はご飯も大盛りで食べていた。

「いや」と簡潔に琢磨が言うと、カンナは最後の一切れを口に入れ、食べ終わるとナイフとフォークを皿の端に揃えて置き、「ごちそうさまでした」と呟いた。

「肉、好きなのか？」と琢磨が聞く。

「ええ、こういう店に來るとお魚よりお肉頼んじゃうわね」とカンナが答える。

「あなたはどつなの？」今度はカンナが琢磨に聞いた。

「お魚とお肉とどっちが好きなの？」

「そつだな。俺は魚も結構食うぞ」

「野菜と甘いものはあまり食べないつて感じだよね」

「飲むからなあ。甘いのは苦手だ」

そんな話をしているところに節子がデザート注文を聞きに來た。二人ともお腹が一杯なのでデザートを断ると、「シェフがっかり

するわね」と言っけてキッチンに戻って行っただ、すぐにコーヒを運んで戻ってくる。

「今度、両親を連れてくるわね」とカンナが節子に話しかけた。

「年に何回かはおじさんとおばさんには来てもらってるのよ」

「そうなんだ。明日は父と一緒にでかける予定だから、お昼はここに来ちゃおうかな」

「うんうん、そうして？でも、ランチはちょっと混む時間があるから来る前に電話もらえると助かるわ」

「それは凄いな。じゃ、遅めの時間で来るかな」

「おじさんは娘と一緒ににお出かけじゃ嬉しくて仕方ないだろうな」と節子が笑って言った。

「車のショールームに行こうと思って」とカンナが言くと、節子と琢磨が「車買うんだ？」と同時に言った。

「あはは、車となると琢磨の食いつきが早いわね」とカンナが笑う。「ハイブリッド車がいいなと思ってさ。誰かディーラー知らない？」と二人に聞くと、

「同級生だった小泉こいずみがレクサスで所長してたんじゃないか？」と琢磨が言くと、

「そうそう、小泉君、所長だよ」と節子も頷いた。

カンナが目を細めて思い出そうとしている。

「こいつ、あまり覚えてないから・・・」と琢磨が節子に言った。

節子は苦笑しながら、「とびっきりのイケメンだったらカンナもお覚えてるだろうけど、ほんと目立たない子だったもの」と言った。

「しかも、今は中年のオヤジだよ？会ってもわからないんじゃない？」

「節っちゃんは覚えてるの？」と、カンナが聞くと

「小泉君、所長になったとき家族でお祝いの食事しにきてくれたんだよ」と節子が答えた。

「決まったら連絡してこいよ。どこのディーラーでも知り合いの一人や二人居るから」と琢磨が言うと、

節子が「走り屋だったものね、秋吉君は。その時の子分がたくさん居るんじゃない？」と言つて笑った。

琢磨は「なんでそんな事言うかなあ」とブツブツ言いながらも、節子に食事代を支払い、二人は節子夫婦に見送られて車に乗り込んだ。

助手席に座ったカンナが「これ、私の分」と言つてお金を出そうとすると、

「やめてくれよ」と琢磨が不機嫌そうな声で言った。

車を発進させながら、見送りに出てたたずんでいる節子夫婦に手を振り、

「今日は俺が誘ったんだから黙って奢られて？」とカンナに言う。

「わかったわ。ご馳走様でした」とカンナは素直にお金を引つ込めた。

不機嫌な沈黙が怖かったので、カンナは「あのハンバーグ、ほんとうに美味しかったわね」と琢磨に話しかける。

琢磨がまだ黙っているのを無視して、「あれは神戸牛のサーロインで、絶対にシェフの手切りで叩いたものだよ」と言った。

「わかるのか？」ようやく琢磨が口を開いた。

「だって、肉のつぶつぶが不揃いだったじゃない。

シェフが包丁で丹念に叩いたお肉を、手で捏ねて、形をつくってすぐに焼いたものだわ」

「ほう」

「ソースはたぶん、3日目くらいだな。ああいうお店は毎日ソースを作ってるわけじゃないから、たぶん1週間に一度くらいだと思う。店に入った時はよく煮込んだ匂いがしてたけど、私のお皿にかかっていたソースはそれよりも少し浅い香りがしたから」

「おまえ、食い意地が張ってるんだなあ」と呆れたように琢磨が言った。

「グルメって言うてちようだいな」カナナが高飛車に琢磨に言うのと、「何がグルメだ!」と琢磨が笑って言った。

カナナも笑い出し、やがて「そうなの。私ってとっても食いしん坊なのよ」と認めた。

しばらくして、「なあ。今度ほんとに神戸にステーキ食いに行かないか?」と琢磨が言った。

「デートのお誘いは困るわ」カナナがさらりと断る。

「鮎でもいいぞ?」

「尚更困るわ」

「困るのか?」

「困るわよ。妻子持ちの男性とカウンターで仲睦ましく肩寄せ合って鮎をつまむって・・・何か、嫌だなあ」

「ほう、肩寄せ合うのか?」

「周りはそう見るってこと」

一瞬言葉に詰まったが、琢磨はさらに誘う。

「なんかさ、おまえが食べるのを見ると、もっと食べさせたいって思うんだよなあ」

「何それ? 餌付けてこと?」

それには琢磨も笑っていたが、「細いお前に食べさたいと思うし、それに食べてるところを見ていたって気がするんだよねあ」

「あなたは親鳥ですか？」

「そうかもしれない」そう言って琢磨はまた笑った。

「食べ歩きのを発足してもいいけどね、でも今じゃない。それだけは確かよ」カンナは降参したように最後に言った。

「まだかなり時間がかかるのか？」琢磨は東京のことを聞いたようだった。

「今からしばらくは正念場だから」そうカンナは答えた。

「とりあえず東京に戻る前に電話かけてこいよ」琢磨はそう言って、カンナの実家の前に静かに車を停めた。

2 - 2 3 (後書き)

充実した旅から戻ってきました。

更新が止まっていて申し訳ありません。

仕事も溜まっているので、不定期になりますが更新再開しますので
よろしく願います。

G a r d e n i a

琢磨と一緒に食事をしてから3週間ほど経った。

東京に帰る前に琢磨には連絡をしたが、時間が合わずに空港まで送ってもらったことは敵わなかった。

そのことにカンナはほっとしていた。

とぼつちりとはいえ、スキャンダルの渦中だ。

しかもそれを逆に利用して会社を大きくしようとしているところなので、新たな火種を作るわけにはいかない。

今は静かに集中するときだと思っていた。

琢磨の兄、満との一つ目の契約書が完成したと田所から連絡があったのでざっと目を通し、ファックスで送るか持って行くのかカンナは悩んでいた。

この書類に署名押印すれば満は設計図に着手する。

設計図が完成すれば今度は建築に関する契約書だ。

次の手配をするのは夏まつさかりだろう。

このまま順調に進んでも着工は秋になる。

カンナは逆算して次に琢磨に会うのはいつになるのだろうと考えた。

中学生の頃の琢磨を思い出しながら、やっぱり書類はファックスで送ってしまったおうとカンナは思った。

東京を離れる時期ではないし、持っていくほどの書類でもないのだ。それに、行かなくても毎週琢磨から電話がかかってくるうちはこのままでもいいかと思ってしまう。

中学時代の琢磨はいつも誰かと付き合ってたなと思い出した。

付き合っては別れ、ほどなくするとまた女の子のほうに告白して付き合いが始まる。

それが結構可愛い女の子が多かった。

突然、琢磨の誕生日が夏だったことを思い出した。

確か夏休みに入ってからだから、きっと8月生まれなんだろう。

カンナと琢磨は教室では結構楽しく話していたので、琢磨の彼女から誕生日プレゼントは何が良いかとアドバイスを求められたこともあったつけ。

さほど知らない女の子でも、そういうば節子を通してカンナに聞いてきたこともあった。

バイクの鍵につけるキーホルダーが欲しいらしいとか、ちよつとしたことは言ってあげたかもしれない。

それがきっかけで仲良くなった子もいたつけ。

今思い出せば、そんなことで女の子って悩んでいたんだなあと興味深く思った。

もしかしたらそれとなく牽制されていたのかもしれない。

それに思い至ると、カンナは自分のことが可笑しくてしかたがなかった。

彼女たちの女の駆け引きにも気がつかないなんて、幼稚なのはカンナのほうだったのだ。

あの頃の琢磨にはいつも彼女が居た。

どうせ今でもそうなのだろう。

恋人や愛人のひとりや二人居ることだろう。

もし今居なくてもすぐに見つけることができそうだと思った。

田所に契約書を設計事務所にファックスするように頼んで、カンナはバッグを掴んだ。

エステの予約があるのだ。

あれから達哉は身柄を拘束されたままで、一方カンナは検察の問い

合わせに身の潔白を証明してみせた。

今、カンナのスタッフは琢磨の会社を取り込むために交渉を始めている。

実際の交渉は企業買収専門会社があつて相手とは直接顔を合わせなくてよいが、気の抜けない時期となる。

報告書と会議と会食の日々のなかでエステやジムに通う。

それが今のカンナの生活だった。

エステから戻ると秘書が冷たいハーブティを用意してくれていた。それを一気に飲み干しながら報告を聞く。

秘書は最後に、「田所弁護士から本日の夕食をご一緒にとのことですが」とカンナに言った。

「あ、そうなの。めずらしいわね」

「そうですね。たまにはいいじゃないですか」と秘書が笑いながら勧める。

いつもは何日か前に打診があるのだが、今夜というのは田所にしては珍しい。

「OKとお返事してちょうだいな。場所と時間を確認してもらえますか？」

「はい。わかりました」

ほどなくして秘書が戻ってきて、「午後6時にお迎えに来られるそうですね」と言った。

「え？6時？お夕飯には早いわね」

カンナが考えていると、「今日はもう他に予定が入っていないので、

早めにお仕度なさってはどうですか？」と言う。

「あなた方も久しぶりに定時に終わっても良いのではないかしら」とカンナも気がついた。

こここのところ毎日忙しい日が続いている。

スタッフにも休憩が必要だろう。

早々に自室に引き上げたカンナはクローゼットから軽い素材のワンピースを選び、軽く化粧を直して髪を整えた。

ちょうどその時、携帯電話が着信で震えた。

田所かなと思つて携帯を見ると、琢磨の名前が表示されている。

いつもは朝があるいはもつと遅い時間にかかってくるのだが、めずらしいこともあるものだ。

「はい」とカンナは電話に出た。

「いつも愛想のない声だな」琢磨はいきなりそう言った。

「だって、誰からかわかつてるんだもの」カンナも笑いながら応える。

「もつと嬉しそうに出るよ」

「電話、苦手なんだもん」

「まあ、カンナらしいけどな」

それには答えずに、「何かあった？」とカンナは聞いた。

「あつたつてわけじゃないんだけど、どうしてるかなと思つて」

「いつも気にかけてもらつて悪いわね」

「ちえっ、全然悪そうには聞こえないのはどういふわけなんだろう？」

「まあ、悪いとは思つてないからかな」

カンナがそう言うと、琢磨はカンナの耳が痛くなるくらい大きな声で笑った。

「耳、痛いじゃん。それに今日はとってもひねくれた子供みたいじゃないの。」

「そっちこそ何かあった？」

「逆にカンナが聞いてみる。」

「ん〜、何も無いけど、なぜか声が聞きたくなつてさ。ところで今、電話してて大丈夫なのか？」

「今日は久しぶりに仕事が速く終わってね、電話大丈夫だよ」
「そう答えながら、カンナは電話をヘッドフォンに切り替えた。」

「お出かけ準備しながらだけど、少し話せるよ？」

「出かけるのか？」

「ええ、食事の約束してるから」

「そうなんだ。で、誰と？」

「誰とって・・・」

「ちえっ、つい言うかと思つたのに」

「言うわけないでしょ？」

「男か？」

「う〜ん。まあ男性かな」

「えっ？ほんとに男か？」

カンナは笑いながら「女性でもゲイでもないから、男性だね」と言つた。

「マジかよ・・・参つたな」琢磨がそう唸つたので、

「デートかもよ？」とカンナは琢磨を煽つてしまった。

「お前な・・・」と琢磨が絶句したので、カンナは「あははは、そんなじゃないよ」とすぐに否定した。

「ごめん、ごめん。つい意地悪したくなつた」とすぐに謝る。
煽ってしまったことを即座に反省したのだ。

「お兄ちゃんは30分おきに電話するからな」琢磨もカンナの意図がわかったのか、笑いながら冗談にする。

「いつからお兄ちゃんに・・・」

「不順異性交遊は禁止だからな」と琢磨が言った。

カンナは少し考えて、「ね、琢磨。こういうの無しにしない？」と言った。

「ん？」

「もう二人ともいい歳なんだもの。私生活のことは干渉しないようにしたいわ」

「あ、そういうことね。もちろん良いですよ、それで」

「私だって琢磨が誰と食事に行こうが干渉したくないし」

琢磨はしばらく黙っていたが、「いいなあ、カンナに琢磨って呼ばれるの久しぶりのような気がする」と言った。

「もう、はぐらかさないの！」とカンナが抗議するフリをする。

「一応わかったよ」

「えゝ？一応ってなによ」

「わかってはいるけど、口出しせずには居られない」

「どういふことよ」

そうカンナが食い下がると、「どういふことか今から考えるよ」そう琢磨は言って静かになった。

その時、控えめにドアをノックする音が聞こえた。

「お迎えが来たようだから、私行かなくちゃ」

カンナはそう言いながらドアに近づいた。

「ああ、わかった。楽しんで来い」そう言って琢磨は電話を切った。

あっけなく終わってしまった会話の余韻を残したまま、カンナはドアを開けて田所を部屋に入れた。

「タイミング悪かったかな？」

田所はそういいながらカンナに小さなコサージュを渡した。

「え？これを私に？」

びっくりしているカンナに、「デートのお迎えには花が必要だろ？」と田所は笑っている。

「デートなの？」

「ああ、今日はそのつもり」

「まあっ！！デートなんて久しぶりだわ」と言うカンナの顔が次第に嬉しそうになっていくのを見て、田所はほっとした。

カンナの手をとって、手首の内側に柔らかく口をつけると、カンナがびくつとしたのがわかった。

「ふっん、ここも感じるんだ？」

「な、何を・・・」

カンナが立ち直らないうちに、その手を掴んで引き寄せ、

「ほら、深呼吸」と言って背中を撫でると、カンナは素直に息を大きく吸って整えた。

カンナが落ち着くと、田所は普段どおりにカンナをエスコートして夕食に連れ出した。

歩いて数分の雑居ビルにある割烹料理店だった。

「まだ早い時間だから、ゆっくり飲みながら何か食べよう」

そう言って、田所は板前に適当にお任せしますと伝えた。

田所と二人きりで割烹料理店のカウンターに並んで座っていることが不思議でならなかった。

あれほど用心深く距離を置いていたというのに。

「いったいどうしちゃったの？」カンナはそう聞いてみた。

「ん？なんとなくこういうのも良いかなあと思って」

ほらっと言って田所はカンナに日本酒を勧めた。

「あまり細かいことは気にせずに、美味しいお酒を堪能してください」

そういう田所にカンナは噴出しそうになった。

「田所先生から細かいところを取れないんじゃない？」

「あれ？私は細かいですか？」

「神経質じゃなかったら弁護士さんなんて務まらないでしょ」

「それはどうかなあ？細かかったら逆に弁護士やってられないと思う」

しみじみそう言う田所の顔をカンナは見つめてしまった。

「なんか今日はいつもと違うなあ」そう呟くカンナに、ふふつと笑って取り合わない。

「何かあった？」と思わずため口で田所に聞いてしまった。

「何もないですよ。ようやく一つ、案件が片付いたので今日はちょっとリラックスしているだけです」

いつもの口調でそう田所は言った。

もうカンナはそれ以上なにも聞かずにお酒を一口啜った。

料理を出すタイミングが素晴らしく、小鉢を空にしからお酒が進む。

「こんなに近いところにこういう素敵なお店があったのね」とカナが呟いた。

「残業のときはよく抜け出してここに食べにきますよ」と田所が言っ
て、それから近所のお店の話題が続いた。

手が空けば店主も時折口を挟んで話が弾んだ。

気がつけばお店に入ってから2時間近く他愛のない話を続けていたことになる。

カナがお手洗いに立った隙に田所は会計を済ませており、店主に見送られながら割烹料理店をあとにした。

次に田所が案内したのは、更に歩いて数分のビルの地下にある小さなバーだった。

「今夜はもう少し強いお酒を飲みたいので付き合ってください」と言う。

カナはほろ酔いで気分もよかったので、ためらわずに頷いた。

狭い階段を下りて茶色の木の扉の前に立つと、後ろから手が伸びて田所がドアを押した。

小さな声で「ありがとう」と言いながらカナは一步店内に足を踏み入れた。

扉はかなり厚さがあり、年季が入っていた。
閉まると外の気配がまったくなくなっている。

カウンター10席ほどと小さなテーブル席が3つ。

田所とバーテンダーは知り合いのようで何も言わずに手を挙げて挨拶を終えたようだった。

カンナには「いらっしやいませ」と丁寧な声をかけ、こちらにどうぞとばかりカウンターにコースターを置かれた。

カンナが振り返って田所を見上げると頷いたので、コースターの前に座る。

田所はカンナが座るのを確認してから隣に腰を下ろした。

出されたおしぼりで手を拭きながら、薄い水割りを注文する。

田所は「いつもので」と言っているところを見ると、常連なのだろう。

「では、おなじスコッチで作しましょう」とバーテンダーは言うて用意を始めた。

「ここは大丈夫だよ」と田所が言った。

カンナがゆつくりと田所のほうに顔を向けると、「同級生なんだ」とバーテンダーのほうを見ながら言う。

「腐れ縁というやつか、卒業して縁が切れるとせいせいしてたら、こんな近くにバーを始めたんだよ」

「じゃ、もう20年くらいはお友達なのね」とカンナが言うと、「お友達って上品な関係じゃないよ」と田所が笑った。

「どうぞ」と言って水割りがカンナの前に置かれた。

「ここは一人で来ても大丈夫だから。覚えておくといい」と田所がカンナに言くと、

バーテンダーがシヨップカードを出して、「よろしくお願いします」とカンナに差し出した。

「小野寺カンナと言います。お言葉に甘えて一人で来るかもしれませんが。お見知りおきを」と簡単に挨拶した。

バーテンダーは黙って軽く頭を下げてただけだった。

「遅い時間しか混まないし、こいつは滅法強いから大丈夫だよ」と田所が補足する。

カンナはグラスを持ち上げて田所のグラスに近づけながら、「それは安心だわ」と言って水割りを一口飲んだ。

バーテンダーは田所を軽く睨んだだけで、グラスを拭き始めた。他にお客は居ない。

「こういう場所があるなんて、ちょっと安心したわ」

「どういう意味？」

「仕事ばかりしてるから心配してたのよ。」

あなたの息抜きできる場所が近くにあるとわかってよかった」

「確かにここところ忙しかったから久しぶりなんだけどね」

「申し訳ないわね。忙しくさせてしまって」

カンナが形ばかり頭を下げて謝ると、

「いえいえ、ご贔屓いただきましたまして」と田所が笑った。

「あれから楊さんたちとも続いているんだよ」

「え？そうなの？」

「ああ、日本の物件に関しては少しずつ依頼してもらってる」

田所の口から楊の名前を聞くのは意外だった。

バーテンダーの存在が気になって、カンナがちらつと見ると

「あ、大丈夫。ここはそういう話をして外には出ないから」と笑いながら田所がカンナを安心させた。

「だから今夜はそのお礼も兼ねてるんだ」

「そうだったんだ。ちつとも知らなかったわ。じゃ今夜は遠慮なく

「ご馳走になっていいのね？」

「任せてくれよ」

田所はタメ口になっている。すっかりリラックスしているようだ。

「だったら二杯目はうんと上等なお酒にしようかな」と言うと、

すかさず田所が「おいおい、お手柔らかにお願いしますよ。ここはとんでもない高いお酒もあるんだ」と返した。

バーテンダーがカンナのグラスを見たので、「これ美味しいから、同じものをストレートでいただけますか？」と注文した。

「はい」とだけ言って、新しいグラスを出しスコッチを注ぐ。

カンナが一口飲むのを、田所とバーテンダーが見ていた。

舐めるように味を確かめたカンナは、「美味しいけど、私には強すぎるからお水入れてください」と言うふたりともほっとしたようだ。

「氷はどうされますか？」

「氷無しで、お水は同量でお願いします」

バーテンダーは少し口の端を持ち上げて頷いた。

どうやら合格の様子だ。

隣で田所が「洒落た飲み方知ってるね」とつぶやいた。

カンナの前にツァイスアップのスコッチが置かれた。

グラスを少し回し立ち昇る香りを嗅いだ後、ゆっくりと口に含んで転がしてみる。

ややスモーキーなモルトの香りがカンナの舌を優しく撫でてから喉を通って落ちた。

「別のグラスに氷水をいただけますか？」

カンナは礼儀正しく注文して、スコッチのグラスを自分の正面に置く。

出された水のグラスはそのやや右後方に置いた。
あるべき位置にすべてが収まったような気がしてカンナは気持ちが
落ち着いてきた。

今夜はたっぷり飲めそうだ。

「あなたには本当に驚かされる」

田所が隣で呟いた。

「料理できることにもかなり驚いたが、モルトの飲み方まで知って
るとは」

「私は飲みたい方法で飲むだけよ」カンナは軽く微笑んだ。

「じゃ、今度は僕のことも知ってもらおうかな」

カンナが驚いて田所を見ると、

「次の週末、葉山に行こうかと思うんだ。ヨットの季節だしなあ」
とニヤリとしながらカンナに言った。

「え？ヨット？ん〜、大きいヨットなの？」

「大きいほうがいいのか？」

「小さいと揺れるから怖くて・・・」

「そこそこ大きいヨットもあるけど、僕を知ってもらうならセーリ
ングにしたい」

「ヨットのことは全然わからないんだけど、もしかしたら船酔いす
るかも」

とカンナは控えめに断った。

「お前も来いよ。久しぶりだろ？」田所はバーテンダーも誘った。

カンナは慌てて、「もしかしたら週末は仕事が入っているかも、私・
・・」

と言ったが、田所はまったく取り合わなかった。

「いや、仕事入ってないよ。秘書に確認済み」

「えゝゝっ・・・そんなこと」

「悪いけど、朝早いぞ」

「お天気は・・・？雨かもしれないし」

「予報では高気圧で晴れだった。日焼けに注意だな」

「こんな強引な人だとは思わなかったわ」カンナは諦めてため息をついた。

「何かの罰ゲームなの？それともお仕置き・・・？」答えを求めているわけでなく、ついつい恨み言が出てくる。

「最近乗ってないからな。僕も参加させていただくでしょう」
それまで黙っていたバーテンダーがダメ押しのように言った。

カンナが諦めたのを確認して、二人はその日のことを相談し始めた。
ウイスキーを喉に流し込みながら、ぼんやりと二人の会話を聞いていた。

「え？ちよつと、ちよつと、日帰りじゃないの？」

泊まりはどうするという会話が聞こえて、カンナは慌てた。

「朝早くから準備がある。でもこいつは夜の仕事だから、閉店後そのまま葉山に行って泊まったほうがいいだろう？」

僕たちも金曜日の仕事が終わったら葉山に行ったほうが、翌日が楽なんだ」

「うう、泊まりになるとは・・・」

「君は食事担当だ。欲しい食材があつたら事前に知らせてくれるか？用意はさせておく」

「ワインはあるでしょうね？」カンナが睨みながら田所に聞くと、

「ああ、ワインは美味しいのがあつたはずだ。ソムリエも居るし・・・

・
」

と笑いながらバーテンダーを見た。

そついうことかとカンナは納得した。

要するに宴会なのだ。

「食材は適当でいいわ。あるもので賄うから」ため息をつきながらカンナはそう応えた。

その時、カンナの携帯電話が震えた。

見ると琢磨の名前が出ている。何度か着信履歴がある。

カンナは二人に断って携帯を持って店を出た。

「あ、俺だけど」

「何か用だった？」

「気になって何度か電話したんだよ」

「今着信に気がついたわ。地下のお店に居たから」

挨拶もなしでそんなやり取りをしている頃、バーテンダーは田所に興味ありげに

「めずらしいな。お前が執着してるとは」と言っていた。

「ああ、大事な女性だ」と田所は短く答えた。

「ほお。報われるのか？」

「いや、たぶんこのままだな」

「それでいいのか？」

「仕方ないんだ」

「そっか」

「ああ。それにあの女性にはこれから辛いことが待ってる。

葉山はその前の慰めだ」

田所はグラスを一気に空けた。

金曜日の午後になって田所からカンナに連絡があった。

メールで、『7時頃に仕事が終わる。からそれから出発しよう。軽く食べておいて』とメールが届いたのだ。

それまでに変更の連絡はなかったので、カンナは一応2〜3泊は出来るように鞆に詰めてはいたが、

本当に行くんだと改めて驚いていた。

鞆に入れた化粧品と着替えをもう一度頭の中で確認し、夕方一度外出した。

カンナの仕事は終わっている。

近所の薬局で相談して船酔い止めの薬を購入し、更に数分歩いて時々利用するデリまで歩いて行った。

サンドウィッチを二種類とつやつやした苺を選んでレジに並んだ。

サンドウィッチはそれぞれ2つにカットしており、全部で4切れになる。

とりあえずはこれで足りるだろう。

それらを持って滞在しているホテルに戻ると、魔法瓶に熱いコーヒーを頼んだ。

コーヒーが届くまでに、苺を洗い軽く水気をとって使い捨ての容器に入れ、

ボトルウォーターと共に食べ物を全部紙袋に入れた。

ノートパソコンの準備をしようとして、カンナはふと手を止めた。ヨット遊びにパソコンは不要じゃないかしらと思いなおして、持っていくのをやめることにした。

携帯電話の電源だけは着替えが入った鞆に入れると、持って行くも

のをテーブルの上に並べて確認する。

ハンドバッグ、着替えが入ったファスナー付きのトートバッグ、そしてサンドウィッチが入った紙袋。

実はヨット遊びは初めてじゃない。

ヨーロッパでは何度か招かれて、大きなクーラーなどには乗ったことがある。

昼間は水着でデッキに寝そべり、夜は肩の空いたドレスで豪華な食事のコース。

昼も夜もシャンパングラスを持ったままの週末だ。

でも田所のヨット遊びとは別物だろうとカンナは思っていた。

セーリングは言葉通り自分でセーラーを操作しながら競技をするものなのだろうと想像した。

フラットなデッキシューズ、コットンのＴシャツや風止めのパーカーでよいはずだ。

それらの服を東京の自宅から運ばせていた。

「いつお戻りになりますか？」と言われて苦笑が出ただけだった。

そのうち帰ることができるのだろうが、今はいつとは言えない状態だ。

「もうすぐメドがつくはずなの」と返すのが精一杯だった。

「達哉の新しい奥さんの居場所がわからないので気をつけてるのよ」と言うつと、

言い難そうに「以前、一度ご連絡がありました、それっきり連絡はございません」と留守番係りが答えた。

そのやり取りを反芻していると、電話が鳴った。田所からだ。

「今、ようやく仕事を終わったよ。これから迎えに行きます」と言うので、

「お車？地下の車寄せにしてくれる？そこで合流しましょう」とカンナは答えた。

電話を終えて時計を見ると、7時20分近くだった。

まだ仕事をしているスタッフに声を掛けて、カンナは部屋を出た。ホテルのスタッフに荷物を運んでもらい、同じエレベーターで移動する。

地下の車寄せで数分待っただけで、田所がカンナの前に車を停めた。大きなランドクルーザーだった。

荷物を後部座席に置き、カンナは手を貸してもらいながら助手席によじ登った。

途中で軽く食べるだろうからとサンドウィッチの入った袋は膝に抱えた。

運転席に座った田所はまだスーツ姿だった。

カンナは田所を見てクスクス笑いながら、「急がなくてもよかったのに」と言っと、

「なるべくはやく出発したかったんだよ」と田所が疲れた顔で言った。

「仕事残してきたの？」

「いや、とりあえず月曜までは大丈夫だ。休める」

「お腹空いてるんじゃない？何か食べたの？」

「いや」

「だと思っただわ」

そつ軽い会話をしながら、カンナは水を一本取り出しキャップを開

けた。

「とりあえずお水、飲んだら？」と差し出すと、田所は「サンキュー」と言つて受け取り、

ゴクゴクと喉を鳴らして水を飲んだ。

やがて高速に入り、安定した走行になるのを待つて、カンナは紙袋から苺を入れた容器を出す。

指で一個を摘まんで田所の口に持つて言った。

「苺よ、1つ食べてみて」と言つと、田所は素直に口を開ける。苺を租借した後で田所は「冷たくて美味しいな」と言つた。

「サンドウィッチあるんだけど、食べる？」とカンナが聞くと頷くので、

田所の膝の上にハンカチを広げてふんわりと乗せ、ウエットティッシュで手をさつと拭いてからサンドウィッチを手渡した。

「ハムとレタスのサンドよ」

「うん、有難い！」と言つて食べている間に、魔法瓶からコーヒーを紙コップに注いでホルダーに置いた。

「ブラックでよかったよね？」とカンナが聞くと、田所はサンドウィッチを食べながら頷いた。

サンドウィッチを食べてしまったのを確認して、コーヒーカップを田所に渡す。

「君は？食べたのかい？」田所がそう聞くので、「後で食べるわ。同時に食べないで、順番のほうがいいと思う」とカンナは答えた。

ポテトサラダのサンドウィッチともう一度ハムとレタスを食べ終えて、田所が2杯目のコーヒーを飲んでいる間に、カンナはポテトサラダのサンドウィッチを一切れ食べた。車内に香ばしいコーヒーの匂いが漂う。

カンナは運転している田所の手をもう一度拭いて、別のお絞りで自分の手も綺麗に拭き、コーヒーを飲む。
時々苺を田所の口に放りこみながら自分も食べ、あとは車のシートに背中を委ねた。

「眠ってていいよ」と田所が声を掛けてくれたが、運転を任せておいて助手席で眠るわけにもいかない。

「よくこんなやんちゃな車持ってたわね」とカンナは静かに聞いた。
「結構アウトドア派なんだよ、実は」そう言って田所が笑った。

「それは以外だなあ。一日20時間労働で30時間分の仕事をこなすインドア派かと思った」
とカンナが茶化すと、「まあそういう取り柄もある」と苦笑している。

「てつきりスポーツカーで来ると思った」

「ツーシーターのほうが良かったかい？家にあるけど？」

「やっぱり・・・」

「でもヨットのときはこの車だな。何でも積める」

「ヨットって故障多いの？部品とか」

「いや、故障は少ないなあ。メンテナンスしてるから」

「手をかけておかないとダメなのね」

「まあ、日ごろの手入れがよいほうがうまく動くってことかな」

「いつも面倒見る人が居るの？」

「ああ、一応マリナーに管理とメンテを頼んでいるんだ」

「そうなのね」

「久しぶりなので明日は早朝から様子見てくるよ」

「うん」

「君はゆっくり寝てていいから。でも午前中には一度乗せたいな」

「わかったわ」

「お昼までには皆揃うから、それから本格的にやるつもりだ。君は観戦してくれるだけでいいから」

「はいはい。お邪魔はしませんよ」

「いやあ、邪魔じゃないけど荒いから・・・」

「やけに楽しそうじゃない」

「久しぶりだからな」

田所はそう言って目を細めた。

「夕方はワインを積み込んで君のためにセリングするよ」

「あら・・・」

「皆で夕陽見ながらトワイライトクルーズだ」

「いいわね。楽しみにしておく」

「つまみをヨロシク！」

「あゝ、それで私を連れてきたのね」

「そういうことなんだ」

「じゃ、午前中は昼食の準備で、午後は観戦しながら夕食の支度ね。まかないオバサンじゃん」

田所はそれには答えず笑っていた。

カンナもつられて笑ってしまう。

車はとつくに高速を降りて、暗い一般道に入っていた。

高台の大きな門の前で車は一度止まった。

インターフォンを押すと電動ゲートが開き、田所は車を玄関前にぴたりとつけた。

中から年配の男性が出てきて、「坊ちゃん、お久しぶりです」と挨拶

拶する。

「坊ちやまはやめろよ」田所は挨拶を返さず、そう苦笑した。助手席に回り、カンナが下りるのに手を貸した後、二人を紹介してからカンナの手を引いて家の中に入った。カンナは「こんばんは」と言っるのが精一杯だった。

とりあえずワインセラーでワインを一本選んで開封しているところに、玄関で会った田中という男性がダイニングに入ってきた。

「お連れ様のお荷物は奥の部屋でよろしいですか？」と田所に聞く。「ああ、僕の部屋の奥隣だよ」と田所が答えると、「かしこまりました」と田中はダイニングを出て行った。

カンナとは会釈しただけだった。

ワインをグラスに注いで味見をしているところに田中がダイニングに戻ってきた。

「さて、改めて紹介するよ」と田所がカンナに言って、

「こちらがこの家を昔から管理してくれてる田中だ。今日の食材も田中が用意した。足りないものがあつたら何でも言つと良い」と説明する。

「さて、こちらは小野寺カンナさん。僕の友人だ。

今回の調理担当で、僕と同じだけここに滞在する」

簡単すぎやしないかとカンナはハラハラしながら、「小野寺です。料理は素人ですが、今回ヨット遊びに招かれたので、そのお礼に何か作ろうと思っています。よければカンナと呼んでください」と田中に挨拶した。

田中は表情のないまま、「私は別棟に妻と居ますので、お手伝いすることがありましたらいつでもお呼び下さい。この家の電話の内線でお気軽にどうぞ」と言っ、カンナをキッチンに案内し食材や食

器の保管場所を教えてくれた。

「何人くらいお見えになるかもわからないのですが、たぶん一人では無理なのでヨロシクお願いしますね」とカンナが言うと、ようやく緊張が解けたのか

「では、カンナ様と呼ばせていただきます。皆さんの滞在中は24時間に対応しておりますので遠慮なくお声かけてください」と言ってくれた。

そこに「お腹が空いたよ。何か食べよう？」と田所がキッチンに入ってきた。

田中は冷蔵庫を空けながら「ここに牛肉がありますが、ステーキなどは？」と言うので覗いてみると、すでにステーキ用に処理されたものが何枚か入っていた。

「じゃ、私が軽く焼きましようか」とカンナは言ってみた。

「お願いしてよろしゅうございますか？」と田中は素直にカンナに言い、野菜はここ、お皿はここと教えてくれる。

田中は意地悪そうな人ではないのでカンナはほっとした。

2 - 2 6 (後書き)

長く更新をお休みしていて申し訳ありません。
今日、急に時間が空きましたので、書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7496w/>

カンナ

2011年12月7日12時51分発行